

912.6-Mi91ウ

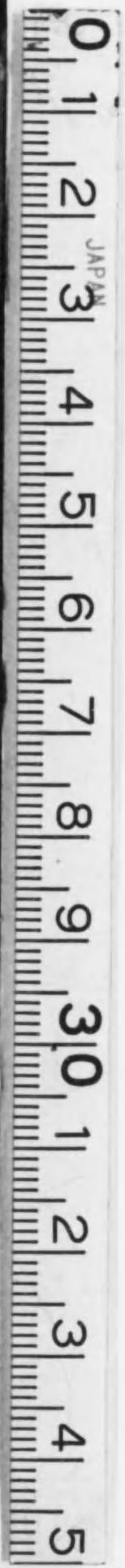


12.6  
I91

獅子

三好十郎歌由宗

X  
複写



始





912.6  
M:91



三好十郎



目次

獅子

一頁

逃げる神様

三頁

おさの音

一四頁

著者自装





獅子



脚光の眞下の所を、下手から上手へ、轟々たる列車の音。正面を通過する際は、場内をゆるがす程に大きい響きとなり、しばらく続き、次第に小さく低くなり、上手へ遠ざかつて行く。

開幕。

中央線の勝沼邊によくある、鐵道線路添いの貧しい農家——線路は、家の建っている地盤より二

三メートルも低い所を走つて居り、列車の窓から見ると、少し仰ぎ見るような角度で、しかも鼻の先きにその家の全體が見られる——あれである。従つて、脚光の眞下が線路になつているわけ

で、観客席から舞臺を見るのは列車の窓から此の家を見ているのと同じ關係になる。

なんの曲も無くたゞ嚴丈一方に建てられて、くすぶり返つた平屋建の貧しい農家を裏の方から眞正面に見たところで、上手から言えば、通り抜けの土間、八疊位の板の間(そのの上りばな近くに爐が切つてある)それに十疊と六疊の座敷が間の襖も無く横につゞいていて、六疊の奥に黒くくすぶつた板戸、その奥は納戸部屋。六疊の壁に寄せて古い眞黒な、しかし曾ては立派な品だつたらしいタンス。十疊の片隅に古い小机。縁側の障子は六疊下手の二三枚をのぞいて取りはづしてあるので、これだけのガランとした家の中が一目に見える。家の中には誰も居ない。三尺の縁



側が八疊、十疊、六疊の前にズット有つて、その手前は裏庭。庭と云つても一本の樹も無い、踏みかためた褐土の十坪ばかり。下手は隣家の菜園になつていて、その奥の桑畑の間から隣家の土蔵の白い壁。庭の上手に堀抜き井戸。その上手奥に馬小屋。但し現在は馬は居ず、農具を入れたり湯殿に使われている。井戸の傍を抜けて母家と馬小屋の間を通つて奥へ行くと、二十歩にしてその白く乾いた路面の一部が此處からも見える縣道に出られる。母家の屋根はコケラぶきに石ころがのせてあり、馬小屋の方はいつふいたともわからぬ藁ぶき。

馬小屋の手前には藁が積んであり、それに堆肥が少しばかりと、かなり大きな柿の木が一本。馬小屋と柿の木との間の地面を三角形になるように區切つて、上手一番前寄りに、この宅地の突端（つまり小さな崖の上）、線路用地との境目に立てられた黒い木柵の一部の上端が覗いている。

その柿の木の下、木柵に添つて立ち、遠ざかり行く列車を見るときもなく見送りながら（つまり、観客の方をまともに見ながら）、ボンヤリと立ちつくしている此の家の長女お雪。銘仙の晴着に別に化粧とでもしていないが抜けるように色の白い女。見るからにおとなしそうな——おとなし過ぎて少し煮え切らないような氣味がある。ツヤツヤとした高島田（と言つても田舎のことで格好はあまり良く無いが、しかしそれだけに取つて附けたようで顔になつまないのが、かえつて初

々しい）を重そうに、面を上げたまま、遠くを見ている姿が、しばらくは人の眼に入らない位に動かない。

間……列車の去つた後、あたりの物音すべてが消えてしまつた晝さがり。

奥の縣道を上手の方から近附いて来る荷車の音と、その引手の中年のオヤヂが、間の伸びた節廻しのドウマ聲で歌う聲。

## 聲

浅間あ——山さん、——なぜ——焼け——しやんす——（荷車を引いた姿が、母家と納屋の間の通路の奥にチラチラ見える。歌をやめて立寄り、此の家に聲をかける）吉春の旦那あ！ 吉春さん！ ……居ねえか。吉春さん、居ねえかね？（此方のお雪は自分の考えの中にひたり込んでいて、その聲がきこえない）おかみさん！ おかみさん！ お紋さんのキョウドウさんよ！ ……お紋さんのキョウドウおか、ござらんかい。へえ、みんな留守だよ。う。（別に用が有るのでは無いそうで、通りがりに聲をかけて見ただけ。チン、チンとびつくりする位に高い音を立て、手ばなをかんでから再び荷車を引き出す。歌の續き）裾に——お十六う



——持ち——ながらあ——（下手奥の方へ消える。それと入れ違いに、やつぱり縣道を下手から出て来て上手へ去つて行く學校歸りのカバンを下げた子供が一人。以下、最後までこの縣道には時々人通り）

……（まだ動かない。一つ事を繰返し繰返し思いつけていたために、まるで眼を開いて夢でも見ているようになっていたのである）

……そこへ縣道上手から、通路へフラリと入つて来る此の家の主人一色吉春（五十歳）。きたない野良着姿に藁草履をはいて、こげ茶色になつてしまつたカンカン帽をアミダにかぶつてゐるのがひどく間が抜けて見える。地からの小作百姓にしては身體つきがきやしやに過ぎ、物腰も言葉つきも上品で大様である。少しボツとした様な所は長女のお雪ソツクリ。それでいてこのお雪が又、後になつて母親のお紋が出て来ると、これがやつぱり、吉春とは正反對の性質の母親にも、ハッキリどこがとは云えないが、誰が見ても疑う事の出来ない位に似ている。……吉春は兩腕を組むようにしてふところに突込み、ノソノソ通路を歩いて、井戸の傍まで来てしばらくボカンと突立つている。この人の癖で、道を歩くにも何を考えると云うでもなく、たゞ夢の中の様にウ

ツラツラと無意識に足を運んで来たのが、今はその上に、ひどく眠いらしいので尙更ボンヤリしている。……しかしやがて不意にハツとして自分が何處に立つているかに気が付き、急にキョロキョロと四邊を見まわす。やがて、緊張した——と言うよりもオドオドした顔付きになつて母家の方へ抜き足で寄つて行き、首を差しのべて母家の内部をうかがう。……母家の内部に誰もいないのでホツとしてその邊を見ていたが、急にノドのかわいている事に氣付き、井戸の縁に置いてあるツルベを取る。水を汲みかけて再び氣になると見え、ツルベを握つたまゝ母家の内部をうかがつて見る。誰もいない事をたしかめてヤット安心し、同時にその様な自分の姿がおかしくなり、薄笑いを浮かべながら水を汲み上げ、ツルベの縁に口を附けて息もつかず水を飲む。……飲み終つて、残りの水を掌に受けてブルンブルンと顔を洗つている。……水を汲み上げる音で我れに返つたお雪、柵の所を離れて柿の木を廻つて来て吉春を認めるが、直ぐに聲をかけると言うわけでも無く、しばらくそれを見ている。

……しきりと顔を洗う吉春。

今歸つて来やしたの？



吉春 ブッ！ (聲を聞くや相手の方は見もしないで、顔は濡れたまゝツルベは握つたまゝ、通路を七八歩縣道の方へ逃げにかゝる)

雪 ……(此方がかえつてびつくりして)お父つあん、どうして——？

吉春 (その聲でチラッと振り返つて)……(お雪を認めて、ホッとすると同時にガツカリして) あゝんだ、雪……お前かあ！

雪 ……どうしたの？

吉春 ……うむ？ うん……ハハ、なによ……(ノソノソ戻つて来る。テレかくしに薄笑いしながらツルベを井戸の縁に置く)俺あまた、フフ……(腰から手拭いを取つて顔をゴシゴシ拭く)

雪 ……こら、こんなに水が跳ねかかつて……(父の手から手拭いを取つて、その胸から膝のあたりを拭く)まるで、へえ、子供みたい……どうしたの？

吉春 あゝに……フフ……出し抜けに聲かけるもんだ……(膝の邊を拭いている娘の高島田を見ている)……もう、えゝよ。……髪、いつ、結うたぞい？ (お雪返事をしない)……ふむ……(うつつ向いたまゝコックリをして)……よんべだ。……わし、いやだけんど、おつ母さん、ど

雪 ……(うつつ向いたまゝコックリをして)……よんべだ。……わし、いやだけんど、おつ母さん、ど

吉春 うしても結えつて、連れてつて呉れた……(手拭いを父に返す)

雪 (その手拭いで、もう濡れてもいない顔を無意識に拭きながらマヂリマヂリと娘を見る)……ふむ

雪 ……よく似合うだ。

雪 いやだ、わし……

吉春 フム ……(急にまじめな眼つきになつて、島田の前髪の下から娘の顔を覗き込むようにする)……

雪 お雪。

雪 ……

吉春 ……お雪よ。……お前、それで、えゝな？ え？ それで、えゝんちやな？ ……(お雪返事をしない)今日だよ。今日が済むと、もう後でどう思うても……しよう無えで。

雪 (うつつ向けていた顔をフツと上げて父を見る) ……お父つあん……なんで云うのな、そんな事？

吉春 なんてつて……俺あ、たゞ、氣になるで……

雪 ……だつて、お父つあん、別に、悪くねえからつて……

吉春 (娘の視線から眼をそらして、モゴモゴと口の中で)……そりや、うむ、小宮山は良え家ぢや



雪 けん、そりや……なんだ、その、お前のためには……  
ほんならば、なんで……？

吉春 そりやま、その……お前がよければ、それで……たゞ、俺あ、チョット……うむ。  
(歯がゆい位に不得要領)

雪 んだからさ、お父つあん……わしは……わしはなあ……

(言っているところに、母家の表戸——縣道に向つて開いているのだから此處からは裏になるわけ。それまで半開きになつていた——をガタビシと開ける音がして、同時にかんだかな女の聲)

聲 ほらほら、あんだけ云つといたに、まだ大戸もチャンと開けずにある！(その聲で二人ハ

ツとして表の入口の方を振り返る。吉春は忽ちキョトキョトと逃げ腰になつてゐる。お雪は黙つて

母家の裏口の方へ行きかける) ホントにまあ、なんたらダラシの無え……お雪！ お父つ

あん、まだ戻つて来ねえかえ？ え、お雪！ (吉春、彼方を見此方を見て少しマゴマゴす

るが、通路の方へ出て行くと當の相手と出會いそうなので、そちらへ行くのはやめて、柿の木の傍

をすり抜けて来て、木柵越しに下の線路を見おろしたりするが、結局、行き場が無いので傍の積糞

と堆肥の間にしゃがみ込む) お雪よ！ どけえ居るんだえ？

雪 ……あい。(母家の土間を通つて表の方へ行きかける。そこへ表戸をあけ終つたお紋(四十六七歳)が

鍬を肩に、通路をスタスタと入つて来る。汚いながらキリリとした野良着に、紺のモモヒキに地下

足袋がよく似合う。やつぱり育ちの良さそうな一脈の上品さを残しているが、しかし、百姓仕事に

身を入れはじめから一年や二年では無いらしい事は、ガツシリとした身體つきにも見える。だが

亭主の吉春をそれほどに恐怖させるほどのトゲトゲしい所はどこにも無く、井戸の方へ歩いて来な

がら姉さまかぶりになっていた手拭を取つた顔など、毎日の野良仕事で色こそ黒いが、まだなかなか

美しく、情愛の深そうな顔である。たゞ、稀れに感情が激した際不意にビツクリする程に醜い鋭ど

い表情になることがある。語尾のハツキリした早口)……お雪よ！ 全體お前、聲ばつかりし

てどこに居るだ？

雪 あい。……(土間を引返して来る)

紋 あにをマゴマゴしてんだよ？ 下駄あ持つて来ておくれ。(井戸の傍でかついでいた鍬をお

ろし、地下足袋を脱いで、附いた泥を叩き落したりする。その間にお雪が下駄を持つて来る)……

そいで、なにかえ、お父つあん、まだ戻らないのかえ？

雪 ……(吉春の姿が見えないので、その邊をチラリと見まわす。吉春は堆肥のかげに坐り込ん



で小さくなっている)

……袴あ借りに、又、行つたのかえ？(地下足袋の始末を終つて、ヒョイとお雪を見る)

うん、あの……(少しマゴマゴした末、ツルベの竿を掴んで、母の足を洗う水を汲み上げにかゝる)

親子そろつてグズになりよる。これからよその家に行くと言うのに、お前、もつとハキハキせんと、これで、他人の飯と云うものはなかなか食つて行けんぞ。お父つあんなどには似たら大變ぢや。(しんみりと、やさしく云いながら、お雪が汲み上げて少しづつこぼしてくれる水を手と足に受けて洗う)小宮山さんぢや、幸いしうとめさんは居ねえから良いが、邦彦さんの弟や妹が居る。小じうと一人で鬼千匹と云うてな、わしはお前が可哀そうな氣もするが、なに、この家にかたづいて來た頃のわしの苦勞に較べりや、屁の様なもんよ。それに、なんしろ、あんなだけ先方で望んで來ての話ぢやから、お前がチャンとしてさえ居れば、なんの事もない若奥様で、重い物一つ持たずに威張つて居れるわな。それを思うとホントにヤレヤレぢや。相談すればと云つて相談相手はなし、此處まで話を運んで來るのに、わし一人でどんだだけ苦勞したか知れん。お父つあんが、もう少し頼りに

なる人だつたら——(足を拭いて下駄をはきながら、満足そうに娘の島田の頭を見たりしていたが、又急に亭主の不在に小腹が立つて來る)……そら見い、いくら南のうちに手傳いに行つたからと云ふて、泊りこんでしもうた上に、今日という大事な日にまだ戻つて來ないと云う人ぢやもの！ そう云う人ぢや。自分んちの仕事となると畑はおろか、横の物をたてにも、ようせんくせに、よそのうちの加勢となるとヘイヘイ云うて、どんな仕事でもやつてやりよる！ そいつた人よ。(云いながら足を拭き終つた手拭いで、ついでに、顔の黒さに較べるとピツクリする位に眞白な胸や襟足のあたりを開いてグイグイと邪慳に拭きながら、縁側の方へ。お雪はその母の地下足袋を持つて土間に入つて行き爐のそばに上つて茶を入れにかゝつてゐる)第一、南も南さ、あねさんだつて、伯父さんだつて、今日の事はチャンと知つてゐるんだから、氣を利かして、いゝかげんにお父つあんに戻るように、そう云つて呉れたつて罰は當らん。……なあに、フフ！(とせうら笑いながら縁側に腰をかける)南ぢや、こんだの話に、やきもちを焼いているのよ！ なんしろ、へえ、村で二と云はれる小宮山から、わざわざこの一色の家柄と、お前の器量を望んで話を持ちかけて來たんだからね。クミちやんなんて、廿五にもなつて賣れ残つてゐる娘を持つていちや、あねさん



もキモが煮えるのも無理あねえさ。(そこでお雪がゴロハチ茶碗に汲んで来たしぶ茶をグツと飲んで) あゝ、うめえ! 雪やお前そのピン、どうしてそんなにわざと引つ詰めるようにするんだ?(娘の姿を惚れ惚れと見る) もう少しチャンと出して、クシでも入れて——  
 んでも、頭が重うて……

せつかく三十圓も出して結うたものを粗末にしたら、もつたいないぞ。……(茶を飲み) フ、南だけちや無いさ、北のうちのものや、そこから町のお源さんまで、變なこと云いふらしているげな。こう云う事になると、親類など、かえつて他人よりあさましい。一色の本家にいよいよ運が向いて来たんぢやから、喜んでいればよいに、みんなやきもちよ、あゝ。ケツの穴の小せえつたら! お源さんと来たたら、馬場の圭太郎さが北海道から歸つて来たのは、どうかこうとか——フン! 圭太郎さは、内の吉男の仲良しぢやもの、吉男が留守でも遊びに位寄るさ、なあ。(お雪がフツと眼を伏せたのを見て、その顔をさぐるように暫く見ている) ……そいで、北海道へはいつ戻るんかなあ?

……さあ……もう直ぐだろ。

おキンさん云つてたが、昨日畑で、お前圭太郎さんと話していたと?

……うむ。草取りやつていたら、圭太郎さん通りかゝつて……  
 どんな事話したなあ?

うん……兄ちやんの事なんか……

そうかね。……ソデちやん、昨日は遊びに来なかつたかえ?

……(母から見詰められ、眼のやり場に困つて、茶碗を持ち、ツイと立つて爐の方へ行く)

(その娘の後姿をマヂマヂと見ながら、言葉はウワのそらで) お茶もう一杯おくれ。……あれはとんだ良い娘だねえ。器量は良し、機場などで働いていたにしちや上品だしな。第一兩親も無いに、あゝして圭太さんと二人で小さい時からよその家の厄介者で育つたにしちや、すなをな所がえゝな。え、お雪……(後半はなんとなく娘の氣を引いて見るように云うが、お雪は返事しない) もう一杯お茶ついでおくれ。

……あい。(返事はするが動かない)

……どうした? お前——(何か云いかけるが、フト氣を變えて) そうそう、櫛を出してやるんだつけ。(上にあがつて奥の六疊の方へ行き、そのタンスの引出しから油紙の包みを取り出し) これだ、これだ。わしが此の家に来る時に實家のおばあさんが祝つて下さつたも



んで……ほかの物はみんな次々に賣つてしまつたが、これだけはお前の時にと思つて——（と包をガサガサ開いて櫛を取り出し、袖でこすつて見たり、光にすかして見たりしながら、お雪の方へ行く） たつた、これだけを残して置くだけでも、わしは、どんなに苦勞したか。お父つあんは、今でこそあゝだけどな、昔はあれでお前……なに、グズは昔つがらさ、飲まないでいればグズでいて、さて、酒がひとたらしでも入つたとなると、まるでキチゲエだつたんだから。……そつち向いて見な……（黙つて坐つている娘の背後に立つて髪をいちつたり、エモンを直したり、櫛を差したりしながら） そうよ。酒を飲まなくなつたゞけグズもひどくなつたけれど、云つて見りやこれで、どんだけ扱い易くなつたか知れねえさ。昔は、ひどかつた。泣かされたものだよ。……ホラ、本ベツコウだよ。艶が違わぬ。（更に櫛を抜いてピンヤタバを撫でつけてやる。黙つて、されるまゝに坐つているお雪。……間）

堆肥のかげから伸び上り伸び上りして母家の内部の様子をうかゞつていた吉春が、この時、母家の中が静かになつたので、立ちあがつて、抜き足をして通路の方へ——

紋

へえ、もうチツトえもんを抜くもんだ。うつ向いてごらん。（その聲で、丁度井戸の傍まで行つていた吉春が、ビクンとして、足早やに井戸の縁をすり抜けようとしたトタンに、身のこなしのへまさ、井戸側にのせてあつたツルべに腕がさわりガランガランとおつことしてしまふ。その音で）……誰？（娘の背後に立つたまゝ、耳をすます）誰だよ？（吉春、この聲で、動けなくなつてしまふ）……（お紋、土間に降りて出て来る。忽ち通路の奥に釘付けにされたように突立つている吉春の背中を見出して）……へえ、あなたは、まあ……今戻んなすつたの？（意外に物柔かな調子）

吉春

うむ……まあ……（ビクビクしながら薄笑いを浮べている）

紋

早くあがつて仕度をして下さらんと、もうソロソロ四時になりますよ。

吉春

うむ……その……（しようことなしに一二歩こつちへ來ながら）

紋

なんです？

吉春

なんしろ……

紋

なんしろも、かんしろも、そのもあのもヘッタクレもありますか！（とうとう爆發する）



全體、今日と云う日を、どんな日だとあなた、思うちよりますか？ え？ 私があいだけ云うといたのに、南も南ですよ、親戚々々と云つて、何かあるとチヨツトした事でも人を呼びつけといて、さんざんこき使うくせに、この十年、うちでどんな困つた時にも、畑仕事の加勢はおろか、米五合、菜つば一本、これを食べたと云つて持つて来るちやなし……全體あなたの爲めには大事な叔父の家かも知れませんがね、私には赤の他人、いえ、赤の他人よりやまだひどい。(連射砲の様に喋り立てる)十年前に、北の田を賣る時にだつて、一時借金の肩代りをしてくれ、そうすりや必ずその内に利息をつけて買戻すからと、私が疊に額こすりつけて頼んでも、なんだかだで聞いちや呉れず、そのため北の田もとうとう人手に渡しちまつて、それからこつち、たんぼらしいたんぼは一枚も無くなつて、こうして百姓していながら——人に聞かれてもきまりの悪い、米は買つて食つてゐる有様ぢやありませんか！ 第一、昔からの事を云えば、こつちは本家に向うは分家ですよ！ その、本家の旦那が、チヨイと口先きでうまい事を云われると、ノコノコと山羊のお産の手傳いに行くだ！ それもいゝかげんにして歸つてくれればまだしもの事、泊りがけで……それも、たつた一人の娘が一生の大事な日だち云うのに、ボ

カーンとして、そのザマはあなた、御先祖様に對しても相済みますか？

吉春 ……うむ、いや……そりや知つとるんぢやが——その、なんだ、むやみとグルグルと首に巻いていてな——

紋 首に？ なにを——？

吉春 エナをな、山羊の子がさ、そいで——

紋 エナあ！ へつ！(あきれ返つて、言句に詰つてゐる)

吉春 そいで永くかゝつて、その、やつと明け方に出よつた。

紋 そ、そ、そんなら——(と、いきり立つて来る自分を制するために、少しどもつて) そ、そりや、よいけど、濟んだら、ぢや、ドンドン歸つて來たらいゝぢやありませんか！ 今頃までベンペンと、あんな人達を相手に——

吉春 うむ、そりや——しかし南で飯ば食つて行けと云うで——(お雪も土間に降りて出て來て、入口のこつちに立つて兩親の口論を見ている)

紋 あゝた、今、幾時ぢやと思うちよりますか？ 飯を食べるのに半日もかゝりますか？

吉春 うむ、いや……そいで、直ぐ歸つて來たけど——



紋

へ？ ですからさ、するとあなた、南から此處まで戻つて来るのに、十町足らずの道を、四時間も五時間もかゝつたんですかな？ 土手で晝寝でもしていたんですか？

吉春

なに、晝寝なんぞせんよ。……あの、そら、山神さんじんさんの横の山さ、あすこで學校生徒が協同耕作やつちよるで、見てると、大根を蒔くと云うに、あんなに淺く起したんぢや……

紋

ウグ／＼とあなた、なにを云うとりますな？ 少しわかるように云うたらどうです？

ホントに……大根がどうしました？ ——そいぢや、又あなた、その手傳いをなさつていましたな？

吉春

うむ、いや……私あ、そんな氣は無かつたのぢやが、森山先生が色々聞きなされるしな、

……それから、内の春二も生徒の中に居て、みんなに教えて行つてくれと云うて、きかんで——

紋

そら、そら、そら！ あゝたという人はまあ、ホントになんと言うたらえゝ人ぢやる！ 自分のうちの仕事ときたら、それこそ何一つようせんくせに、よその仕事となると忽ちヘラヘラして手傳うてやる！

吉春

だども、そのやつばし、あれで協同耕作ぢやで、そいでまあ。

紋

協同耕作がどうしましたな？

吉春

いえさ、……その、公けの、皆でいつしよにやる仕事は、どんな事があつてもせんならんと、いつも云うとるのはお前ぢやないかな？ そいで私あ——

紋

へつ！ 私あ、そりや、そう云うとります、云う通りにやつとります！ 村の者は、直ぐに人の事をキョウドウおかゝなぞと云うて冷やかすが、それはその人達が間違うとります！

吉春

だから、まあ、その、キョウドウぢやけん、私あ——

紋

あゝたと云う人は——そりや、ふだんの日なら結構です。んだけんど、そんな、今日という日がどんな日だか忘れてしまつて、ようもそんなヌケヌケと——

吉春

いや、忘れはせん。忘れはせんけど——

紋

あゝたという人は——(いきり立つて、思はず右手を伸して亭主の襟を掴む)

雪

……おつ母さん！

紋

(殆んど涙聲になり) ホントにまあ、雲や、よう聞いとき！ お父つあんが、キョウドウ



だと！ そいでエナだそうな！ 今頃ボカーンとして戻つて来て、エナだとよ！  
(掴んだ手で吉春の胸をこづく) 私あ、なさけ無うて——  
吉春 おい、おい……(弱り切つている)

そこへ、縣道の方から通路に入つて来る人の影。それを認めてお紋が吉春の襟から手を離す。吉春は縣道の方へ背を向けているので、人の來たのが直ぐにはわからず、急に手を離されたのでボカンとする。お雪は入つて來た人の姿を認めて、ハツと立ちすくむようになるが、やがて、母家の土間の方へ引込んでしまふ。——この場の様子が變なので、直ぐには入つても來れず、通路の途中で立停つて、間が悪そうにニコニコしている青年。(馬場圭太郎。二十七八のガツシリした男。農村青年らしい單純で明るい人柄だが、しかし普通の農村青年の單純さや明るさとはチョツト違つて、かなり永い間非常に激しい生活と、非常に困難な闘いに鍛えられて出來た、鋭どいと云うよりは鈍く大まかな平靜さが、感情の小さい起伏を殆んど見せない。そのため年齢よりも老成して見える。)

圭太 ……(帽子を脱ぎ持つて、困つた微笑を浮べ) 今日は。

紋 ……(間が悪そうにマヂリマヂリとしていたが、やがて不意にケロリとして、あいその良い高聲を出す) あれま、馬場圭太郎さんですか！(どういふものか相手の姓まで呼んで、辭儀をする。やつと妻の手から逃れた吉春、ホツとして、わきに寄つて圭太郎と目禮を交し、何か話しかけたそらにしていたが、下手に口を出すと又毒蛇になりそうなので、コソコソと母家の縁側の方へ) こないだから、珍らしいもんだくさんにいたゞいて——どうもすみませんねえ。

圭太 いやあ——

紋 だども——なんせ、あなたはホントにようがしたねえ。あんだけ永えこと滿洲に行つていたあんたが、内地で復員して歸つて來なさるなんて。

圭太 自分だけ先きに歸されて、申しわけ無いような氣がします。自分ら、向うの開拓地で現地召集になつた部隊は、ソックリ内地防衛のため、終戦聞きわに、此方へまわされたんですから、まるでどうも——

紋 吉男の隊など今、どうなつていやしうね？

圭太 さあ、ハッキリした事わかりませんが、しかし、第一線部隊ではなかつたのですから



キツト無事にやつていられるんぢやないでしょうか。いづれ近いうちに歸つて來られる  
と思います。

紋 そうだとありがたいがなあ。……そうそう、いつか吉男から手紙が届きやしてね、圭太  
郎さんと逢つた時はうれしかつたつて、そう言つて來やした。

圭太 いやあ、あの時はまるきり思いがけなかつたんですからね。自分も向うへ渡つた時から  
吉ちやんには逢いたいと思つていましたが、こゝちは拓地で忙しいし、吉ちやんは部隊  
の方だし、どうにも都合がつかずにいる間に現地召集でやしよう、あきらめているとこ  
ろへパツタリ逢つちやつたんでやすから、兩方でビックリしました。

紋 そうでやしようね。まあまあ、こちらへ——

圭太 自分らは、そこへ集結してからほかへ移ることになつていたので、大休止のホンのわす  
かの時間の立ち話して、くわしい事はなんにも話せません。あれが終戦の年の春で——  
なんせ、向うもゴツタかえしてる最中で。しかし元氣のようでした。

紋 なんか内のこと、話していやせんでしたかね？

吉太 いや、別に。……そうだ、内ぢや、おつ母さんが例の通りガンガンやつてくれてるだろ

うから、氣にかゝる事あなんにも無え——。

紋

アッハハハハ、(わが意を得たりと云わんばかりに男の様な高笑い) そりや、褒めたんでやす  
かね、くさしたんでやすかね？ 吉男め、ハハハ！ だども、いよいよこんな事になつ  
て來るちうと、私でもガミガミ云ふてやつて行かんと、どうにもなりやせんからね。近  
頃ぢや、此處いらで私のことを、キョウドウおか、キョウドウおか、とひやかします  
よ。アッハハハ、ハハハ(圭太郎も釣られて笑う。疊の上にした吉春も一緒に笑う) ハハハハ  
ハ。そいで、なんでやすか、吉男は、雪のことは、なんとか言いよりませんでしたか  
ね？

圭太 ……雪子さんのこと？ ……いやあ、別に…… (笑顔を引つこめて、爐の方を見る。そこに  
お雪は奥を向いてうつむいて坐つている)

短い間——急にカチンとその邊一帯が凝結でもしてしまつたような間。圭太郎とお紋と吉春の三  
人の眼が、お雪の後姿の上を集つている。圭太郎の表情には少しばかりの動搖があるが、それも  
たゞ、話の中に不意に出て來た人の姿に眼をやつたと云うだけと取れば取れない事もない程の微



かなものである。お紋の眼は最初チラリとお雪の姿に行つただけで、あとは圭太郎の顔の表情に鋭く注がれて、そこに現われる何かを探り出そうとしている。吉春はたゞ、氣づかわしそうに娘の方を見たり圭太郎を見たりして、氣を取られ、煙管と煙草入れを膝の上で無意識にいぢくつている。

紋 ……(その緊張した空気を吹き破る様に) 雪よ! 圭太郎さんにお茶を——

圭太 ……いえ、もう、そんな——。

吉春 まあ、…… 圭ちゃん……あがつたらえ、ちやないか。…… (本来この圭太郎を非常に

好んでいるのが、お紋の前でそれをどう言つて表現してよいか見當がつかないで、先程から口ばかりモグモグさせていたのが、やつと言葉がかけられたといつた様子)

紋 そうだ、まあ、おあがりなして。雪、お茶を入れて差上げるですよ。さあどうぞ、圭太郎さん。(緊張を解いたと思うと、今度は急に少し度をこえて丁寧にあいそが良くなる。その調子が、「あなたに對しては息子との關係上、このようにすべきだからこのようにするのであるが、だからといつて、あなたの方でこれになれ親しむことは絶対に慎しんで貰わなくてはいけませんぞ」

と相手に思い知らせるような——そしてたしかに、それだけの効果の有る——あいその良さである) さあ、どうぞ、まあ!

圭太 いや、ありがたいですが、そうしても居れませんで。——實は、今日立つことにしまして、それでチョットおいとま乞いに——

紋 へえ、そりや、まあ……おなごれ惜しい。そうかな。

吉春 ふむ…… (少しあわて) そりや、しかし……もうチツトゆつくりして行きやいゝに。……

……(茶を入れている雪の方を見る)

圭太 かたづけも、すみやしたしね。それに北海道の方が、また初めつからのやりなをしでやすし、まだまるでクワの入つてない土地を初めつから起すので、雲の來ないうちにすまさないやなりません。途中チョット東京で引上者團體の打合せもありやしてね。

紋 するとなにかね、南の山のはたの畑やなんか、そのまゝにして——?

圭太 いや、全部伯父さんのところに引取つてもよろうことにしやした。どうで親父の頃から一番抵當に入つたもんで、利息などもたいがい伯父が出てくれていたんでやすから、まあ伯父の田地のようなもんですからね。



紋 んだけど、あれで二反歩をチヨット出ているづら？ ナゾエのぐあいも良いし、立派な畑だが——失禮ぢやが、伯父さんの方へいくらで——？

圭太 なに、今まで僕もソデも伯父きにやサンザンやつかいになつていゝんで、賣つたと言ふわけぢや無いです。まあ肩代りと言ふか、チットは恩返しにもなるうかと思つて、利子もまぜて三千圓、引起しの旅費として千圓ばかり貰いやして——

紋 あの山ともで四千圓？ へえ、それはまあ、たゞくれてやるようなもんぢやないかな！ あいだけの畑を——それに御先祖以來、あんたがたに傳わつて來ている田地ぢやに——そうかな！ 私んちでも、もうすこしどうにかしてれば、四千や五千なら、いつでもほしかつたがなあ！ もつたいねえ、まあ、そうかいなあ！ (涙ぐまんばかりにして惜しがる)

圭太 なあに、伯父きに引取つてもらやあ、御先祖にも申しわけがたつと思いやしてね、ハハハ、僕など、これで滿洲の開拓地で四五年、こんだ北海道へんで、廣い土地を相手にガンガン百姓やつて見やすと、どうも猫の額のような田地ぢや、どうにも氣がつまつて動きがとれやせんね。

吉春 ふむ——すると、北海道には、まだそんな廣い地面が残つていゝのかね？

圭太 いやあ、廣いや廣うがんすけど、どうせ滿洲みたいなわけにや、いきません。しかし、とにかく新しい土地を切り開くんぢやす。これからまあ、食料不足の日本にや、こゝいらの土地で百姓の數ばかりふえて作物の量はふえねえような、ゴチヨゴチヨした仕事をしつゝいるよりや、マシだと思いやしてね。第一、土地が廣い狭いよりは、問題は百姓のやりかたでやすよ。つまり大農法と言ふやつで。

吉春 へえ！ なんだが、土地のぐあいは——この、土質だな、どんなふうな——？

圭太 ちがいがやすねえ。この春から、われわれで手を附けたところなど、火山灰地というやつで。それを、おもに機械を入れてやらかすんだから、こゝらとはまるきり違ふわけで、最初はさうとう、きつうがす。

吉春 (ガクリガクリとうなづいて) そら、さうだろう！ さうだろうて！

圭太 しかし切り開いてしまやあ、あとはトラクタアで一氣にガラガラとひつくり返せやすからね。われわれの開拓團七軒、共同で三十町歩ぐらいの畑を耕したり刈り取つたりするのに、十日とはかゝりませんよ。第一、滿洲に居た時とちがつて、畑に出ていて匪賊に



おそわれるなんと言ふ事は無えですからね。満洲ぢや、言つてみりや、人の國の地面にムリヤリはいりこんで行つて耕していたわけなんでやすから、向うだつて良い氣がしないのはあたりまえだつたわけで。今度は、まあ、まつたく平和な開拓なんですから、安心して、精いつばい地面と取つ組んで行けやす。

吉春 おゝきに、そりや、そうだろ。そりや、そうだ！

圭太 今度はソデも間も無く呼び寄せるつもりでやす。小父さんも、どうでやす、汽車でもすこしラクになつたら、一度おいでやして。

吉春 そりや、まあ、ふむ……やつぱり、この、若いもんはなあ——えらいもんだなあ！

紋 (先程から珍らしく黙りこんで、一個所に眼を据えるようにして何かを考え、胸算用をしながら指を折つたりしていたが) ……麦はえゝし、上の貯水池からあんとかして水を廻せば、岡穂の二十俵位はとれるに！ こんな微碌しちまつては、へえ、しようが無え！

圭太 なんてがす？

紋 (我に返つて) いえさ、あんな良い畑を惜しいと思うてな。チエツ！ 思うめえ、思うめえ！ 雪よ、お茶はどう——(ひどく大きな聲を出す)

雪 あい。(とその聲の鼻先きへ、既にお雪が茶をのせた盆を置いている)

紋 おい！ (と、それが今迄自分の夢中に夢中になつていた彼女にとつては、出し抜けなのでビクツとしてお雪を見るが、やがて、それが自分でもおかしくなつて急に笑い出す) アツハハハ、あんだよ、不意に！ フッフ！ (その間にお雪は、茶碗の一つを圭太郎の前に置いてから、ヂツと圭太郎を見る。なにか石になつたような表情をしている。圭太郎もはじめチラリとお雪を見るが、やがて無表情のまま、眼を伏せ茶碗をとつて口をつける)

紋 ハハハ…… (と意味なく笑いながら、そのお雪と圭太郎の姿を見ていたが、やがて不必要に明るい聲と顔で) 雪も今度、いよいよかたづくことになりやしてね。

圭太 ……(飲もうとした茶碗から眼を離さないで) そりや、どうも——。

(お雪が座に堪えず、スツと立つて爐の方へ行つてしまふ)

紋 (その娘の姿を見送つてから、わざとのようにガラガラした快活な聲で) 小宮山さんから是非と云いますでね。邦彦さんという人は、ちつとボツとしているだなんて云いやすけどね、なあに、此處いらぢや人が良い目をするると直ぐにやつかんで、そういうことを言うで。女が甘を過ぎていつまでもブラブラもして居れんし、第一それぢやコクサクに反しやす



からね、ハハハ。吉男など出征する前に、雪に就いてはいろいろ云うてたことも有つたようだが、こんなことになれば、圭太郎さんもひとつ、喜こんでやつて下さい。

圭太 はあ、いや、それは……。

吉春 だども、なんだな、こうして戦争がすんで間も無えが、君なんど、よく思い切つて、そいだけの氣もちになれたなあ。

圭太 ……いやあ、はじめは、これで、スツカリわけがわからなくなりやしてね。ことに満洲さえ確保すりやと、たゞきこまれていたんでやすから、どうにもならねえ氣持でした。どこへその氣持を持つて行つていゝか——言わば、満洲へ渡つたりしてお先棒かついでいたのは自分達でやすからね——それを思うと、今でも、誰に詫びていゝのか、わかりません。たゞ、今後はまあチツトでも間違いのすくないやりかたで暮して行きたい——それにや、この縣のように山ばかり多くて平坦地のすくない所では、急に復員して来た僕たちなど、差しあたり、かつぎ屋にでもなる以外に方法は無いし、だけど、そんな事あしたく無い。いろいろ考えて、せめてまあ、向うでチツトはおぼえこんで来た開拓をしながら、ヂツクリと腰をすえたいと思いやしてね。

吉春 なるほどなあ！ すると、吉男なども歸つて来たら、どんな事になるもんかなあ？

圭太 よつちやんは僕とちがつてズツト軍隊でやすから違うかも知れやせんが、いろいろ考えていることでやしよう。いづれにしても、これからは、今までのやり方ではダメだろうと思います。農業の技術にしても、もつと科學的に、と言いやすかね、もつと少ない力で、もつとたくさんさんの收穫をあげるように——なんしろ、一切合切、しんき蒔直しですから。

吉春 ふむ、なんしろ、えれえもんだなあ！

紋 そらそら、お父つあんの、えれえもんが、はじまつた！

吉春 だどもさ、とんかく、えれえもんぢやないか近頃の若いもんは！

紋 いえさ、こないだから圭太郎が見えさえすれば、そのたんびに同じような事ばかり、なん度聞きや、あんたは氣がすみますな？ そんなに感心なさるなら、いつそあんたもフンパツしていつしよに附いて行きやしたらいゝ。

吉春 そ、そりやお前、私だつて、行けるもんなら——

紋 ハッハハハ、同じ若いもんと言つたつて、向き向きでやすからねえ。吉男なんど、此處



の跡取りでやすからね、歸つて来れば、一色の家で踏んばつて貰わんことにや。それまでには、チツトでも田地を買い戻したり——お雪にしたつて、親類として多少は力になる所へ片づけて——なあ圭太郎さん、あんたなど、一人身で若えんだから、ひとつまあ、ウンと働いてくださいませ。ハハハ、この、ミンシユシユギのためでやすねえ、ハハ！

圭太 え、そりや、もう……そいちや、僕あ、これで——どうか皆さん、お元氣で。

紋 そうかなあ、まあ、もちつとユツクリして行つてよろしうがんしよに。

圭太 いえ、もう——四時の上りでやすから。それに、ほかにもチョット寄るところが有るんで。……(微笑して)小父さんのお獅子も、とうとう見せて貰えなかつた。實はそいつを僕あ楽しみにしてただけだ。

吉春 もう、へえ、しかし……そんな時でもあるめえ。

圭太 んでも、僕など子供の時から見てるで、なつかしいもんなあ。第一、一色の家のお獅子と言やあ、昔つからこの邊の里神樂では一番の名物なのに、惜しいや。

吉春 ハハ(とお紋の方を氣にして)あれも酒でもくらつていた時分の事さ。

圭太 へえ——？

紋 フツツリと酒を断ちなさつてな。ハハ、そいでも、まあ、わしら感心していやすよ。

圭太 そうでやすか。そりや……しかし、あんなに好きなんだから、たまには少し位——

紋 あゝに、そんな、酒など飲んでウカウカしてる時では無えですからね。……こないだ、あんだからお土産に貰つたお酒も、まだ手をつけんと、あゝして——(ダンスの上に置いてある陶器の酒壺の方を見る)

吉春 (これもその方を見て) 北海道でもコーリヤン酒など出来るようになったかな？

圭太 いや、まだ本式にやいきませんが。でも相當きついにや、きつい酒です。

吉春 まあ、なんだ、せつかくの物だで、お雪のおめでたの式の時にでも、いたゞこうと思つてな、ハハ。

圭太 (吉春の言葉は耳に入らなかつたふりで、なに氣なく縁側から腰を上げて) ちや、これで——。

紋 そうかね、そりやま、あんだもよく身體に氣をつけなして——。

吉春 ちや、俺あ停車場まで見送りに——(腰を浮かす)

紋 そりや、なんだけど——でも、間もなく、小宮山さんから見えるから、あゝた——

吉春 んでも、ほんのチョツクラ——



圭太 いえ、もう……どうせ、ほかへ寄る所もあるで。どうか、もう。では、これで——（ビシツと頭を下げる）雪子さんも、どうか——（爐の傍に頭を垂れて坐っているお雪にも頭を下げてからスタスタと通路の方へ出て行く。吉春は縁側から庭におりて、通路の方まで見送りに行く。圭太郎は通路の奥で、吉春に向つて、もう一つ辭儀をして縣道を下手奥へ消える。見送っている吉春）

紋 あゝた！ あゝた！（と、放つて置けば又人の後について遊びに行つてしまふ子供でも呼びつけるような聲を出して、通路の方へ來かける）あゝた！

吉春 （浮かぬ顔をして戻つて來る）……おい。

紋 おいちやありませんよ。もうソロソロ向うの人が來る時分ぢやから、チャンと着物でも着かえていて下さらんと！ さあさ。（と吉春の尻を押すようにして六疊の方にあがり、ガチャガチャとタンスの引出しを開けて吉春の晴着を取り出す）あい！

吉春 ……わしは、これでよかろう。

紋 よくありませんよ！ そら！ （と吉春のきたないハンチンを引つべがすように脱がせて、ゴリゴリした晴着を着せかけてやる）はい、帯。（言いながら自分も野良着を脱いで、紋の附いた着物

雪 紋

を着る。この方は手早い。帯を締めながらまだ爐の傍を離れぬお雪の方へ）そいで、雲、三寶やチヨウシなど、チャンと洗つて置いたゞらうね？

……うん。  
お酒は、配給のを三軒分ゆづつて貰つてあるから、それでよしと。（自分一人でうなづいて）でと、肴には凍豆腐の煮付けと、（更にお雪に）ニンジンのゴマアエは出來たなあ？（帯の上を平手でトントン叩きながら）

雪 紋

……出來てる。  
あにを、そんな浮かぬ聲を出すな？ もつとハキハキせんと！ チャンと、お白粉でも付けて……去年買ったのが、まだ有つたらうが？ え、お雪？

雪 紋

うん……でも——  
なあに、恥かしい事なんぞ有りはせん、一世一代のぢぢやもの、思いきり綺麗にして、向うの衆をビックラさせてやるがえゝよ。ハハハハ！ （氣の立つた高笑いで、袖や襟の具合などをなをしている）

吉 春

……なあ——（これは何か考え考え、まだ白ちりめんの帯を締めながら）……だども、へえ……



なんとかならんかな？

紋 なんとかか？……なにがですな？

吉春 む、いや……そのう——。

紋 酒ですか？ そりや、今日は特別ちやから、あゝたにも飲んでいたゞくとして、だから、内のぶんのほかに二升餘り借りてあるから——

吉春 いや、その……雪のことさ。

紋 雪がどうしやした？

吉春 いやさ、その……小宮山の方のこと……わしはどうもその——

紋 また、何をウダウダ言うています？ ハッキリ言うて下さいよ！ 小宮山がどうしましたな？ どうかならんかとは、何がですな？

吉春 いやさ、俺あ、たゞ、その……チョットそんな気がしたで——

紋 (チレて) だからさ、だから何が、全體何がそんな気がしたんですかな？ 早くハッキリ云つて下さい、この忙しいのに、ホントにキモの煮える！

吉春 いや、本人さえそれでよければ、それでいゝようなんぢやけど——(まだ言っている)

紋 だから、一體全體、何がどうなんですすよ？ すると——すると、なんですか、お雪が小宮山へ行くと決めたのを、今になつて、どうにかならんかとおつしやるんですか？

吉春 だから、本人さえ、それでよければ——

紋 (とうとう怒鳴りはじめる) そいちや、そいちや、本人が望まないのに私が無理押しつけに行かせる事にしたとでも言うんですか？ そんな事を、今更になつてあゝた言うんですか？ そいちや、そいちや、雪は私の實の子ぢやないんですか？ 自分の腹をいためて此處までチャンと育てゝ来た自分の子を、この私が無理押しつけに片附けようとしているわけですか？ ホントに馬鹿も休み休み云つて下さい！ そりや、話は私が運んで来ましたよ！ 私がしなければ、あゝたはその調子で何處へ行つても口一つきけやしなないぢやありませんか。私が運ばないで誰がしてくれますな？ それと云うのも、私とお雪の行末が仕合せになるように、それにや家がらばかり良くつても内みてえに貧乏な家でなく、チットは樂の出来る家へと思つて——そうですとも、貧乏世帯を背負つて、あゝたみたいな甲悲性の無い人を相手にやりくりばかりして働き通して来た苦勞は、私だけでたくさんです。お雪にや、そんな苦勞はさせたく無い！ (いつか涙聲になつている)



そう思うて、そう思やこそ、小宮山の家では嫁になり手の口はいくらでも有るのを、サ  
ンザ苦勞をして、ようやつとの事で、私は話を此處まで運んで来たと言うのに——あゝ  
たの言う事を聞いてりや、まるで私が、ウヌが見榮やえ、ようのために娘の仕合せなどと  
考えもしねえで、いゝくらかげんの所に無理に片付けようとしてゝもいるように——そ  
んな、そんな事を今更云われて——

吉春

いや、なにも、その——（相手のけんまくにちぢみ上つてしまつて、それ以上は言えなくなつて  
いる。それより前、お雪は爐ばたをツと立つて、八疊から奥の納戸部屋に姿を消している）

紋

よござんす！ そんなに私のすることが氣に入らんきや、なあに、話はこれぎりにして、  
少しばかり恥を掻きあ濟む、私あ引つ込んでいやすから、あゝた小宮山へ行つて、都合  
で取りやめにしますからと言つて来て下さい！ 私あそんなの、ごめんです！ ごめん  
です！ 全體、この話と言うものは、雪もあゝたも初めから反對なんどチツトもしねえ  
から、そいで私もその氣になつて取りかゝつた話で——

尙も言いつのろうとしている所へ、奥の縣道の方から女の聲。

聲

お紋さん！ お紋さんのおかみさん！ （その聲でお紋はビタリと言葉を切る。しかしまだ吉  
春の顔を覗んでいる）居ないかね、お紋さんのおかみさん？ （云いながら、通り抜ける土間  
の突當り——表口——に、白く光る縣道を背にてシルエツトで立つ近所の女房のお才。氣のよさそ  
うな百姓女で、白い割烹着を着ている）

紋

……（聲の主が誰であるかゝわかり、それに對して、今迄の言葉とは似ても似つかぬ愛嬌の良い聲  
を出す、眼は相變らず三角にして吉春を覗みつけたまゝ）へい、お才さんのおかみさんかね、  
居りますよ！ （云いながら、もう一度凄じ眼で亭主を覗み据えて置いてから、板の間の部屋の方  
へ）……こりやまあお才さん、こないだはまあ、小米の粉をたくさんに貸して下さつて、  
どうも——（お才の身なりを一眼見て）へえ、今日は、あにか——？

お才

それがさ、こつちの班に今朝云うのをツイおつことしていたと云うから、阿呆な話ぢや  
ないかね。もつとも婦人會はもう解散したんぢやから無理も無えけど、それでホンの先  
程あわてゝ駈けつけて来て、そう云つてね、私あ、へえ、先づ班長さんの一色お紋さん  
に云つてくれねば困ると云つたども——



紋 へえ、へえ——(と、相手のいかにも百姓女らしいクドクドとした言葉を打切るように) そいで  
どんな用事かな?

お才 あんでも、復員の人と引上者の一杯乗った汽車が通過するで、驛の方で接待をするちう  
です。お茶やお菓子はどうチャンと用意が出来とるそうぢやが、——人がたりるので、  
困つてさ。縣の方から見えてる人が、もとの婦人會の人に出てくれつて、そう言つたそ  
うで——

紋 そいで、なん時の汽車な?

お才 三時二十分の下りぢやそうなが——

紋 そら、いかん! 三時の下りならもう直きぢや。えゝと——んだが、困つたなあ、實あ  
な、お才さん、今日はもう間も無く、小宮山さんの衆がお雪を見にやつて來ると云う事  
になつていてな——

お才 へえ、そいぢや、いよいよ結納と云う事に——? そりやおめでとうがんす。

紋 いや、なにも結納と云うわけぢや無いけんどな、どうせうちらぢや、そんな格式張つた  
ことをする柄ぢや無えといくら辭退しても、先方ではどうしても、とんかく嫁見という

ことになにと言うてね——はあて、困つた。

お才 そりや居てやらんといけません。なに、ようござんす、今日一度位、それに三分か五分  
の停車の間に湯茶を差し上げる仕事ぢやもの、あんた一人居なくても差しつかえ無えか  
ら。——そうでやすか、お雪ぢやんもいよいよそう云うことになれば、お宅でも安心ぢ  
やな。……そいぢやま、私あ急ぐから、チヨククラ——縣の人へは私がそう云つときや  
すから——やれ忙しいぞ! (笑いながら縣道を下手の方へ立去りかける)

紋 (あわてゝ) いや、お才さん、お才さん、私も行きやす! チヨククラ待つて下すつて!  
お才さんのおかみさん!

お才 そうでやすか……でも今日一日位、そんな無理せん——(足をとめる)

紋 いや、お雪の事は家の中の事でやす。引上げや復員の人接待とあつちや、公けのこと  
ぢやから——なに、小宮山さんの衆は、内の人が戻つて來ているで、大丈夫ぢやから  
——(云いながら大急ぎに六疊にとつて返し、再びタンスの引出しから白の割烹着を取出し、割烹  
着に手を通しながら、ヒョイと見ると、帯を締め終つてボカンと棒立ちになつてゐる吉春。それを  
チロリと見て、低く押えた聲で口早やに) あゝた、そいで——袴は?



吉春 袴あ？

紋 チェッ！ また忘れましたな？ 南から借りて来るように私があれだけ云うたに――。

吉春 ……どうも、その……

紋 袴が無くてしょうがありませんかな！ 仕方が無い、そこのおキンさんの家で嘉六さの袴を借りて来なさい！

吉春 でも、俺あ、袴など穿かねえでもよからうで――

お才 お紋さん、行くなら急がんと遅れやすがな――

紋 へいへい――（と表へ返事をしながら、着終つた割着に着に白袴をかけようとしていたが、ちれ切つて、眼をキラキラ光らせるや、何も云わず、タンスの横に立てかけてあつたソバ打棒をムズと掴んで吉春の方へ）

吉春 フ！（聲の無い叫び聲を上げ、あわを喰つて横つ飛びに縁側へ。ころげるようにそこに脱いであ

つた草履を足に突かけるや、庭を走り、井戸の手前を通り、通路を走つて奥縣道を上手に消える。  
逃げ足は早い）

紋 ……（それを見送つてから、棒をタンスの横に置き、サツサと板の間の方へ出て行つて、その邊を

見まわして）お雪！ お雪！

雪の聲 あい……（納戸部屋の方から）

紋 ちや、私あ一つ走り行つて来るからな――（奥の壁ぎわに置いてある鏡臺を、いきなりひつかゝえて爐の傍に持つて来て）チャンと綺麗にしているだ！ 此處に鏡臺出しといたから！

いゝね！ おつ母さんの云う通りにしないと、ホント、もう知らんぞ！――お雪！

お雪 ……（何か返事をするが、よく聞えない）

紋 すぐに戻つて来るで、いゝね！（と言う間も土間に降りて下駄を穿き、カタカタと縣道の方へ出て行きながら、愛想の良い聲で）お才さん、お待ちどう……（云いながら、お才と二人の姿は小走りに奥下手へ消える。以上、お才が現われてからのお紋は殆んど眼にもとまらぬ四角八面の活躍ぶり。アツと思う間に家の内外に人の姿はまるで無くなつてゐる）

――間。

お雪は納戸部屋で何をしているか、コトリとも音を立てない。少し離れたどこかの家で鶏がコケ



ツコツコ、ケケケと鳴く聲が、かえつて此の場の静寂を深める、  
そこへ、少し足音を忍ぶように前後を見まわしながら、縣道上手から通路の方に入つて来るソデ  
(二十三三歳)。質素な外出着に、小さいフロシキ包みを持つている。もともと氣の勝つた快活な  
女だが、今は少し緊張して無口になつてゐる。

ソデ ……(通路と裏口の角の所から家の中を覗くようにしながら、低く押えた聲で) 今日……今日

は……(屋内に人影が無いので、庭や納屋の方を見まわしていたが、やがて縁側に近づく) 今日  
は……雪ちゃん……(返事なし。暫くの間、聞きすましていてから、今度は前よりも少し大き  
な聲で) 雪ちゃん! (返事が無い。ソデ立つて考てえいる。……やがて、諦めて立去ろうとし  
て歩み出すが、念のためもう一度) 雪ちゃん、居ないの?

雪 ……(納戸の板戸をスツと開けて八疊に出て来る。そして八疊の真中に立つたまゝソデを見つめて  
いる)

ソデ あゝ……(これも庭に立停つたまゝ、お雪の顔を見守る)……どうしたの?

雪 ……(尙ソデを見詰めていたが、フト疊の上に坐り) ソデちゃん……私、駄目だわ。……

(両手で顔を蔽ふて、疊の上に突伏してしまふ)

ソデ ……(一切を諒解した、ようなくしガツカリしたらしい、でも、相手をとがめるといふのでは無  
く、むしろお雪に同情していたわるような顔付きになり、しかしにわかにならざるべき言葉も見つか  
ぬ様子で、相手の頭髮と背中を見守つてゐる)

問。――

雪 ……(顔を半ばあげて) 荷物も拵えたんだけど――どうしても思い切りが付かないの。

ソデ ……。

雪 ……おつ母さんやお父つあんの顔を見てゐると――。

ソデ ……(黙つて、うなづいて見せる)

雪 ……圭太郎さんにはソデちゃんから、よろしく云つて――。

ソデ ……(相手を慰めるように) いゝのよ、いゝのよ、こないだから、兄さんも大概あきらめ  
ていたんだから……それに此方の話が此處まで運んで來ているのに、もともと無理だつ



ただだから——。

雪 あんだけ前から約束しといて——それに兄あにさんからも手紙でそうしろつて何度も云つて来ていたのに——おつ母さんが、自分一人でドンドン話を進めるのを見ていながら、私にはどうにも出来ない。……

ソデ いえ、小母さんにしたつて、雪ちゃんが生合せになるようにと思つて、そいで一所懸命なにしてるんだから——。

雪 いえ、みんな私がイクチなしかから。……駄目なんだわ。……兄さんが歸つて来たたら、キツト怒られる。でも仕方が無いわ。……へえ、もうどうでもいゝの。おつ母さんの云う通りに——それが、へえ、私の運命でしょ。

ソデ ……(返す言葉も無く、ボロボロ涙をこぼしている)

雪 ……かんにんしてな、ソデちゃん。

ソデ ……(思はずウツと洩れて来る泣聲を自分で噛み殺すようにして、何度も何度もコツクリをして見せて)……そいぢや……急ぐから、私、これで——(泣聲になりそうなので、齒の間から切れ切りに云つて、通路の方へ行きかける)……んでも、お別れに、兄さん、汽車の窓から見

雪

れるように、雪ちゃん、此處に出ていてやつて——四時の上りぢやけん。

……(何度もコツクリをする。しているうちに耐え切れずなつて袖で顔を蔽う)かんにして！  
圭太郎さんにそう云つて——かんにして頂戴！……(疊に突伏してしまふ)

ソデ、泣きながら通路をスタスタと縣道の方へ出て行き、奥下手へ小走りに去る。……チョット間が有つて、奥の縣道の上手から吉春がタトウ紙に包んだ袴をかゝえて出て来る。そこへ来るまでに既に、自分の家から走り出して行くソデの姿に眼をつけていたと見え、通路への曲り角に立停つて、向うへ走り行くソデの後姿を見送つている。……やがて自分に返り、通路を通つて縁側の方へ来る。

吉春

ふう……(ヤレヤレと云うやうな吐息をついてから、手にかゝえた袴の包を見、それからその邊を見まわす。上にあがる。あがつてヒョイと見ると、八疊に突伏しているお雪の姿)……(立つたまゝそれをデツと見ている)……どうした？

雪

……(動かない)



吉春 ……どうしたよ？ ……え、雪？

雪 ……

吉春 (娘の姿から何かフツと来るものがあり、追求しようとする調子は全くなくなつて、シミジミとした眼色で、袴の包をそこに置く。……そして、とりとめの無い調子で) ソデちゃん、来たようちやが—— (云いかけるが、それきりで口をつくむ。それが、云いたい事が口から出そうになつたのを、押えて黙っているのとは違つて、氣持にはあつても、それを口に出して云う事の方は胸忘れをしてしまったという風の例の通りで、ボンヤリして突立つているのである) ……

雪 ……(父が言葉を切つてからあまり永く黙っているの、フト上體を起す。涙は既に乾いてしまつて、思つたよりは明るい顔をしている。まぶしそうにして父を見あげる) ……

吉春 ……どうしたよ？

雪 うん。……(父の足もとのタトウ紙に眼をやる)

吉春 (その視線を追つて) ……西のおキンさんから借りて来た。——嘉六さんのちや、タケが違うだらうと云うていたがな……あにも、人から借りてまで穿くことも無えと思うけど……へえ、仕方が無え。フ……(娘を見てニヤリとする。お雪も釣られて微笑。お互いにあわ

雪

れむような寂しい微笑)

んでも……(タトウ紙の所へ来て、包をとき、袴を出す。古い仙臺平である) ……以前は、うちにもいくつも有つたわね。……お父つあんが袴を穿いて、お獅子を舞つたのを、私おぼえてる。(云いながら、袴のひもをほどこしている)

吉春 へへ……なに、俺がやるからえ。……それよりもお前、チャンとしとかんと、又、

叱られるぞ。

雪 いゝの。

吉春 んでも(袴のひもをお雪の手から取つて) ……白粉でもチャンとして……怒られても、知らんぞ。

雪 ……(しかた無く、立つて、母親が爐の傍に出しといてくれた鏡臺の方へ行つて坐る。しかし、鏡

の中の自分の顔を見ているだけで、はかばかしく化粧もしない)

吉春 えゝと……(此方では袴を穿きにかゝつている。この袴が恐ろしく長過ぎる。スソを丁度に穿くと、上の端を乳の下あたりに締めなければならぬ。困つて、それを眺めている)

雪 ……(鏡の中を見たまゝ) お父つあん。



吉春 あんだ？

雪 ……(何か云いそうにするが、どう云つていゝかわからぬらしく、やめてしまう)

吉春 ……(黙つて袴のひもを巻き直していたがフト手をとめて、お雪の後姿を見る。やがて)雪……お前、圭太郎君と……何が話が有つたのとは違うか？

雪 ……(後ろ向きに鏡の中を見たまゝ、暫くヂツとしていてから)……どうして？

吉春 ……うゝん、何もなきや、それでえゝが――。

雪 ……うゝん、何もなきや、それでえゝが――。

吉春 なにさ……そんならいゝ、別に――(鏡の中に小さく寫つている娘の顔を見ながら)えゝな、雪？ お前、小宮山で、えゝな？ それを、お前が今間違えるちうと、後で泣くことになる。……そうなると俺にしても、そいから、つまりがおつ母さんにしてもだ、つまりが、つらい思いをする――。

雪 ……(父の言葉のうちに次第にうつむいて来て、前髪が鏡につく。白粉の壺を握つた左手がワナワナとふるえている)

吉春 ……俺に似て、お前も気が弱い。……此の際、どうしろこうしろと俺にや云えんが……

たゝな、どうでもえゝから、これは自分の一生の事ぢやから、自分が……仕合せになるかならんかの境い目ぢやから、よく考えて、こうと思つたら、思い切つて――(ふるえている娘の左手に、眼が行つている)……人間、一生の一大事の時は……思い切つて……崖から飛び降りる氣で……自分のホントにしたいように、せにやいかんぞ。……俺がこんな事云うと變ぢやが……自分のホントにしたいようにせんと、一生の一大事の時だけは――。

雪 ……お父つあん、私あ――私あ……。

吉春 ……(その娘の思い入つたような聲に、お雪の方へ歩み出す。そのトタンに、長過ぎる袴の前スソを自分で二つ三つ踏みつけてヨロヨロと前につんのめつたあげく、板の間の部屋の方へ轉ぶ)へ！……！(その音でびつくりして、振返つてサツと立ちあがる。床の上でモガモガしている父の姿)まあ、お父つあん、どうして――？

吉春 へ！ おゝ痛え！ へッへへへ、あゝに、袴あ踏んづけた、へへへ！ (顔をしかめて痛さをこらえながら、這い起きる)ハハ、へへへ！

雪 まあ！……(見ている間におかしくなつて、これも笑い出している)



吉春

見ろ、まあ！……な雪、……でねえと、ほら、これ見ろ、こんなになる。……自分の一生の大事な時にだけは、テキパキしねえと、俺みてえに、これだ！見ろ、まあ！こう、俺みてえになつちや、おしめえよ。な！俺だつて、これで、いつそ北海道あたりに出かけて、もう一働きと思うことだつてあら。だども、へえ、あんしろ、このテイタラクちや……んだからよ——。

……（笑いが引込んで、泣けて来る。耐えきれず、両手で顔を蔽う。轉んで打つた脇の痛さをさすりさすり、その娘の姿を見ている吉春。——間）

しばらくして、下手から近づいて来る列車の音と汽笛。

54

吉春

……（その列車の汽笛と音に耳をやつていたが）へえ、三時の下りが通る。……引上げの人が乗つているといふたな……（娘に向つて尙云うべきことがありそうできて、口に出て来ないまゝに、近づいて来る列車の音に氣をとられ、歩くともなく縁側の方へ出て来る。お雪は疊に突伏したまゝ）……ふむ……（袴のつまを取りながら下に降り、草履を突かけて庭を横切り、櫓

の方へ来て、櫓の上から上手の方を覗く。間近かに近づく列車の響き。「雪、来て見い」と娘の方を振り返つて云うが、その時には既に列車の音が正面を通過しつゝあるので、その聲は列車の響きに消されて聞えない。お雪は突伏していた上半身を起し、坐つたまゝで通り過ぎる列車の窓を見る。下手の方へ通り過ぎて行く列車の音。吉春は櫓つたいに下手一番前まで来て列車を見送つている。遠ざかり、やがて消え去る列車の音。……お雪は眼を据えて、列車の去つた方を見ながら石になつたように動かぬ）……ふむ……氣の毒だの……御苦労さまでやした……（一つお辭儀をして

から母家へ戻りかけるが、うつかりして袴のつまをとるのを忘れていて、再び前裾を二つ三つ踏みつけヨタヨタするが、今度は轉ぶに至らず、袴に腹を立てた顔で、庭を横切つて縁側へ。歩みながら娘と顔を見合せて微笑みかけるが、その娘はあらぬ方を見つめた兩眼が少しすがめになる位にして動かぬ。何かを考えているといふよりは、自分の心の中を見つめている姿。その様子に吉春は、少しギョツとした様に改めて娘を見る）……お雪……（その聲が聞えぬかお雪は動かぬ。しばらくの間、吉春は娘の顔を見守つているうちに、次第に落ちつかなくなり、娘の視線の向いた方を見返つたり、又娘の身體の周圍をウロウロと見廻す……間）……お雪、どうしたまよ、お前

55

雪

……（父親の聲がやつと耳に入つて、フトそちらを見る。そして、不意にビツクリした様な顔で四

——？



邊をキョトキョトと見廻した末に、再び父親の顔を見守っていたが、何か怒った様な表情でツト立つて、爐の方へ歩いて行く)

吉春 ……どうしたと、全體？ ……(上にあがる) お雪よ……(しよ事なしに座敷の眞中に坐り込む。……そこへお雪が、用意して爐邊に置いてあつた酒盃を乗せた古い三寶と、銚子ちやうしを持つて出て来て父の前に据える)

吉春 ……(ビツクリして、三寶と銚子と娘の顔を代る代る見位べる) ……ど、ど、どうして……これ、どうするんだ？

雪 (初めて靜かにニッコリして) お父つあんに、一杯あげる。

吉春 んだから、この酒を、おらが何も—。

雪 ……いゝから、おらがあげるから……(三寶の上の酒盃に銚子から酒を注ぐ)

吉春 だどもよ、これは、へえ、小宮山の衆や、南の伯父さや、町のお源が來たらあげるもんぢやねえか。

雪 だどもさ、どうでお父つあんも一緒にあがるんぢやから。その前に、ホンの一二杯……おらが酌をしますで。

吉春 うむ……そりや、ありがたいが……(ズルそうに微笑して) しかし、又お母さんに叱られるぞ。

雪 なに、酔うほどはあげねえから。

吉春 だども……變だな、なんだか……(言いなながらも、もともと咽喉から手が出そうに好きな酒で、いつの間にか酒盃を取り、鼻の下に持つて来て香をかぐ) 何しろ、へえ……(舐める様にして飲む) フン、ホウ、どうも、……味がどうも妙ぢや。

雪 二年近くもやめていたともの。(もう一杯注ぐ)

吉春 (ニタニタと笑みくづれて) んでも、わりにえゝ酒ぢや。(更に咽喉を鳴らして飲む。その酒盃を娘の前へ出して) ぢやあ、ま、なんだ、お前も一つ—

雪 いやあ、おらあ—

吉春 えゝから飲み、一杯飲んで氣をしつかりせんと。お前の様に、へえ、氣が弱くてはどもならん。

雪 ……(酒を受けて) それでは一つだけ。(吉春酒を注ぐ)

吉春 グット一息に飲むだ。(ためらっている娘を勵ます様に手まねをして見せる。お雪一息に飲干す)



雪

ホウえらい、ホウ！（お雪が酒にむせて三つ四つ暖入る）ハハハハ……  
……ホホホホ、ハハ。（父娘二人が聲を合せて笑う。笑い終つて眼に溢れて来た涙を指の先で拭いている）に、が、い、わ。

吉春

ハハ……だども、なんだぞ、おつ母さんが、あゝして一人で騒いでいるのも……俺が甲斐性が無えから、しようねえ……やつぱし、なんだ、お前の爲に良かれと思うてするのとちやから、悪く思つたら、あかんぞ。そら忘れたらいかん。あれでおつ母さんにしてみりや、一所懸命ぢやで……。

雪

……。

吉春

まづ、あんな性分だ。あゝしないとこの一色の家が再興出来ないと思つてゐるからだ。しかし、いまのこゝいらは、全體どんな事をして昔には戻らん。百姓も商人も昔はチヤクイことをしたり、又自分の骨折次第ではどんなにでも身代を太らすことが出来た。それだけ抜け道があつたんぢやが——そりや今でも抜け道をくゞつて、うまくやろうと思えばやれんことは無え。だどもそんなことをしても始まらんし、第一そんなことをしてはいかんのぢや。早い話が、人々が慾をかい、自分の家の田地を殖やしてみ

雪

ても、たゞ田地の持主が代るだけで、この村で出来る米麥やなりものが殖えるわけぢや無えもんなあ。田地は誰の持物であろうと、要するに作物が澤山出来ればそれでいゝのよ。……こねえな事を云うとおつ母さんから又怒られるが、みんなが自分の家だけのことを大切に思うて財産を殖やしたり、家の格式を大切にしたり、出世をしようとして、一人一人眼の色をかえてガツガツし始めたら、世の中は全體どうなる？

吉春

……（二杯の酒で雄辯になつて来た父親の顔を微笑しつゝ見ている）  
な、そうだろうが？ おらはそう思ふ。それは、云つてみれば一色の家も大切、お前達孫子の行末も考えてやらんならんけど、お母さんみてえに血眼になつて、田地や財産を掻き集めて子供に遺してやつても、財産などゝ云うものは、運次第で無くなるとなれば明日にも無くなるものぢや。そんなものよりも大切なことは子供にしつかりした量見を遺してやること。そいで子供がちゃんと人らしく、小さいながら世の中の役に立つて、幸せにやつてゆければ、親としてこれ程嬉しいことはねえわけだ……なあそうだろ、雪、そうぢやないか？

雪

……（父の言葉に頷いていたが）もう少し飲むな、お父つあん？



吉春 う？ ……いや、そうさな、しかし…へへへ。

雪 お父つあん、わし…お父つあんのお獅子が見たい。

吉春 なに？ お獅子と？ ……ふむ、お獅子か。そうよ、そうだな…お獅子も久しいわい。やるか——（ツと立上り、勢いよく納戸部屋への襖をガラリと開けて入つてゆき、そこで一寸ゴソゴソしていたが、その長持の上にも飾つてあつたらしい、見事な金糸銀糸の縫い取りのあるホロのついた大型の獅子頭の見事に嚴めしい古いヤツと、これも古い獅子舞の平太鼓とバチとを両手にかゝえて威勢よく出て来る）ドッコイショ。（それらを疊の上に置いてドツカリと坐る）ふむ、いつ見ても吉兵衛獅子はキビの良い奴ぢや。…（その獅子頭に積つたホコリをフツと吹き拂つたり、惜し気もなく晴着の袖で拭いたりしながら）これはお前、越後の西蒲原に昔から傳わつた獅子囃子の名人で吉兵衛さん——おらも若い時にはわざく／＼一色の家まで出向いて貰つて、金にあかして習つたものよ。あの頃もう六十近かつたから吉兵衛さんも、もうへえ死んだか。この御時勢ではあゝいう家柄も、もう無くなつたかの。…んだが、なんでまた今頃お前お獅子が見たいなどと——？

雪

でもさ、…いつか、お父つあん、わしがかたづく時には一世一代でうんと踊つて見せ

るつて云つていた。

吉春 あ、そうか。そうか。（娘の顔を改めて見直して）ハハハハ、そうか、そんなや、一つ——

（イキナリ獅子頭をスポリと冠つて一つ、二つ頭を振り下顎を動かし試みる）ハハハハ。（お雪はしかしシツと坐り、嚴肅なものを見る様な顔をしてそれを見つめている。その様子を獅子頭の齒の間から見ているうちに、吉春は次第に笑いを引込め、しばらくジツとしていたが、やがて、獅子頭を脱いで沈んだ聲）だども…なんやら、つまらんわい。

雪 そんなこと云はねえで舞つて見せてよ。

吉春 ……つまらん。

雪 だどもさ、おら、へえ、お父つあんのお獅子、これが一生の見納めになるかも知れんから。これでかたづいていけば…だからさ。

吉春 そうか。そう云えばそうかも知れん。んぢやま——（再び獅子頭を取上げて冠りかける）

（そこへ郡六（お紋の弟、四十歳過ぎ、農具の仲買をやつている）が黒の背廣姿で、大きな風呂敷包みをさげ、表口からスタスタと土間へ入つて来る。いつもニヤニヤ笑つて馴れたことばかり云つているが、少しコスからい位に利巧な男である）



郡六 よう、兄さん、久しぶりでお獅子が出たなあ。テテドンドン、テンテン……アッハハハハ、アハハ（入つて来るや、いきなり大聲で笑いながら、ゴムの深靴をスボンスボンと脱ぎ捨て、上にあがる）ハハハ、テレツクテレツク、ドンドン！

雪 アレ、郡六の小父さ……。

郡六 よう雪ちゃん、綺麗になつたな。ハハハ、全く自分が年をとるのはわからねえけれど、娘ツ子の大きくなるのは瞬く間だのう。どうだよ？ ハハ、ハハ、小宮山の邦彦さんは、雪ちゃんをお嫁にするのが嬉しくて、もうへえ、ワクワクしてな、うちにヂツとしておれんで、山ん中や畑をウロツキ廻つてばかりいるさうだぞ。昨日も北山の谷で出くわしたら、ニタニタニタニタ笑つてばかりいてな。へへ、無理もねえ。この村第一の小町娘を貰えるんちやけんなあ。（ひやかされてお雪は眞赤な顔になり、コソコソと爐の方へ茶の仕度立つて行く。その後姿を舐め廻すように見ていたが、今度は吉春に）なあ、兄さん、雪ちゃんも幸せ者よ。あんだだけの財産家の若嫁さんにいきなり坐られるんちやけん。やつぱし娘を持つなら何はともあれ綺麗なお嫁を持たなあかん。

吉春 へへへ、いや……（無意識に獅子頭をしきりとなでる）

郡六 ハハ、今日は一つ久しぶりに兄さんのお獅子を出して貰いやすかな。一色のお獅子と云やあ、金がかゝつとるからなあ。旦那藝といつても、昔からこの縣一體に鳴り響いとんちや。（言いたがらバチを取つて、太鼓をトトントン、トトントンと鳴らしてみる）ハハハ。

吉春 ……でも、もうへえ、あかん。（相手の調子に乗つて行こうとはせず、獅子頭を脇に置く）

郡六 何故な？ どうしてだえ？ 近頃ちや、お祭りもあの調子。こんな時に出さねえと、折角の吉兵衛獅子が泣くぞ。丁度袴もはいてるし、本式ちや。よう、吉春兄さ。

（でも吉春は何となく浮かない顔。郡六はそんな事にお構いなく再びデタラメに太鼓を三つ四つ打ち試みる）

聲

あい、今日は！（キンキンする様な大聲をあげて、通路の奥に現われ、通路を通つて庭の方へ廻つて来るお源（三十六七歳。吉春の妹。この邊の農家の女房には見られない派手な着物を着、頭髪や帯や下駄の好みが、田舎式ながら思い切つていて、なにやら鐵火である）が、叔父の小次郎（従つて吉春にとつても叔父、七十過ぎ。この邊の老農の常で、過勞の爲に、齡よりも非常に老けていて、鍛え込んでガツシリとした身體つきのまゝ、ヨボヨボになつた老人。着慣れない晴着に黒の紋付を着て、右手に握り太の鐵扇を持つている）の手を引くようにして入つて来る）



郡六 やあ。南のお旦那。さあさあ——。

源 それで、なにか、小宮山さんの衆はまだ来ないの？（この女には自分一人でのみ込んで、人の返事を待たないで、話を下ンドン進めて行く癖がある。あたり見廻して一人で頷き）へえ、そうかな、まださね。だつて、四時だつて云つてたぢやないの？ もうそろそろ四時だけに遅いぢやないか、ねえ兄さん！

吉春 ん、その……。

源 そいで嫂さんは？

郡六 （吉春がモダモダとして返事をしないので、引取つて）姉きは、婦人會の仕事で、ちよつくら停車場まで行つて来るといつて、さつき寄つたさから、もうへえ、すぐに戻りますよ。

源 （小次郎を助けながら、六疊に上つて行く。そこへ、お盆に一同の茶を乗せたお雪が出て来て、それぞれに茶を配る。そのお雪を見ながら）へえ、綺麗に結えたな雪ちや、へえ、これは似合う！ もつと早く来よう来ようと思つていながら、つい店の方が忙がしくてな。なにさ今度又うちが縣の土木工事を請負うてしまつてね、いやもう、忙がしいのなんのつて、身體が二つあつても三つあつても足らん。それでも、やつと都合して今日はやつて来た

が、二時半の上りで来て、南へ寄つて今までいろいろ話を聞いていたが、そんなになにか——小宮山のその少しボンヤリした人にかたづけられるちうのは、そんなにはつきりもう決つたことかな？（あとの半分は、兄の吉春に向つて云う）

吉春 ん、いや、そのお紋がな、決めるちうて……（相變らずテキパキしない。盆を持つて嘘邊に引下つたお雪はコソコソと立つて納戸部屋へ消える）

郡六 （再び話を引取つて）いえね、それがね、ぢやから今日はまあ嫁見といふことで、先方も人も人が来て本極りの盃にしようというんぢやから、當家としても、まづまづお目出度いというわけですよ。ハハハ。

源 （ムツとして）なにがお目出度いんです？ 一色の本家の娘が、たかゞ近頃成上り者の嫁に行く——私あ反対ぢや、大體兄さんが——（云いつのりかける）

小次郎 ……（先程から喋つている人達の口元ばかりマヂリマヂリと見くらべていたが、やをら眞四角に坐り直して、ボカンとして坐つている吉春へ向つて、疊に手をつけて堂々とお辭儀をしてから）こんなびは本家のお旦那、お目出度いことで祝着しちやくでございます。（儀式張つた祝辭。吉春は、受け兼ねて、これも坐り直したものの、「これはこれは……ござす」と何やら口の中でモゴモゴ云つて辭



儀を返す)

源 (その小次郎の袖を引張つて) だからさ叔父さん、私は、話が呑み込めん。こんなことでは呑み込めん。

小次郎 うん？ 呑む？ んだが、先方の衆が見えんうちに呑むわけにも行かんぢやろう。(この人は耳が遠い)

郡六 アツハハハハ、ワツハハハハ。アツハハハ。

小次郎 あんだ？ (キョトリとして、笑う郡六を見る)

郡六 そうでやす、そうでやす！ (小次郎に向つてガタリガタリと頷いて見せて) アツハハハハ。

源 ……(郡六をギロギロ睨みつけていたが、その笑い聲をたゞき切る様なキンキラ聲をあげて) あんだけ綺麗に生れついた娘を、こんな田舎で埋もれさせるのには反対ぢやと初めからわし

は云うとるのに、嫂さんも話がわからなすぎる！ なあ兄さん、わしがこれほどこのうちのことを心配しているのに、わしにはろくに相談もしないで事を運んでしまうのは、ナンボなんでもあんまりぢやないかな！ 今時、いくら身上がよくても、こゝらの百姓のうちにかたづけいたつて、行先、面白いことはありやしませんぞ？

郡六 ハハハ、そいぢやあ、雪ちゃん町へ連れていつて、請負師にでもかたづけやすかね？

源 だれが請負師にかたづけると言いやした？ だけど、あれだけに生れついている娘を、町へ連れていけば、又どんなよい話でもあろうからと、うちの松本もそう云つて――

郡六 だども、わしやこれで、町へも始終行くが、どこへ行つてもなに商賣でも、へえ、こういふ御時勢になつて、もうへえ、面白いことはありませんな。そんなことよりは、こうなるてえと、食う物をこしらえてる百姓が一番強えわけで――

源 そりや郡六さんみてえな農具やなんかの仲買で、サヤを取つて儲けている人は、段々仕事も面白くなつて来るでしょうよ――それしかし、まあ、人のカスリを取つてやつてゐる様なもんぢやから、云つてみりや當り前。だけど、これで、まだまだ目のつけどころと自分の働き次第で、町へ出りやいくらでも穴はある。又、それでなくちやあ世の中は、面白い無いわけで――

郡六 (お源の言葉にムツとするが、忽ちヘラヘラと笑い飛ばす) へへへへ、そりやもう、なんだろうけど、カスリを取つて生きてるは少しヒドいなあ、へへへへ。

源 そうぢやあないですか？ よそでこしらえた稻こき機械だとか、近頃ぢや、そのつい



でに米や麥なども、あつちからこつちへ持つて来ちやあ、二倍三倍の値で賣りつけるのがあんた方の商賣ぢやもの、慣れてみりやこんなボロイ商賣は無いわけ。

郡六 (お源の言葉がだんだんカサにかゝつて来るので、笑つてばかりもおれなくなつて来る) そんなこと云やあ、お宅の松本さんなども、これで、縣廳あたりの仕事を請負うたり、焼跡のマーケットまで手をひろげて、二倍三倍はおろか、五倍も六倍も儲かるんでしようが。しかも何一つ自分が働くんぢやなし、土方や大工左官を顎で使つて上の方の人には酒でも飲ましてベコベコしてりやあ、それで済むんぢや。

源 なんですつて？うちの松本が、いつベコベコしやした？ そりやあ、つきあいが廣いから酒は飲みます。しかし、ベコベコなんだ、そんな――

吉春 (口論になりそうなので) まあ、まあ、お源――

小次郎 (先程からお源と郡六の顔を見位べていたが、どうせ聞えるでもなし、疊の上の獅子頭に眼をうつして) 本家のお旦那、吉兵衛獅子はやつばしえゝのう！ (耳の遠い人の常で、少し語韻の狂つた頓狂聲) 一つ拜見しようか？ 太鼓はわしが打とう。久しぶりぢや。

吉春 へい。んでも……(なにやら險悪になつて来たお源と郡六の様子に氣をとられて、うわの空の返

事)

源 ……(その間、郡六をヂツと睨んでいたが) 聞こうぢやありませんか。うちの松本が、誰にいつベコベコしましたな？ これでも町では五本の指に入る請負師ですからね！ そんなことを云われちやあ――

郡六 (相手をささぎつて) だがそんなことよりや、お源さんは何かと云うところの姉や、わしを目の仇にするが、そりや、あたしにしてみるとこゝの姉はたつた一人の實の姉ぢやけん、何かにつけて力になるうとは思つとるけど、お源さんもこゝの姉や、私のすること、何から何までタテをついて来るのは、これ、あんたの小姑根性――

源 (相手をささぎつて) そうだよ、小姑だよ。小姑であろうとなんであろうと、本家の一大事ぢやあと思ふから、こう云うのが何が悪いんですね？ 何を云つてやがる、全體な

郡六 なんだと！

(二人の間が色めきわたつたところへ、表口にビックリする位の大きな「エッヘン！」と暖拂いの際が聞えて、そこから静かに入つて来る二人の人影。先に立つたのが小宮山の彦造(四十八歳、



小地主で、自身農作はせず、役場の書記をつとめていようという穩やかな弱々しい人柄の男で、紋付袴の禮装。風呂敷に包んだ贈り物の大きな箱を、大切そうに左手に抱えている。あとの小宮山お節（五十四五歳。地主小宮山家の當主の妹で、よそにかたづいていたのが後家になつて實家へ歸つて來て以來、家事一切を取締つてやつていようという非常なシツカリ者だが、口數の至つて少い女。これも古い小紋の禮服に黒の紋付姿）。二人の姿にお源と郡六の口論は不意に打切られ、一同そちらを見て一瞬黙り込んでしまう。主人の吉春はどうしてよいかわからず口の中でモゴモゴ言っている。獅子頭をためつすがめつ見ていた小次郎も、吉春の視線を追つてユツクリと土間の方を見る。

源

……（今までの彼女の言葉から推すと、このお客など見向きもしまいと思われていたヤツが、反對に不意に笑みこぼれる様な愛嬌で立つて行き、板の間に両手をついて）これは、これは、まあ、小宮山さんの皆さんでございますか。まあ、ようこそ。さあどうぞ、お上りんなつて、どうぞまあ——

郡六

……（その様子をチロリチロリと見ていたが、不意に、低いが、しかしお源には非常に鋭い嘲笑として響く笑い聲を洩らす）ハハ……へへ……へへ……フ！

源

……（その郡六の方を噛みつくような眼つきでチロリと見据えていたが、やがて來客の方へ眼をうつし、それから四邊を見廻したあと、まるで今まで愛嬌よく對していた二人の客が、自分の眼の前から掻き消えてもしたかのように、出しぬけに無愛嬌なムツとした顔になりツト立つてスタスタ座敷の方へ引返して來て、勝手な所に坐り込んでしまう。郡六の方も今までの行掛りで、急に立つてお客を迎えるわけにいかず、かといつていつまでも捨てゝもおけず、困つて、薄笑いを浮かべながらマヂリマヂリとしている）

吉春

……（仕方なく立上つて、怖いものにも近づくように、板の間の方へ出て來て）これは——。

小次郎

これはこれは。小宮山の御分家の彦造旦那に、お妹御のお節様でございますか。わざわざどうも、恐れ入りやす。（耳の聞えない一徳でこの方は少しも動ぜず、吉春の後ろから出て來るや板の間の眞中に坐つて眞四角な辭儀）

彦造

これはこれは、南の御新家（しんや）の小次郎旦那でやすか。どうもへえ、わしでは役が勝ちすぎると思ふたが、どうでもと云われてな、本日はこうしてまかり越しやした。（儀式張つて云う）

お節

まづまづ、手をあげられて。本日はお嫁見を私が仰せつかりまして。（これもシヤヂョ張



つている) こちらは、いづれお式の時には、仲人になつていたゞく筈でやして。——まづまづ……。

郡六 (お源とやり合つていた気分からやつと回復して、立上つて来て、必要以上に愛想良く) さあさあ、挨拶はそれ位にして、お上り下すつて。(手を取らんばかり、にして二人を座敷へ招じ上げ、座布団等を敷き並べる。たゞ一人お源だけが、坐つたまゞどこを風が吹くといつた顔で、帯の間から巻煙草を出して吸いつける)

小次郎 まづまづ、こちらへ。いや、あなたの方がそこへ坐つて下すつてはわしらが困る。さあ、さ——(彦造とお節を上座に据える) 本家のお旦那よ、お前——。

吉春 (その邊をウロウロしていたのが) やあ、どうも、へえ……なんしろこの——(やつこのことで縁側に近い座布団の上に坐り、どうしてよいかわからずイライラしながらも、例の調子で側から見ると、キョトンとしている)

郡六 (その間も座敷と爐邊の間をチョコマカと往復して、それまでに爐邊に用意してあつた黒塗りの平膳の上に、簡單な肴の用意があつたのを、座敷に運んで来て中央に据えたり、徳利の酒を燗瓶にうつしたり、一人で忙がしい)……えゝと——(更に座敷にとつて返し、三寶の脇に置いてあつ

た銚子を取つて立ちかけながら吉春に) 兄さん、そいぢやあ、定りぢやから、お茶あよしてすぐに酒にするで——(吉春が頷くのを見もしないで、スタスタと爐邊へとつて返し、その邊をキョロキョロ見廻すが) えゝと、お源さん! お源さん! すまねえけど、一寸手を貸して下さいよ。お源さん!

源 ……………(黙つて不承々に立上り、爐の方へ歩いて行く)

お節 それで、なんでやすか、こちらのお内儀さまは——?(四邊を見廻す)

吉春 一寸その、へえ、間もなく……(その邊にお紋がいるのを探してもするようにキョロキョロする)

小次郎 なにかの、あゝん?

お節 いえ、まづお内儀さまに御挨拶をせんならんで——。

小次郎 そうでやす。この家も、へえ、本家が南の屋敷を引拂つた時に、まあ一時しのぎに建てた家ですがして、もうへえ、古くなつてこの通りでやすが、いづれまあ、なんとかせなあなりませんけどな。(この家のふしんのことを云つている)

彦造 ハハハ、ハハハ、いやもう……しかし、なんでやすな、今日はお日柄もえゝし、結構で



やした。實はこちらのおかみさまから、きめる事は一日も早く本きまりにして安心したいからと言うんで、先日から何度もお話が有りやして、そんでまあとりあえず、私等がこうして、なんでやす——ハハ。

小次郎

當家もいよいよこれからやすから、娘がかたづいて長男が歸つてきたら、早速間口の二三十間もある、大屋臺でも建てやすかな、ワッハハハハハハ。(これはまだふしんの話で齒の抜けた口を開いて老人の豪傑笑い。彦造もお節も吉春も、しよ事なしに笑い出す)

郡六

なんでやす？(酒を注いだ銚子を持つて座敷へ來ながら、これも、意味は分らないながら、調子を合せて笑う) へへへへ、だども、とん角お目出てえ。こゝの雪という娘は……自分の姪つ子のことをわしが云うのも變なものでやすが、氣立てのいゝ娘でやしてね。さあ、一つ、おあげなして。まだ冷めとうがすが。(先づ彦造の前に三寶を据える。彦造シカツメラしく、その上の大形の酒盃を取る。郡六酒を注ぐ)

お節

吉春

そいで、娘御さんは——？  
……お雪！……お雪よ！

郡六

(彦造が飲み干して置いた酒盃を、お節に廻し、酒をすゝめる。以下次々に、小次郎、吉春と酌を

する) なんにしても、こんなお目出てえことはねえです。わしやこんで、子供が無えですからね。小せえ時からこゝの姪のことは、自分の子のように可愛ゆうがして、こんなびのことも、わしやもう嬉しうて嬉しうて。

源

フフフフ……(それまで爐邊に片膝立てに坐り込んで、くわえ煙草で煙瓶を鐵釜の中に突込んだりしていたのが、座敷の郡六の言葉で急に低く笑い出す) フフ！ ハハ。

お節

……(その笑い聲にフト耳を取られて、その方を覗くようにする)

郡六

そんなわけで……(そのお節の視線を追うのと同時に、お源の笑い聲が耳に入り、急にムツとして、そちらを睨みつける)

(そこへ、表口に足音がして、ハアハア喘ぎながら、お紋が走り戻つて來て、白だすきと白の割烹着を脱ぎながら、サツと土間へ飛び込んで來る)

紋

あゝ……(上氣した顔で爐邊のお源をチラリと見、土間に脱いだ下駄に眼をやり、次に奥座敷の方を見て、いつぺんにすべてを理解して、急に相恰をくづして、ニコニコしてお源を見ながら、上にあがる)

源

……(笑い聲を引つ込め、ムツとした顔で嫂の笑顔を迎えようとせぬ)



紋

（そんな者の相手になつてゐる暇は無い。衣紋をつくりながら、最上の愛嬌顔で座敷へ）こりやあまあ、こりやまあ！ 皆さんお出でなのに、つい留守にして、失禮致しやして。なにね、三時の下りで、傷痍軍人さんが一杯通過しやして、まあそれを、接待するちうて

彦造

それはそれは御苦勞さんで。

紋

いゝえ、苦勞のなんのと、こればかりは公けのつとめでやすから、へえ、たとえ内にどんな事が有つても、出ないというのは相済みませんで。婦人會は取りやめになつて、私など班長でもなんでも無くなりやしたが、さればと申して、こういう場合のツトメはツトメでやすからね、ハハ。（と漢語を使つて言い放ち、氣持よさそうに笑つてから、彦造とお節の前に改めてキッチンと手をついて頭を下げる）ようまあ、お運びで。この度はお世話さまでござります。

お節

まづまづ……行届きませいで——（丁寧に辭儀を返す）

彦造

お先にいたゞいてるようなわけで……（抱えて来た風呂敷包をほどいて、奉書で包んだ大きな箱入りの贈り物を前へ出し）これは、甚だ粗末なものがすが、お納めを——いづれ結納

紋

は結納で、チャンと致すようになつとりやすから。

これはまあ、御丁寧な！ あゝた。

吉春

（お紋が入つて来て以來落着かず、中腰になつたりしながらオドオドしていたが）これはどうも、

へえ——（奉書の箱を見るのも上の空）

お節

まづまづ、（これがこの人の口癖のようである）こちらのお旦那に少しお酌をさせて貰いましょうか。（銚子を取つて吉春の前へ進み出て、大盃を取り、浮腰になる吉春を押しつける様にして酒盃を持たせ、酌をする）

吉春

いや……へえ……（ほとんど無意識に矢つぎ早に注がれる酒を、三杯、四杯、五杯と飲み干す。眼は心配そうにお紋の方へ注ぎながら）

小次郎

（お紋がその前に据えて呉れた奉書の箱を、謹嚴な態度でためつすがめつ見ながらうなつてゐる）フーン、これはこれは、御丁寧に。（箱に向つて頭を下げる。これに對し辭儀を返す彦造）

郡六

（丁度その時、お燗のついた燗瓶を二三本乗せた盆を持つて座敷に引返して来たのが、彦造に向つて）さあさあ、お一つ。（彦造に酌をし、それからあとの二本の燗瓶をお節の手元へ持つていつてやり、次に小次郎は酒盃を取らせ、酌をする。お紋は彦造の前へ行き酌をする。その間も吉春は



お節から注がれるまゝに、矢つき早やに大盃をかたむけている。

彦造 ハハハハ。ハハハハ。あなたも一つどうでやす、お内儀さん。

紋 いえ、わたしや不調法でがして。へへへ。

お節 だども、那六さの小旦那もチトあがりやして。

那六 いえ、わしや、あとでゆつくりいたゞきやすから、へえ。

小次郎 なんせ、目出度い！ (この老人は酒に弱いようで、二杯ばかりの酒がもう廻つて来たらしい。鐵扇を持った手を宙にフラフラと振り廻す)

彦造 時に、どうでやす。ソロソロお嫁さんを拜見しやしようか。ハハハハハ。役目がすまんうちに酔拂つてしまつては相済まん。

紋 へい。一寸仕度をさせやすで、チョイとお待ちを。(立つて板の間の方へ出て行き、爐邊を

キヨロく見廻す。そこには先程から坐つたまゝ二三杯の酒をひつがけたお源が、再び火をつけた巻煙草の煙りを輪に吹いているだけ)……お雪……雪はどこへ行きやしたかなあ？

……(嫂をチロリと見上げるだけで返事をしない)

源 ……(義妹の顔に一寸視線をとめるが、フンと云つた調子で板戸越しに納戸部屋へ向つて)お雪。

源 ……なにしてるだ？ 雪や！ (納戸部屋からは返事が無い)

……(座敷の方へ聞えないように、押しこもした低い、しかしねばりつくような聲で) 嫂さん。

私はこの話には反対ですよ。……たかが相手は、十町やそこの小田地持ちの、百姓ぢやありませんかな。しかもお聲さんというのは、薄馬鹿だと言うぢやないの。自分の娘の行先のことを考えたら、あんな氣の弱い娘を、まるで手取り足取りして賣りつけてしまふようなことをするのは、あまりなんでも……。

……(立つたまゝかみつくような眼をして相手の言葉をきいていたが、やがて青い顔でニヤリと笑つて、これも押しこもした低い聲で) フン！ だれが手取り足取りして、無理に行かそうとしましたな？

だつてそうぢやないの？ 雪ぢやんは、そんなところへ行くの望んどりやしませんよ。

源 この前私が来た時に――

紋 自分の娘の行末を私が考えていませんかな？ 何を證據にあつた言ひますな？ あつたはうちの雪を町へ連れて行つて、自分のいゝようにしようと思つとるもんぢやけん、そんな根も葉も無い云いがゝりをつけて――



(その間も座敷の五人の間には、さしつさよれつの獻酬が續いている。中にも、かねてこの中では一番の飲手として認められている吉春は一番飲まされている)

郡六 アツハハハハ、ソラソラ兄さ、いくら禁酒だと言つたつて、今日だけはえゝさ。天下御免！ アツハハ。

お節 そりやそりですよ。ホホホホ！ (酒を注ぐ)

吉春 (次第に酔つて來ている) いやあ、どうも。だども、久しくよしていたで、もうへえ、いけねえ。

小次郎 ワツハハハハハ、ワツハハハハ。(老人笑い上戸の氣味あり)

(爐邊ではその間睨み合つているお紋とお源)

源 全體お雪についてはこゝの吉男が出征する前に、私に言い置いていつたことがありますからね。

紋 お源さん、私は親ですからね。お雪の親ですからね！ 親が自分の子の、行末の幸せを思つてすることを、はたからグジャグジャと奪うんだつたら、そんな人は親戚でもなんでも無え！ そもそも、この話といふもんは――

小次郎

(こちらでは、小次郎が手に持つていた鐵扇をサツと開く。眼のさめる様な日の丸の扇)

あい、皆さんお手を拜借しやす。(日の丸の鐵扇を大きく打ち振りながら、調子の外れた胸間聲で、田植歌と御詠歌との合の子の様な間の抜けた節の歌を歌い出す。他の者達は、ユツクリと手をたゞいて拍子を取る)

フウキというも、

草の名。

メウガというも、

草の名。

富貴満腹

徳ありて、

冥加あらせ

賜われや。

(この邊で祝い事や、酒宴の際に歌う今様。もう一度歌う。今度は他の一同も唱和する)

フウキというも、

草の名。

メウガというも、

草の名。

富貴満腹

徳ありて、

冥加あらせ

賜われや。



(このおそろしくダラダラとした歌の合唱の中に、この家の次男の春二(十二三才)が、肩から下げた鞆をブラブラさせながら、通路の方から歸つて來、庭の方へ廻つて出て、縁側に近づく。元氣そうな頬の赤い少年で、しかし、父親似でのんびりした性質らしく、思いがけない酒宴の風景にあつけに取られて、口をポカンと開けて眺めている。爐邊では、お源とお紋がまだ何か云い合っているらしいが、歌聲に消されてきゝとれない)

吉春 よしや！ ハハハハハ、よしや！ (いよいよ酒の酔が廻つて來たと見え、今までの彼とは見ちがえるように生々とした眼色で、歌が終るとイキナリ立上る)

彦造 ハハハハハ！ それそれ、吉兵衛獅子の始まり始まり！ ハハハハ！

小次郎 やるかの本家のお旦那？ ちやあ、おらが——(これは太鼓を引寄せてバチを搦む)

お節 まづまづ、一色のお獅子も久しぶり！ 頼みますよ！ (郡六がむしように手を叩く)

吉春 なあに、へ！ (身體をユラユラさせながら、その邊を睨み廻す様にして立つていたが、やがてフラフラと歩き出す。獅子頭の方へではなく簞笥の方へ。簞笥の上に乗つていたコーリヤン酒の壺をつかみ座へ戻つて來る) これですが！ 今日ひひとつ、これを頂くだ。

これはコーリヤンから取つた酒でな——(云いながら座敷へ入つて來かけたところで、袴の裾を踏みつけ、前へヒョロヒョロとのめつて行き、お節の上に折れ重なつて倒れる) オットット、ダア！

お節 ヒャア！

(その聲で、爐邊のお紋とお源がびつくりして座敷の方へ來る。庭に立つて見ていた春二がゲラゲラ笑う)

郡六 ホウ、こりや！ アッハハハ！

お紋 どうしやした？ どうしやした全體——？

お節 なあに、なんでも無え。ハハハ、どうも！

吉春 ドッコイセ！ この——(モガモガしながらやつと起上る。この鈍い男が、ヒツクリ返る時にも酒の壺だけは宙に差し上げる様にして、一滴もこぼさず持つていたやつを、高く差し上げて示しながら) 大丈夫、大丈夫、この通り、この通りぢや。アッハハハ！

お紋 (それまでの、お源との口論の怒りもあり、眼を三角にして) なんですな、あゝた！ 小宮山さんのお内儀さまに對してそんな失禮なまねをして、全體、あゝた、なんでござります！



吉春 えゝわい、えゝわい。

紋 えゝわいぢやあ、ありませんよ！ そんなざまをして！ これから、あゝた、お雪を皆さんに見ていたゞかならんのに、あゝたからしてそんなざまを——

吉春 雪？ ……ざまがどうしたよ？ (キヨロンとした眼で妻を見る。それまでにあほりつけた酒の酔が、ヒツクリ返つたので一度に發して來たらしく、モウロウとした眼で、しばらく妻の顔を見上げていたが、この時、だしぬけに火の様なものが彼の全身を貫き走り、眼の色がカツと光るや、凡そこの男から誰も豫期していなかつた様な、猛烈に大きな鋭い聲が飛び出す) ざまあ？ ざまあ、あんだ？ ざまあ、あんだ？ 雪？ 雪がどうしたと？ 雪はおらあの娘だぞ！ そりやあ、雪は、お前の子かも知れないが、おらの爲にも娘だぞ！ あんまり大きな顔をするのはよせ！ 俺が、年中遠慮をしているといゝ氣になりやがつて、お紋、お前の仕様はなんだと言うた？ 全體お前なんか、公けの事だあ、キョウドウだあ、ミンシュエシユギだあ！ 人のツラさえ見りや、えらそうな理屈をこねにかゝつちよるが、へえ、お前の肚中なんてえものはな、全體、あんだよ？ 理屈もえゝ、説教も結構だ。だども、そいつが見榮外聞だけで、肚中と違つていたらどうなるだ？ あゝん？ やいこ

ら！ (少し酒亂の氣味)

郡六 まあまあ兄さん！

吉春 全體、お雪のことにしてからが、お前の肚中は、つまりが、あれを小宮山さんへかたづけてこの家の田地を殖やしたり、村でえゝ顔になろうという量見が先で、當人の幸せがどうなろうと、當人の氣持がどうあろうと、そんなことあ二の次にも考えちよらん！ (困つたことを口走り始めたので、郡六と、それからこれはよくは聞こえないが小次郎も、まあまあと吉春の肩をつかんで止めにかゝるやつを、ふり切つて) 俺あ知つとるぞ！ 俺あ知つとるぞおっ！ お雪はな、お雪は——俺に似て、氣が弱くて、思うとることもよう云えん。それをお前一人が、自分一人の慾の皮を突張らした量見で以て、ドンドンドンドン話を運んで——

郡六 まあ、まあ、まあ、兄さん、まあ、まあ、お前酔つとるで、そんな——ハハハハハ！ (吉春の言葉をもみ消すように大きな聲で笑い飛ばしてから、お節と彦造をかえりみ) なんせ、終戦からこつち禁酒をしていやしてね、一たらしも飲まんかつたのが、急に、こんなに飲んだのでやすから、ハハハハ。(お紋は、吉春からだしぬけに喰つてかゝられてドギ



モを抜かれ、青い顔をしてトツサには何も言えないでいる。

お節 ホホホホ、オツホホホホ!

彦造 ワツハハハハ、無理もねえ、無理も無え。ワツハハハハ。

(この二人も、自分達の立場上今更になつて、吉春に妙なことを言い出されては困るので、眼ではキヨロキヨロと皆を見廻しながら、聲をそろえて笑う)

吉春 なにが無理はねえです? なにが無理は無え? おい——

小次郎 まあえゝわい、えゝわい! (吉春に大盃を持たせ、コーリヤン酒の壺から注いでやる。吉春、勢いよくそれを飲むが、強い酒だとみえ、むせる)

彦造 ハハハハ、ハハハハ!

源 ちよいと嫂さん。(お紋の袖をひいて板の間の方へ連れて行こうとするが、お紋はデロリとそちらを睨むだけで動かない)

お節 それでは嫁御さんを見せていたゞこうぢやあございませんなかな? (捨てゝおくと拾収がつかなくなりそうなので、彦造に目くばせをしてからお紋の方を見る)

彦造 左様々々、お内儀さん、そういふことにひとつ——。

紋

ハイハイ、それでは——(お源をしり目にかけて板の間の方へ行き、納戸部屋へ向つて)……お雪! お雪! いつまでも何を——(言いながら板戸をガラリと開けて納戸部屋へ消える。そこで一寸の間ゴマゴマしてから、今度は奥座敷への板戸を開けて出て来る。びつくりして慌てきた顔)お雪や! お雪! (その様子に、一同がそちらを見る)

彦造

……どうしやした?

紋

……(それに返事をする餘裕の無いほど慌てゝいる。キョトキョトとその邊を見廻しながら、小走り板の間の方へ行き、彼方此方を見廻して二三度ウロウロした末、土間へ下りそうにするが思い返して再び納戸部屋へ入つて行き、直ぐに又奥座敷へ出て来る)お雪! (叫ぶが、別に、それ以外に隠れる所とてない家のうちなので、最早のぼせ上つてしまい、更に意味も無く今度は逆に、奥座敷の方から納戸部屋へ飛び込んで行き、板の間の方へ出て来る。その様子が、廿日嵐がかけまわり始めた様である)お雪や!

春二

……ねえちやんは、停車場へ行つたよ。

源

……なんだつて、停車場?

春二 うん、停車場へ行つた。



紋 停車場？……停車場だつて？ だつて、停車場なら、わしも先程停車場から歸つて來たんぢやけん、途中で逢う筈ぢや。

春二 うゝん、裏道から行つた。おれ、學校からの歸りに裏道通つていたら、停車場の裏で、ねえちやんに逢つて——

紋 (いつべんにギツクリして) え！ そいで、そいで、そいで雪、なんか——？

春二 うゝん、他所行ききの着物着て、風呂敷包持つて、怒つた顔してた。そいから俺に、春ちやん、あとは頼むよと言つた。

(一同ギツクリして、中には中腰になつた者もいる)

彦造 全體、こりや……。

紋 (動顔して言葉も出て來ない。あえぎながら) それで、それで——えゝい、早く言わんかい、春！

春二 (自分ではなんでも無い事を言つたつもりなのに、皆の驚き様があまりに大きいので、それを見て自分もびつくりして) んでな、んで、鏡臺の引出しを開けて呉れつて。お母ちやんに、鏡臺の引出しを開けて——

(お源が何も言わず、鏡臺の引出しを開き、そこに突込んであつた紙片を取つて走り讀みする。讀み了つて、だまつてお紋に渡す。お紋それを讀もうとするが眼がチラチラして讀めない。そこへ郡六がやつて來て、お紋から紙片を取り、默讀)

郡六 ……へ、行つてしまつた。(早口に讀む) お父さん、お母さん、どうぞ許して下さい。私は圭太郎さんと一緒に行きます。親不幸の罪はどうぞ許して下さい。

(一同、しばらくの間息を呑んでシーンとしてしまふ……間)

小次郎 ……どうしたや、あゝん？ (その聲が四邊につゝぬけにひびく)

吉春 そうかッ！ そりやえゝ！ そりやえゝぞ雪！ そりやえゝ！ (飲んでいた酒の壺を、放り出して立上つている)

お節 まづまづ、こりやあ——(何と言つていゝか、わからずにいる)

紋 (不意に踊り上る様にしていきり立つて) こりやいかん！ 圭太郎なら四時の上りぢや！

郡六、早く行つて、早く行つて連れ戻して來て呉れ。警察にそう言つて、畜生！ 何たらいう——郡六、早くするだよッ！

郡六 だども、だども——(腕時計をのぞいて) 四時の上りなら、もう間に合はん！ もう、發



車しとる！

紋 そいぢやあ、そいぢやあ次の驛へ電話かけて――

吉春 もうえゝわい！ (どなりつける) 雪がそうしたんなら、そいつはよくよくのことぢや！

彦造 騒ぐな、もうえゝわい！ よくよくのことぢや！ 騒ぐと俺がきかんぞ！

彦造 だども、こりやあ、へえ……これぢやあ、わしらの立場はどうなりやす？

(下手遠くから列車の音が近づく)

春二 ホラ、四時の上りが来た。

紋 (目がつり上つてしまい、はだしで庭に飛びおりて来る) あゝ、行つてしまふ！ 雪が行つてしまふ！

吉春 アッハハハハ、それでえゝわい！ 吉男も以前、お雪は圭太公の嫁にやるんだと言いつた。それでえゝわい！ (意氣昇天の勢いでその邊を見廻した眼が、獅子頭へ行き) ようし、んだらひとつ、舞つて見せてやるか！ お雪が見たいと言いつたけんな。ようし見せたる！ (いきなり袴のもゝだちを取るや、小次郎の耳のはたに口を持つていき) 小父さん、おらが舞うで、太鼓頼むぞ！

小次郎

う？ ……(キョロキョロ一同を見廻していたが、この場の事情がよくは呑み込めず、バチを取る) だども――(吉春は獅子頭を頭からスポリと冠り、庭へ飛んで下りて、櫓の前へ来てビシリと止り舞いだしの極りの形。一同アツケに取られている。近づいて来る列車の響き)

吉春

お雪、よく見いよ！

小次郎

(吉春の姿勢にうながされ、しようことなしに) ヨオッ！ (一つかけ聲をかけて、ドドドンと太鼓を打つ。その音に押しかぶせるように近づく列車の響き。器量一杯に踊り始める吉春の獅子)

紋

お雪や！ お雪！ お雪！ (木柵につかまつて、今この家の下へさしかゝる汽車の窓へ向つて叫ぶ) あゝ！ あすこに居る！ お雪！ お雪！ 行つたらいかん！ なんでもお前の好きなようにさせるけん、行つたら、いかん！

吉春

(ホロの下から顔を出して、これも聲をかぎりに、汽車の窓――つまり正面――へ向つて叫ぶ。しかし、上手へ向つて通過する轟々たる汽車の音にかき消されて、初め何を叫んでいるかわからないが列車が通り過ぎ行き、その音が低くなるに従つて、叫び聲がきゝ分けられる) お雪！ しつかりやれよ！ 幸せにやれよ！ あとのことは心配すなよ！ 人間一生の一大事の時、自分がホントに正直に、したいと思うことを思いきつてやらんぞ！ それが人間の



道ちやあぞ！それが人間の道ちやぞ！ 圭太郎君と仲良くやれようつ！ お父つあん  
は嬉しいぞう！（叫ぶ叫ぶ）

紋 お雪！ お雪ようッ！（居ても立つてもられず、柵から手を放すと、脱鬼のように通路から  
縣道の方へ走り出て行き、上手、汽車の去つた方向へ、あとを追うようにして走る）

吉春 アッハハハハ、それでえゝのぢや！

（柵の上へ乗り出すようにして、さゝげ持つていた獅子頭の歯をガチガチガチと無意識に打ち鳴  
らしていたが、笑い聲と共に再びスッポリと冠り、庭中を法もへちまもなくキリキリ舞いをする）

小次郎

ホウ！（獅子の狂いぶりに驚いて、追いかけて太鼓を打ち始める）

（呆然として突立つている一同の姿。上手へ遠ざかり行く列車の響き）

逃 げ る 神 様 一 幕



ドラとシチリキが一緒になつた様な物々しい音が、チャーン、ビヤーンと三度ばかり鳴り、それにつれて四五の人間が熱狂的な讀經をはじめ。香の匂ひ。

開幕。

ガランとした莊重森嚴な廣間。柱など白木造り。しかし家具調度といつては一つも無く、僅かに左手に白木の祭壇があり、その前に普通の約二倍もの大きさの燃えるような緋色の座蒲團が一つ。祭壇上には中央、眼の高さに古代鏡が一つ据えられ、その前に飾りの美々しい劍が一振置いてあるだけ。祭壇の前に菓子や果物の供物。

夜中だが、室内は大變明るい。

中央邊に、祭壇の方を向いて坐り、經（觀音經のしまひの部分）を朗々と合唱している三人——總務と執行と執事（これは一人だけ若い女）。三人とも普通の着物の上に白衣。讀經が終る。——

總務（左右に鹽を撒きちらすような手附きを五六度した後）……只今、おかみは御接神がおすみに  
執行 なるから、直ぐにさがつて、先程申しつけた順で、一人づつ。  
はい。



總務 いつもの通り、長廊下の入口まで案内すればよい。暗いから、一々手を取つてあげるよ  
うに。拜殿へは私が行く。タミ。

執事 はい。

總務 もつとシツカリ握つてあげないかん。わかるか？

執事 ……はい。

(執行と執事立つて右手へ行きかける。そこへ、正面の襖が開いて、長髪、白衣、白袴の青年帆  
立が、傍眼もしないでスリツと歩いて来る。行きかけた執行と執事はそれを見て再び坐り、疊に  
吸ひ付くように頭を下げる。總務も同様。帆立は不機嫌なシカメ顔に、物につかれた様な眼付き  
を動かさず、三人を無視して、緋の座蒲團に、祭壇に向つて坐る。したがつて三人には背を向け  
る。後で信者達と應對するのもズツト背を向けている)

總務 (頭を上げて) よろしい、行きなさい。

(執行と執事立つて右手へ)

帆立 ……タミ。

執事 はい。

帆立 ……ウズ彦は？

執事 ご機嫌でございます。

帆立 まだ起きていますのか？

執事 御元氣でございます。

帆立 ……これを持つて行つてやるように。(供物鉢の一つを持ち上げる)

總務 それは後で。(執行と執事に頭で行けと命じる。黙つて右手へ去る二人)

帆立 しかし、まだ寝ないと言ふのは、腹を空かしているのだ。

總務 あとで、よろし。……では、順序と一人々々に就ては先程申し上げた通り。尙、念のた  
め、これを。(と懷中から紙片を出して、祭壇の上、帆立の眼の下に置く) 言う事は先方で皆言  
つてくれるので、あなたは一言か二言、いつもの通りに。よろしいな？

帆立 ……よろしい、よろしい。

總務 では私は拜殿の方へ参つて、トキアカシを致しますから、御用の際は、三鈴さんねいして下さる  
ように。(辭儀をして左手の方へ去る)

(帆立は静座して、半眼を開いて紙片を見詰めてゐる。静かである。これから何が始まるのか、



まるきり見當が付かない。——間

(右手入口から黒い立派な和服、袴姿の中老の男が小腰をかゝめて入つて来る。暗い所から急に出来たらしく、まぶしくて眼がくらむのか少しヒョタヒョタした後、すり足で入つて来て、右寄り、帆立の背を見て坐つて、ていねいに身體を伏せる)

男一 ……此の前は、どうも、いろ／＼と。

帆立 ……(低く唸つている)

男一 實は、あゝは言われても、半信半疑で會つて見ましたが、いろ／＼と追い詰め、追い廻したあげく、やつとサラケ出させた先方の腹と言うのが、御言葉の通りでございまして。驚ろきました。いやあ、世間がこんな事になつて来ますと、四の五のと言つたところで、しかも、幹部級で候でいても、なんと云う事はありません。ハハハ。結局、實力の在る所へ、實權も集ります。

帆立 ……瀬ノ尾さんか。

男一 はあ、どうもありがとうございました。全く、要するに金ですなあ。刀では殺せない奴も金では殺せる。いづれにしる、金屬に縁のある所へ、すべてが舞い戻つて来ます。さすが

辨町會の連中が、御言葉通りに言つたら、青くなりましてね。黙つていますから、私が「神戸へんの金塊の相場は今、いくらでしたつけ？」と一言言つたら、先方で何を言かうかと思うと「これはどうか此處だけの話にして貰いたい、事實無根だ」そいで私が「事實無根結構です」と言いましたら「その代り今度の物入りには、三つだけ出させる」と言います。「勿論、マルは六つ附くんではしような？」「御念には及びません。はゞかりながら、辨町會ですよ」てな事で、あとは笑い話になつてしまいました。アッハハハ、それにしても、どこでそれを聞いた、早聞と言つても少し早過ぎる、まさか——と尋ねますからね、私にや神様が附いているから——。

帆立 ……あ！ うん！ (相手を無視して唸る)

男一 誰だ？ と聞くんで、「事實無根だつた筈ですな」と逆襲したら、「瀬ノ尾さんにはかなわん！」笑つて戻つて来ましたが、うっかり嗅ぎ出されちや、此方がたまりませんからね。いや、ありがとうございます。おかげで、芝居が少し面白くなります。

帆立 邪魔だ。

男一 へ？……はい？



帆立 邪魔だつ！（怒鳴る）

男一 （少しキョトキョトして、急に畏怖に覆われた顔をし、疊に両手を突いて、帆立の言う事から何かの意味を引き出そうとして帆立の背を注視する）……邪魔？……ええと、すると言う——？

帆立 そちらで考える。

男一 ……實は今日参つたのが、つまりその金を誰に渡したものと、伺いに出たわけでした。いづれ寄附と言う事になりましたが、どつちせ、公表出来る筋合いのものではありませんで、従つて橋を渡してやつた私のかぢの取りよう一つで、どうにも出来ません。安藤の手に入れるか中山の手に渡すか？ 會長と言ひ幹事長と言つたところで、つまる所、それは名前だけのものでしてな、金を掴んだ奴が實権を握ります。従つてそ奴がうちの頭数二十いくつを支配します。二十いくつと言う数は僅かですが、御存じの様に、此の十二月には、その二十いくつと言う頭数が物を言つてキャスティング・ヴォートを握ることに必ずなりますで、従つてうちの實権を握る奴が即ち一言に申せば天下を握ることになります。いかゞでしょうか安藤と中山、どちらに渡せば？

帆立 えいつ！……ムー。……えいつ！

男一 ……はい。どうもね、この様に世間が不安な状態で方向を失つてゐる有様では、黒幕黒幕と言われて種々働いていても、そうゾンキな事はやれませんが。確信有る者がダシコたる確信を實行せな、なりません。國家の爲めにですなあ。……どうでしょうか、安藤と中山、どちらが？

帆立 邪魔だつ！

男一 邪魔？（意味を考えている）……ええと、安藤ですか、中山ですか？ 順から言えば何と言つても會長ですから安藤ですが、中山にすれば——

帆立 それが、邪魔だつ！

男一 あゝ！ そうですか！ なるほどねえ。フーン。……いや、尙よく總務さんときあかしをしていただきます。ありがとうございました。ありがとうございます。では、これで。（ひれ伏さんばかりに禮をして立ち上りかける）

帆立 それで、あんたは？

男一 いやあ、アッハハハ、私あ走り使いですよ。たゞ私の信念に依つて、現下百般の風潮に多少でも安定を興えることが出来れば、他に望みはありません。まあ強いて言えば、實



櫓を握る者のキンダマを掴んでいる人間が、實はホントの實權を握っている者だとも思つて自ら慰めますかな。いや、策士などと言ふものは、いつも損な役です。

帆立 三つと言ふのは嘘だ。五つだろう。その中の二つは、あんだの手に入る。

男一 ま、ま、ま、そこまで言えば、キリがありません。アハハハ、いや、では、これで。(再び丁寧に頭を下げて、立ち、去る。去りながらチョット立止り、考え、チラッと振り返つて帆立の方を、おびえた眼で見た後、首をひねりながら、右手へ去る)

(帆立は黙つて坐つている)

(男二——四十歳前後、和服袴姿——が右手から入つて来る。目がくらんでキョロキョロするのは同様だが、これは男一よりも畏怖して、坐るまでに三つも四つも辭儀をする。ベタツと、ひれ伏す)

男二 ……黒澤でございます。

帆立 (いきなり) 要するに金だ! 金をつかんだ奴が實權をにぎる。そのまたキンダマをつかんでいる奴がホントの實權をにぎるぞ!

男二 は? ……(考へていたが突然何かに思い當つて、電氣をかけられた様に飛び上る) へーっ!

恐れ入りました! 左様でございます。どうしても此の際、受けなければならん手筋が二口出来て居ります。人絹と鐵ですけれど、いづれも、近頃の雲行きでは、間際でどうド、デンを打つか解らるので、實はどつちにしたものかと迷ひ抜いて居るんですがね。どつちかに決めさえすればいづれ押せば押せるシロモノなので、自信は無くもありませんが、手口が大きいだけに迷ひます。十五年間、株で飯を食つて居る奴が、シダラの無いていたらくですが、どうも近頃の景氣の動きと言ふものが、どの邊がシンになるものか譯がわからなくなつて來ましてな。かと言つて、今更、ケイ線と首つびきの鞆轡も出來ないと言ふ——

帆立 刀では殺せずとも、金では殺せる!

男二 へえ? ……ピッタリとおつしやつて下さい。たつた一言で結構で。人絹に乗つた方がいいか、鐵に乗るか?

帆立 えいつ! ……ウム(唸る)

男二 實は相手方を店に待たしてありますんで。たつた一言、たつた一言でスパッと仰せ下されば、それで——



帆立 いづれにしろ、金属に縁のある所へ、すべてが舞い戻つて来る。

男二 へ？……て、鐵だつ！ へい！ ありがとうござ——いづれ又直ぐに、——では——

（二度疊に額をこすりつけて、ソクサ走るようにして右手へ去る）

（入れ違いに女一——黒づくめの贅澤ななりで美しい三十女——が入つて来て、坐つて頭を下げ  
るや、いきなりペラペラとはじめる）

女一 いえね、なにしろ相手が左翼くづれの赤新聞の社長とか主筆とか、なんだか知りませんけれど、ひとひねりも、ふたひねりもひねつた男なんですから、袖にすれば、どんな事をはじめるかかわからないもんですから、少し怖わかつたんです。そいでも先生のおつしやつた通りに申しましたら、はじめショゲでジロ／＼見ていましたが、「そいで、やれるものならやつて見る。へりくつを並べたつて事は尻を割つてらあ。要するに馬を牛に乗りかえ新宿の目抜きへ店を出して貰うコンタンだろうが」そりやあね、そう言つちまへば、實もフタもありませんが、なんてつたつて、おアシにならなきあ仕方がありませんもの、先方の言ふのが無理なんです。女三十で二人もの子持ちとなれば、あんな場末のバーのマダムで腐つてしまうか、たとへ都會議員の第二號が三號になつても、一流

帆立 裸かになつて来い。  
の店でバリ／＼やれるかの境目に立てば、少しは考える道理ざいましょう？

女一 ……？ いえ、正直の事を申してるんざいますの。もともと好きで一緒になつた仲なんですから、行末の見込みさえ有れば誰が齋藤と別れるもんですか。現に二番目の保男は齋藤の子——

帆立 なのか？

女一 だらう、と思つて居るんですの。似て居りますから。

帆立 では別れなければよい。

女一 まあ先生、そこをお伺いしているんぢやありませんの、お人の悪い！ ですからさ、氣が迷つて、どうにも考えが付かないで——

帆立 裸かになる。

女一 ですから、私以上に裸かになつて、世間と闘つて居る女は他にいやしません。

帆立 今、裸かになれ。

女一 ……？ 此處で裸かになるんですの？



帆立 その場で裸になれ。即座に！ 直下に！ 裸かつ！ 裸かつ！ 裸になれ！

女一 ……？へえ。なれとおつしやれば、なりますけど、なんだか……。いえ、なりますわ  
(帯を解きはじめる。それでも少しためらっている)

帆立 ようし！ 早く！ 迷いを斬つてやる！ (壇上の剣を、坐つたまゝでスラリと抜き、立ち上  
りかける)

女一 あー！ (あわて、帯を解く。長襦袢の紅い物がチラチラ見える)

帆立 えいつ！

(右手から總務が入つて来る。此の場の光景を見てギョツと立ちすくむ)

女一 あらつ！ (しやがんでしまう)

總務 いやあ。……よろしい。(不得要領に言つて、女と帆立を見くらべている。帆立は拔身をすかす  
ようにして見ている)

女一 (手早く着物をつくろつて)ごめん遊ばせ。(コソコソ去る)

總務 (それを見送っていたが、ニヤ／＼して)……いけませんよ。

帆立 ふん(これも少しテレて笑っている)

總務 あなたは神様ですよ。忘れてはいけません。

帆立 ……神様なんかちや無いさ。

總務 又、發作を起しましたな。神様ですよ。

帆立 違う！ 僕は人間だ。

總務 では、その透視力は何です？

帆立 透視の能力は有る。透視や暗示力と言うのは、精神統一を三四年も練習すれば大概の人  
に出来る。しかし此處では、その透視力も要りはしないのだ。向うから何もかも言つて  
くれるんだからな。

總務 それでよいのです。神様と言うのは人間がこしらえるもんです。

帆立 相手は木の根つこでもいゝと言うんだろ？

總務 さよう、えゝ譯だ。世間にそんな需要が有る。需要が有れば、供給せななりませんわ。  
私等がやらなければ、他の神様の所へ行くだらう。世間が一帶にそくなつて来て居る。  
神様ができたから迷信が生れるんでは無い。人の心に迷いが有るから神様が生れる。シ  
タヂは世間の人達の中に有る。既に迷いが有るからには、それをサイドしてやるのが立



派なクドクだ。

帆立 ちや、ウズ彦でもいゝ譯だ。

總務 さようさ。

帆立 (拔身をカラリと投げ出して) インチキだ。

總務 インチキと言えば、此處にやつて来る人だつて、みゝんなインチキだ。

帆立 そらそうだ。

總務 だから、えゝか、この點を考えな、いきませんぞ。それで動いてるのが生きた世間だと  
言う事ぢや。インチキは馬鹿に出来ても世間は馬鹿に出来まい？

帆立 いゝよ、わかつた、わかつた。

總務 あんたは、神様だ。

帆立 神様だ。クフン。

總務 では、あと六人居りますで、直ぐ續けます。(立つ)

帆立 よろしい、来い！ ブルル！ えいつ！ ところで、ウズ彦なあ？

總務 どうしてあんたは、あれの事ばかり気にするかの？

帆立 どうして？ 僕にもわからん。馬鹿に可愛いゝのだ。多分、僕の事を人間扱いにしてく

れるのが、あれだけだからだろ。

總務 とにかく、すつかりすましてしまつてから菓子でも果物でも好きなだけやつたらえゝ。

帆立 だが捨てとくと、又、此處へ来る。

總務 大丈夫、大丈夫。えゝと、次は——(と言つてゐる所へ、ドツシリした洋服の紳士が右手から  
ペコ／＼して入つて来る) あゝ、白林さん、いかがですか、芝居の方の景氣は？

(後の部分は帆立に聞かせている)

男三 はい、いや、實はその事に就てですが、少しお伺いを立てたいと存じて、實はなんで  
來月の二の替りの出し物に就き、チト……。

總務 いや、それを私に言うたら、あかん。おかみへ、先づ。(帆立の方へ一度禮をして立去る。

男三は、へいつくばる)(帆立は前の通り祭壇に向つて靜座している)

男三 實は何でございます、二の替りの世界定めの件に就てどうしても一存に餘りましてな、  
それも一番目、申幕は、これはまあ大體おさまつたんですが、問題は二番目物で。いえ  
出し物はいくらでもございます。大體が近頃のお客は芝居を見に來るんぢやありません



ん、見合いにやつて来るとか、宴會に来るとか、せい／＼役者を見に来るのが上の部  
で。もつとも、私の方としましては場代さえ頂戴すれば餘の事はどうでもよろしい次第  
で、ですから出し物は何でもよろし。たゞ御存じの通り、ウチには立役としまして目下、  
ダカムラ屋とヒノシ屋が居りますが、二番目のトリをどちらに出させるか、この事でござ  
いますよ。へへへ、どうもね、實は正直に申し上げてしましますが、これは昨日コン  
コン様の方にもお伺いを立てて見ましたが、ダカムラの方からもヒノシの方からもチャ  
ンとつけとゞけが有つたと見えて、どうにもハッキリした御神宣がありません。それで

帆立 それは、いかん。

男三 へ？

帆立 世間にそんな需要が有る。需要が有れば供給せな、いけないわけだ。

男三 すると言いますと、ダカムラ屋の方にしますか、それともヒノシ屋の——？

帆立 迷うからいかん。迷うから、インチキに引つかゝる。私は神だ。

男三 へ——つ！（ちとみ上つて、突伏す）

帆立 わかつたら、お歸り。

男三 （キョトンとしていたが） へい、いえ、その、すると申しますと、どちらに？ いえ、實  
は、近頃、ほかの仕打ちで、この、いろ／＼役者の引っこ抜きと言う事をやりよりまし  
てな。此の際、ダカムラとヒノシのどちらに二番を向けても、はづされた方がどうせ曲  
ります。役者などと言う者は、いづれは馬鹿でがして、曲つたトタンに、引っこ抜きの  
手が来れば——

帆立 金か？

男三 へえ、いづれ、それですがね、それを私は心配しているのですよ。で、ヒノシとダカム  
ラの、いづれに——？

帆立 よろしい。ひとことだけ言う。あとはそちらで考える。……えいつ！ ウーム。

男三 ありがとうございます。

帆立 ウーム！ 立つた、立つてごらん！

男三 立つんで？（立つ）

帆立 えいつ！ えい！……あんだシャチホコ立ちは出来るか？



男三 へっ!? シャチホコ立ち……ええと——

帆立 出来る! やつて見る! 立つて見ろつ!

男三 でも、どうも、まさか、その——

帆立 直下にやれえつ! え、やつ!

(男三シャチホコ立ちをする。キュッキュツと變な聲を出しながら)

帆立 それで、歩き廻る! ウーム!

(男三兩手で歩き廻つた末、ドタンとデングリ返る)

男三 (眼をまわしてフーフー言いながら) キュツ! ど、どうも血圧が……

帆立 金屬に縁の有るものに、すべてが集まるぞ!

男三 はい?…… 金屬? 金ですな? すると、ヒノシとダカムラ——、ヒノシと、ちや、

ヒノシ屋でございませぬ。わかりました。キュツ。

帆立 よろしい、退る。

(男三ベタンと辭儀をしてから、フラフラ腰で立上り、キュツと言いながら、右手へ去る)

(帆立、仰向けに寝轉ぶ。しばらく天井を見ていた後、クルリと起き直つて、シャチホコ立ちを試

みる。ちよつとして、直ぐ倒れる)

帆立 (倒れたまゝで) キュツ。……豚め! 神よ助けたまへ。……そうちや無いや、神様あ俺だ。(次第にゲラゲラ笑いはじめる)

(堂々たる洋服姿の男四、右手から入つて来る。帆立が仰向けに寝たまゝ笑つてゐるのでめんくらつて、どうしてよいか解らずマゴマゴしている)

帆立 榊原五兵衛。双葉屋の大番頭。白田銀行の頭取で、こないだ辨町會に六ツだけ出さゝれた。フッフ、堂々めぐりだな。チャンと書いてある、チャンと書いてある。ハハハ。

男四 へーつ。(坐つて、へいつくばる) 書いてございませんと申しますと?

帆立 へっへへ、(祭壇の紙片を指して) あれに書いてある。(ゲラゲラ笑いつづける)

男四 (古代鏡だと思つて) へーつ、恐れ入りました。實はそれに就てございませぬがな、相手はどうも當時一番強氣な方面のバックが有るそうで、當方ではお客様相手の弱い商賣をやつて居りませば、何となくカランで來られると突つばねる譯にも行きませんで、ま、そんな事になりましたが、これが又々後を引くことになれば、いくらなんでも困りますわけで、それには何とかして別の勢力に結び付いてですな、そちらの壓力で防ぎを付け



るより他に方法はありません。それで、種々あつて見ましたが――

帆立 (ズツと仰向けになつたまゝゲラゲラ笑つている) 立憲北斗會の瀬ノ尾正治の所へ行く。

男四 瀬ノ尾正治?

帆立 トキアカシを受ける。辨町會がこれこれだと、瀬ノ尾に會つたら正直に言う。ハハハ、へへへ。

男四 はい、それは申されるまでも無く……へい? すると何でございませうか、しかしやつぱり、それにしても、獻金……とか寄附は? 勿論北斗會の方へでございませう? なるほど! フーム。はい? は? なるほど! (と、相手の帆立はクスクス笑つてゐるばかりで何の表示もしないのに、自分一人で問うたり考えたり、合點したりしている)

帆立 歸れ。フッフッフッフ、歸れ。

男四 はい。……ではもう一つだけ、お伺いを。この前にもチョット申し上げましたが、越前屋デパートから申込んで来て居る合併の件でございませう。これが業務調査その他一切完了しまして、合併すれば直ぐにも出来るような状態にはなつて居りますが、私の方の大株主の一人で、どうも乾では方角が悪いと言う者が居りまして、何でも暗剣殺は少し

はづれるようですが、なんせ、良く無い。但し、今月にいたしますと星廻りは至つてよろしいそうで。これをいかに――

帆立 ヒッ! (笑つていたが、やがて不意に叫び聲をあげて立上つて、手足を空中に妙な格好で突き出し、身體を痙攣させて、一種の踊りのような事をする。シミ・ダンスに似ている。びつくりして疊にへばり付いてゐる男四) 神が飢えるぞつ! ウッ!

男四 (ガタガタ顫えながら) 合併いたしましたしよろしいでしょうか? それともいたさぬ方がよろしいのでございませうか?

帆立 (絶望的な聲を振りしぼる) 神が飢える! 歸れ、歸れ、歸れ! ウッ、合併しろ、合併してしまえつ! ウズ彦が飢える! プルルル、ヒッ!

男四 へーつ! (畏怖に満ちた顔で三拜九拜して、あわてゝ引きさがつて行く)

(帆立はしばらくシミ・ダンスをつづける。……やがてフツとそれをやめて、立つたまゝ狐つきから狐が落ちた様にケロッとした顔で四邊を見廻し、誰も居ないのを見て、奥の間へ行こうとして、ソロソロ正面の襖の方へ歩きかける)

(右手から人の来る足音)



(それを耳に入れて、仕方なく奥へ行くのをよして、振返る帆立。右手から黒紋服に袴の三十七八の男五が出て来る)

帆立 ……？(相手の様子が、いつも此處にやつて来る人間達の態度とは少し變つていたので妙な顔をして見る)

男五 ……(室の中をズーツと見廻し、天井の方まで見終つた末)やあ、はじめまして。神様は、あんなですか？ え、と、(見廻しても座蒲團は一つしか無いので、緋の座蒲團の所へ行き、それをチョツと引張り出して、坐る)……まあ、お坐んなさい。

帆立 ……(こんな目には初めてあうので、非常にめんくらつて、呆然と相手を見詰めている。やつと疊の上に坐る……)

男五 私は初めて此處にやつて来たのであるが、思つたよりも大變なもので、驚ろきましたなあ。アハハハ、株屋だとか有閑マダムなどは、まだ解るとしてもだな、北斗會の瀬ノ尾や臼田の榊原などまでが、こんな所へやつて来ると言うのは、意外でもあれば、心外でもある。假りにも政界と經濟界に於ける一方の重鎮がさ。これを以てしても現代社會に於ける信念の缺除と不安の風潮の甚だしさが解ります。要するに不安なんだな。何か

に頼りたい、が、何も無い、それでウロウロ迷つているのが、迷い迷つて、不安の嵐に追いまくられて、こんな吹きだまりに寄つて来る。

帆立 吹きだまり……(相手の喋りまくるのを見ている)

男五 溺れる者は藁をも掴む、です。その、これは藁しべだ。

帆立 藁しべ……

男五 社會にそんな需要が有る。需要が有れば誰れかが供給せねばならん道理だ。世の中が別なものならん限り、無くなりはない。その物自體は、鯛の頭でも、木の根つこでもよいわけだ。要するに神と言うものは人間が拵えるんだからな。

帆立 人間がね……(あべこべの事を言われて、非常にヘコタレている)

男五 噂さに聞くと、あなたは奇蹟を行うそうだが、それを是非見せて欲しいな。私は自分の眼で見、耳で聞かぬ内は信じない性分ではな。奇蹟を行つて見せて下さい。うん？ 見せて下さい。(泣きべそをかき、ペコペコしている帆立)……見せて下されば、私も信者の一人になりましょう。どうだ？ 私は——申し遅れたが、私は笹山と言う者です。妙法一靈會、行動隊々長、笹山日堂。さ、見せていたゞきたい。うん？



帆立 どうも、奇蹟など言う——

男五 (怒鳴る) 裸かになれつ！ 裸かになれつ！ 裸かつ！ (驚いて飛び上る帆立) アッハハハハ、もうよい。そんな事だろうと思いましたがよ。では失禮。料金はいくらですか？  
いえさ、出すべきものはチャンと私は出すと言う主義だ。いくらですか？

帆立 へい？

男五 料金々々。一人いくら？ さあ——

帆立 そんなものは、いたゞいて居りません。

男五 冗談を言つてはいかん。金を取らないで、第一、これだけの堂々たる設備がどうして出来る？

帆立 寄附だそうです。私は、よく知らん。

男五 ふーん。よかろう。それもよし、と。(祭壇の上の剣に目を付け) 立派な刀が有るなあ。どれ、ふーん (取つて見ていたが、いきなり居合ひの型で抜く) えいつ！ おおつ！ ウム！  
ウ！ とう！ やつ！ えいつ！ (ビュッビュッと振り廻す。刀の先が帆立の鼻の先まで延びて来るので、帆立その度に飛び退き、その邊をおどり廻る) ウムッ！ ウ！ とう！ (やめて、

刃を見ながら) 新刀だな、備前物の末流か。ハハ、銘は見なくても解つている。(鞘に納めて祭壇の上に置きながら) 作りだけ綺麗なコケオドシの刀が近頃多い。人を斬るために打つた物で無い奴は、抜いて見たばかりで殺気が無いから、駄目だ。(祭壇の上の紙片に眼をつける) 刀は人を斬る道具なんだから、アハハハ。

(帆立は、相手が紙片に氣を取られている隙に逃げ出そうと思つて坐つたまゝでジリジリ後しざりをしてゐる。ビツシヨリ冷汗をかいてゐる)

男五 (不意に笑いを止めて、顔色を變えている) せ、瀬ノ尾、辨町會より五百萬？ こ、これは何だ？ 五百萬？ これは何です？

帆立 そ、そ、それが、安藤の手に入る、安藤の手に入る、ようにした。

男五 した？ 安藤の手に？ した、とは誰がしたんだ？

帆立 わ、私がした。私がそう言つてやつて——。

男五 ウーム。嘘だろう？……ほ、本當に？

帆立 せ、瀬ノ尾に、私がそう言つて——。

男五 ……そうか、ようし！ 嘘ではあるまいなあ？ (黙つてコツクリをする帆立) ……それで



解つた！ 中山がなぜに瀬ノ尾の方へお百度を踏むか、今の今日まで解せなかつたのだ。ありがたい！ ようし、こいつは、うまい！ (ピシヤリと膝を叩いて、あわてゝ立上り、小走りに行きかけるが、足を止めて) ……瀬ノ尾は、あんたの言う事は聞きますね？

帆立 こ、これまで、何でも聞いた。

男五 偉い！ (帆立をチロチロ見ていたが) あんたは、やつぱり神様だ。では、いづれ又！

(いきなり膝を突いて、今迄の誰がしたよりも丁寧な辭儀を四つ五つ續けざまにしてから、アタフタと右手へ消える)

(ゲンナリして坐つている帆立)

(これまで人々の出入りした所とは少し違う右手の襖が、ソーツと開く。開いたまゝで暫くは誰も出て来ないが、やがて人の足の先が現われ、手が現われて、抜き足をして廊下に出てきたのはあやしげな頬被りの男六。きたならしいオーバオールの上に背廣の上着を着て、左手には恐ろしく大きなドタ靴一足をさげ、右手にはスパナを握りしめてゐる。その手がブルブル顫えてゐる。抜き足で廊下を此方へ——)

(帆立は人の来た氣配に眼が醒めたようになり座蒲團の上に祭壇に向いて坐り直し、あわてて紙片の字を默讀する。次に来る筈の信者に關する條を讀んでゐるのである。讀み終り、頭をブルブ

ルと振り、眼をつぶつて靜座する)

(男六、抜き足で此の部屋に入つて来る。はじめ帆立の姿が眼に入らず、誰も居ないと思つて四五歩入つて来る)

帆立 えいつ！ ウッ！

(男六、びつくりして飛び上る。やにわに逃げ出しかける)

帆立 又、病氣が起つた！ まあ！ 坐れつ！

(男六、ペタンと坐つてしまい、ふるえる)

帆立 えつ！ 慾が有る。自分の慾が内にこもつて病氣になる。慾を捨てる。

男六 へつ！

帆立 源五郎丸健作。用心しろよ！

男六 へ。源五郎丸健作？

帆立 白つばくてもいかん！ 持つて居る物を捨てる！ 持物を捨てる！

(男六、ドタ靴とスパナを見較べ、靴だけを下に置く)

帆立 近頃、あんたの工場では自動車の部分品を拵へて居る。それはよい。



男六 へい？

帆立 それはよいが、もうけかたが、ひどすぎる！

男六 いえ、私は——？

帆立 臨時工を本工になをして常雇給を出さなければならなくなると、首にする。先日も十人ばかり首を切つた。これも良くない！

男六 どうして、それを、御存じ—— 實はそれで私——

帆立 見通しだ！ みんな怨だ。捨てる。でなければリユーマチは又出るぞ。

男六 リユー？ (ピクピクしながら、しきりと首をひねくり廻している)

帆立 捨てるつ！ 捨てるつ！ 捨てるつ！

男六 へ！ へ！

(右奥から足音が近づく。男六それを聞きつけ、ギツクリして立上り、ウロウロと逃げ口を捜すが見付からぬので、正面の襖の一番端を少し開け、そこへスツと隠れる。その際、室の隅にドタバタだけは置き忘れる)

(右手から入れ違いに總務)

總務

ハハハ、いや、どうかな？ ハハ、いやあ、行動隊々長かなんか知らんが、いまどきの連中が、スのコシニャクと言つて見たところで、要するに右も左も眞暗闇ぢやからなあ。あんなのが一番よい信者になる。結局、人間と人間は自分の利益で以てつながっているんぢやから、その念所を掴むが勝ちだ。利を以て誘えば金鐵もこれを——

帆立 あんたと僕も利でつながっているのか？

總務 う？ あんたと？ 左様さ。ま、さうだな。

帆立 僕が自分の利益を捨てると言つたら？

總務 損をする。それだけの話。

帆立 損をしてもよい。僕はもう、いやだ。

總務 外は、失業地獄ぢや。あんたに何が出来るかいな？ まあ、ヒステリーは起さん方が身のためだ。

帆立 大道易者にでもなれます。

總務 それそれ、なるとなれば、それだろう？ 易者にしたつて、結局、現在あんたのしているのと同じ事をするわな。同じ事さ。だろう？



帆立 神様にまつり上げられるよりはましですよ。

總務 易者にしても一種の神様さ。大きいか小さいかの違いだけだ。よかれ悪しかれズバツと言いつて物を言う奴が神様になる。宗教と言うものは、みいーんな、それだ。迷信々々と言いつて言うが、迷信で無い宗教なんぞ一つとして有る譯のものちや無いで。それだよいのだ。現にこれで病氣が癒つて居る。迷いが救われて居る。いろいろと人が助かつて居るのだ。

帆立 しかし、僕はもう、ごめんだ。チエツ——

總務 逃げ出すのか？ よかろう。そうなれば、又造ればよいのちや。もうこうなれば御本尊は何でもよい。ひとつ、ウズ彦でも据えるか。

帆立 え、と、ウズ彦はどうしました？

總務 裏で走り廻つとるぢやろ。

帆立 あんまり腹がすくと、又此處へ來ますよ。彼奴は僕をよく知つて居るんだから。

總務 たかゞ豚ぢや、氣にせんでよろし。

帆立 たかゞ豚だと言つても、生きて居るのに食物をやらないで放つて置くのは——

總務 ぢや、いつそ、つぶすか。

帆立 ウズ彦をですか？ じよ、じよ、冗談——

總務 あんた、なんであれをそんなに好くかの？

帆立 好く？ いや、僕はウズ彦を信用して居るんですよ。彼奴も僕の事を、うまい物を呉れる人間として信用して居ます。人間としてですよ。

總務 アハハハ。信用か。よかろう。とにかく、では直ぐに後を續ける。え、な？

帆立 チョ、ちよつと。僕あ先刻から小便が詰つて——

總務 小便！ そりや我慢せないかん。直ぐぢや、もう後二人だけぢやから。

帆立 二人？ ウーン。

總務 (行きかける) では、こんだは、源五郎丸健作、すぐそこの自動車工場の工場主さ、リ——  
—マチが又起つとる。ちやつと一つ二つ氣合いを掛けてやれば治る。

帆立 へ？ 源五郎丸なら、先刻すんだ。

總務 何を言うやら、寝呆けてはいかん。アハハハ、え、の？ (右手へ去る)

(帆立キヨロキヨロ四邊を見廻す、隅に置いてある靴を發見し、それに近づき、ためつすがめつ



しながら驚ろいている。次にその持主の姿を求めて廊下に首を出して見たりするが、誰も居ないので、フト思い付いて端の襖をがらりと開ける。そこには男六が平蜘蛛のようになつてすくんでいる。

帆立 だ、誰だ、君あ？ 誰だ？

男六 ……へ。

帆立 誰だと言つて居るのだ？

男六 ど、ど、どうぞ御かんべんなして！ どうぞ、な、なにも悪気が有つて入つて来たんぢや——ほんのツイ出来心で。——へつ！（ハツタの様に頭を下げる）

帆立 だから、誰だと聞いているんだ？ 早く言え、下腹が張つてどうもならん。

男六 へ！ 實はその源五郎丸——

帆立 なんだと？

男六 の、自動車工場の職——

帆立 なあんだ、それならそうと早く言えばよい。

男六 職工でしたが——

帆立 でした、とは？

男六 首になつちやいまして——あなた様よく御存じで。先刻おつしやつた——

帆立 あゝ、そうか！ そうか！ そいで？

男六 酒が好きなんですから、へつへつ……

帆立 ハッキリ言う！ 此處をどこだと思ふ！

男六 へい。わけも無いのに首にしやがつてと、酔うとツイ氣が立つて来てムテイ腹が立つて来るもんだから——それに今日は米が無いとか何とかで蟬がわめくんで、そいつを叩きながつてると、小僧共あ泣くしき。そこいヤケ酒だ。カーツとして、こんなことになるのも工場のオヤヂのせいだと、いきなりスパナ一掴んで家を飛び出して、薬鐘頭あ叩き割つてくれようと、無我無中で行つた——ら、留守だ。

帆立 ふーン。うむ、源五郎丸健作なら、此處に來ている筈だ。もう直き此處に來よう。

男六 そいつあ、いけねえ！ 直ぐですか？

帆立 そいで、どうした？

男六 かえして下さい！



帆立 逢いたがつてたんぢや無いのか？

男六 だから、そいつは酒のせいだ。もう、あんた。——かえして下さいよ。

帆立 だから、そいで、どうしたと聞いているんだ。

男六 歸りに此處の横を通つたんです。木戸が開いているので何の氣も無しに覗くと、馬鹿にデカイ家でしょう。それにシーンとして人氣も無し、ついフラフラッと——

帆立 入つて來たと言うのか？ ぢや、なんだ、君あ泥棒ぢやないか！

男六 何もとつたわけで無え。どうか見逃して——。へい此の通りです。

帆立 聲を立てるぞ！ 早く歸れ！

男六 は、はい、どうも——歸りますから、ごかんべんなすつて、へい。(コソコソ行きかける)

帆立 そつちへ行くと、廊下で源五郎丸と會う。

男六 オヤチが？ そいつは、いけねえ！ こいつは——(アヲを食つて、その邊をキリキリ舞いする) 逃がして下さいよ！

帆立 (それを黙つて見ていたが、急に喜色を浮べて) ウム！ おい、君、此處にチョツトの間居てくれんか、僕の代りに。

男六 ぢよ、冗談言つちやいけねえ。

帆立 ほんのチョツトだ。小便をして來る間だけだ。先刻から詰つて、顔えが來そうになつて  
いるんだ。

男六 冗談言つちやいけねえ。

帆立 これを着て、此方に向いて、知らん顔して坐つていけばよい。(白羽織を脱いで男六に着せ  
てしまふ) 酒が好きだつて言つてたな？ 後で御神酒をいくらでも飲ましてやる(男六を  
座蒲團に坐らせる) チョツトの間だ。いやだと言つたら、怒鳴つて縛らせる！

男六 こ、こ困るよ。弱つたなあ！

帆立 黙つて坐つて居ればいゝんだ。

男六 何か言うだろ、先方で？

帆立 言つたら、かまう事ないから、怒鳴りつけてやればそれでよい。まあ、いゝよ。(靴を持  
つて左の方へ去りかける)

男六 俺の靴を持つてつちや——

帆立 此處に置いとけはしない。



男六 あんた、どつかへ行つちまうんぢや、あるまいね？

帆立 行つちまう？ なあに、……ウム！ そ、そんな事あ無い！ そら来た。(右手から足音。帆立は左手の方へ去る)

男六 よ、弱つたな、どうも、こいつあ！ (立つたり坐つたり、モチモチして弱り切つてゐる)

(右手から人の入つて来る氣配。男六は、もうどうにも仕方がなく、座蒲團に祭壇の方を向いて坐つてブルブル顫えている)

(右手から入つて来る和服の中年の男七。ピタツと坐つて禮をするが、腰の邊がひどく痛むらしい様子)

男六 ギャツ！ (古代鏡の中に以前の雇主の顔を認めたのである)

男七 左様でございます。源五郎丸健作でございます、はい。此の前、お祈りをしていただいてズーッと良かったのでございますが、又、少し、なんです—— (相手が何も言つてくれないので、仕方なく言葉をつぐ) 或る醫者に言わすと坐骨神経痛の氣味も有ると言います。がな。なんでもよいから治つてくれさえすればよろしいが、どうにも痛みますんで—— (待つてゐるが、相手は何も言つてくれぬ)……はい。此の前の御伺いの際は、後で總務様か

らの、おトキアカシで、よく解りましたでな、材料の仕入れ先を變えて見ましたが、なにしろ近頃儲かりはしますが、業界もきゆうくつになつてしまひまして、變えると言つても思ふように行きません。第一この自動車の部分品と言うやつが——

男六 ギャツ！ ウーム、ウウウ。(もうヤケクソになり、帆立から自分の言われた事の口眞似)び、び病氣が又起つた！ ま、ま、まあ坐れ！

男七 へつ！ はい坐つて居ります。はい！

男六 慾が有る！ 慾が内にこもつて、それで、リョー、リョー、リョーマチになる！ 用心しろよ！ 慾を捨てる！ 持つてゐるものを捨てる！ 儲かり過ぎる！ それだつ！ それだぞつ！

男七 へーつ！ (畏怖にとりつかれて、平蜘蛛のように壁にひれ伏している)

(男六、ソーツと肩越しに男七の方を見る。自分の言葉の効果の甚大なのに呆れている)

男六 (次第に自信が出て来て) 用心しろよ！ 臨時工を、こないだ、譯も無しに首にした。これがいかん。

男七 いゝえ、それは、採算上、どうしても——



男六 それがいかに！ 見通しだ！ みんな怨だ！ みんな捨てるつ！

男七 はい！ では、もう一應よく考えて見ることに――

男六 (舌をベロツと出して) 歸れつ！ 歸れ！

男七 ぞあ、リユーマチの――

男六 それは、メカケを一人、へらせつ！ 本妻のほかにメカケを二人とは、多過ぎるぞつ！

男七 へーつ！

男六 やつ！ え、やつ！ よし、そのまゝ！ そのまゝにしておる！ おゝつ！ そのまゝ！

(段々いゝ氣持になり、それでも相手が顔を上げはしまいかとビクビクしながら、立上つて行き、持つてゐたスパナーで、男七の腰をイヤと言うほど、ひつぱたく) えやつ！

男七 ヒーッ！ (それでも疊にうつ伏している)

男六 (驚ろいて座蒲團の方へ逃げ歸つて) もうよい！ 歸る！ 歸つた！

男七 はい。では――どうもありがとうございました。はい。(立上る。腰を揺つて見て、狂氣して)

あ、あ！ 痛みが取れた様な氣がいたします！ ありがとうございます。ありがとうございます。ありがとうございます！ (又、もう四つ五つお辭儀をして、嬉しさのあまりヒヨロヒヨロしながら右手へ小走り

に去つて行く)

男六 フーッ！ (呆然としている。自分で頭をグラグラゆすつて見ている。スパナーを見る。自分の舌

を引っぱり出して鏡に映して見る。ゲラゲラ笑い出す。自分の笑聲に驚ろいて四邊をキョロキョロ見廻す)

(右手から入つて来る女二。五十歳位だが着物も化粧もひどく贅澤で若造りのために、チョット年齢がわからない。變にお上品で色つぽい。身體の方々が痛むと見えて。顔をしかめ齒を食いしぱり、身體を折つて横腹を左手でおさえ、右手では胸をおさえている。ベタリと坐つて、少し唸る)

男六 だ、誰だ？

女二 せんだつては、ありがとう存じました。若島の母親でございます。あの――

男六 ワカシマ？

女二 はい。加藤博士のおつしやいますには、それは神経病だから、薬を飲んでも治りはしない。佐田博士も、あなたがその氣にならなければ――

男六 そ、そ、それがいかに！

女二 はい。



男 六 右も左も眞暗闇だつ！

女 二 そうなのでございます！ いくら氣のせいだと言われましても、痛みますものは痛むんざいますから。お薬だけでも七色飲むのでございませう、あの薬とこの薬と、どれがどの病氣に利くのか、身體の中で戸惑いをするのではないかと心配でございます。そうすると又頭痛が起きて来るのでございます。第一、それだけのお薬をみんな飲んでしまいますと、もうお腹が一杯になつて、御飯がいたゞけないのでございます、はい。

男 六 ……たかゞ豚だと言つても、生きてゐるのに食物をやらないで放つて置くのは――

女 二 はい。先生がたも、物を食べないのは毒だ毒だとおつしやつて下さるのですけれど、なにしろ、病氣なれば致し方がございませんで――

男 六 いつそ、ひと思いに、つぶすか！

女 二 はい。どうぞ、そうお願いいたします。今、具合の悪いのは、この左の腕の神経痛と、膽石に差し込みが来ています。もう痛くて、痛くて、はい。それに心臓が苦しくつて。佐田博士は神経性の心悸昂進だから放つといつてもよいとおつしやいますけど、私は狭心症ではないかと存じます。それに左の足の釣るのが今朝程から急にひどくなつて参りま

して、それから四五日前から、少し舌がもつれる様な氣味で口を利くにも不自由いたします。いくら中風の氣が出て来たのではないかと存じますが、いかゞでございませう？ えゝ、頭痛などは始終の事で、病氣の中には入れて居りません。それから――

男 六 ウーン……頭痛か？

女 二 はい、此の、此處の所から、此方へかけて――

男 六 ウ、ウ、ウ――ギャツ！

女 二 はいつ！ (ひれ伏す。やがて少し頭を持ち上げて、右手で額や頭を壓へて見ている) あ！ 癒りました！ 癒りました！ 今までピンピンしていたのがピタツと癒りましてございませう。頭がスーツと軽くなつて参りました。はい！ ありがとう存じます！

男 六 捨てる！ 捨てる、捨てる！ えつ！ おゝつ！ えやつ！

女 二 へーつ！ ……あゝ、心臓の苦しいのが取れました。舌が急に自由になつたようでございます。(本當に次々と癒つて行く。狂氣渴仰する) 次は腕の此の神経痛を、どうぞ、はい！

男 六 つぶすぞつ！ つぶすぞつ！ 豚つ！ ウウウッ！ みんな怨だつ！ 見通しだつ！ えいつ！



女二 あゝ腕が伸ばされるようになりました！（左腕を振り廻している）

男六 たかゞ豚だ！ スのコンニャクと言うかつ！

女二 膽石の差し込みが取れました！ まあ、何と言う！ ありがとうございます。奇蹟でございます。あなた様は神様でございます！

男六 （だんだん怖くなつて来て） もうよい、歸れ！ 歸れ！ 歸れつ！

女二 はい、はい、はい！ ではもう一つ、足の釣るのを、どうぞ、はい！ お願いでございます。お願いでございます。

男六 ギャーツ！（自分でも譯が解らなくなつて、そこにある劍を引っこ抜いて、いきなり振り廻す）  
歸れーいつ！

女二 へーつ！（叫んで飛びさがる。そしてヒョイと氣が付くと、左の足の痛みが無くなつて狂喜してその邊で四五歩踊るようにして見て） あゝーあゝ！ 癒りました。癒りました！ おあらたかなものでございます！ 皆様に申し上げなければなりません。あなた様は神様でございます！

（相手が拔身を振り廻して危いので、しまいまで言い終らず、廊下の方へ飛び出し、そこで

身を伏せて、合掌を一つしてから立上り、アタフタと右手へ去る）

（あとには男六、まだ劍を振りまわしているが、女二が居なくなつたのに氣付き、振りまわすのをやめる）

男六 ウーン。（トタンに眼をまわして、ひつくり返る）

（間）——（馬鹿囃し）

（テケ、テケ、ピツピーと囃しの終りの所で男六ソッロ起き上る。頭を振る。その邊をキョロキョロ見廻す）

（ズーツと右手の奥で多數の人々のざわめく聲々。それが次第に近くなつて来る）

（ピツクリして飛び上る男六。こうして居たらどんな目に會うかわからない事に氣が付いて逃げ口を捜してウロウロする。白羽織をかなぐり捨てる。奥正面の襖をソツと開けて、うかゞつて見る。人が居そうにないので、慎重な抜き足差し足で奥へ消える。あとの襖は半開きにしたまゝ）

（入れ違いに、右手入口からドヤドヤと押合うようにして殺到する信者達——今迄此の場に現われた者全部と、更に新しい顔も多數混つている。總務や執行や執事の白衣姿も勿論混つている。

若島母堂から奇蹟を現に見せられて、皆が昂奮しきつて、帆立に向つて渴仰の念を捧げるために揃つて押し寄せたのである。互に熱狂的な眼付きをして囁き合い、感嘆し合いながら入つて來



る。

總務 みなさん、お静かに！ お静かに！

女二 (男三をつかまえて) おかみが、ヤッとおつしやるんざいます！ すると、一〇一つ私の苦しみが、まるで舐めて取つたように消えて行くんざいます！

男三 ふ！ 奇蹟でがんすなあ！

男七 全くですよ！

男五 あゝ、いちつしやらん！ (皆が祭壇の方を見る)

總務 あゝ！……いや、接神の方へおいでになつたのです。直ぐお戻りになりましょう。

(開いている襖を指す) 皆さんお坐り。(自分が先づ坐る。皆もそれにならつて坐る) 直ぐにお戻りになります。

女二 (女一に) 私があんなに苦しんでいたのは、あなたも御存じございましたね？ おかみがヤッとおつしやいます、とそれが一つ一つ、まるで舐めたように――

總務 静かに！ おでましでござります。

(皆がシーンと静まる。襖の向う側でドシドシ足音がする。次に襖が向う側からゴトゴト鳴る)

おでまし！ (まつ先に疊にひれ伏す。皆もそれにならつて畏怖に満ちて疊に額をすり付ける。水を打つたように静かになる)

(間)

(正面の開いた襖の間から、びつくりする位に肥え太つて桃色をした豚のウズ彦が、悠然として現われる。堂々と前の方へ歩いて来る。――それに向つて、ひれ伏している一同)

ウズ彦 ブウ、ブウ！

總務 シーッ！ (自分でもひれ伏したまゝ、皆の頭の上へ左手を上げて、押える)

ウズ彦 (人間を無視して、その邊を歩き) ブウ、ブウ！

總務 シーッ！

(ウズ彦、自分の捜している人間が居ないので、悠々と、先程帆立の去つた左手へ向つて去りかける)

(幕。――馬鹿囃子)

(幕外、花道へ、抜き足で、出て来る帆立。羽織こそ着ていないが、白衣白袴に、片手に靴を下



げている)

帆立 (七三の所で止り、振返つて) 此處まで逃げて来りやこつちのもんだ! (又駆け出そうとして、気が付いて自分の素足を見、それから手の靴を見て、うなづいて、靴を穿きにかゝる)  
(幕の傍からウズ彦の鼻が覗き、次に花道に出て来るウズ彦。帆立を見つけて喜んでブウブウと言ふ)

帆立 (靴を穿き終る。非常に異な姿である。しかし勇氣リンリンと) おつと、どつこい!  
ウズ彦 ブウ、ブウ!

(馬鹿囃子と、鳴物と、ツケに乗つて、ドタ靴を高く鳴らし、帆立とウズ彦は、器量一杯に逃げの六法を踏んで揚幕へ)

(一九三五・十月)

(作者附記) —

□専門劇團の手で堂々と演じられるのと同時に、素人劇團の手でどんなに手軽に演じられても面白いように心がけて書いたものなので、いろいろの集會の餘興として演じて貰いたいと思ひます。やり方は自由だが、マチメくさつて演じることが大切です。フザケてやると、あまり効果が

がありません。



おさの音一幕



時——現代。

所——貧しい農家の縁側を中庭の方から見たところ。

人——緒方次郎……盲目。二十五歳。

同 末吉……その弟。十七歳。

夏 子……次郎の許婚。二十四歳。

儀 八……びつこの老人。六十過ぎ。

慰問の人々。指揮者。青年團の團員達。女學生。女生徒達。老人。

中年の百姓。老婆。若い婦人。その他の有志。

静かな農村の午後。縁側の陽のあたった障子を背に、洗いさらした手織の着物を着た盲目の次郎があぐらで坐り、その前に汚れた服の末吉が萬年ペンをもち縁側にひろげたレターペーパーの上に蔽いかぶさるようにして、兄が何か言うのを待つている——

次郎は落着いた、きげんの良い顔をしている。しかし、はたから見ると、にわか盲の常で、どことなく頼りなげに寂しそうだ。末吉は十七とは言つても身體つきはスツカリ大人と同じく逞まし



く、背などは兄よりも高い位である。

末吉 ……はい、いよ、兄さん。

次郎 レタアペーバア持つて来たか？

末吉 うん。

次郎 ……チョット待つてくれ。今考えてるんだ。

末吉 しかし僕あ字が下手だよ。

次郎 讀めるにや讀めるんだろ？

末吉 チェッ、なあんだい、字は字だい！

次郎 そんなら、いよさ。ハハハ、怒るなよ。

末吉 怒りやしないけどさ。……だけど、なんだなあ、兄さんが病院からよこしていた手紙を

書いてくれた人は、うまいね。看護婦さん？

次郎 うむ……（何か思い出している）

末吉 一年間ズットだからなあ、親切な人だねえ。それに、字がうまいとそれを書いた人ま

で綺麗な人の様な気がするからトクだねえ。綺麗な人だろ？

次郎 うん、同室の連中はそう言っていた……とにかく聲は綺麗な人だったよ。

末吉 ……（ハッとして兄の顔を見上げてからドギマギする）僕あ、僕あそんな……チェッ悪い事言

つちやつた、畜生！

次郎 （ニコニコして）いよんだよ、末吉。自分でさへ、寝起きなんかウツカリ盲になつてい

るのを忘れていたりする事があるんだものなあ。

末吉 ……かんにんしてくんな、兄さん。……

次郎 いよんだつたら。あゝ、三番の上りが通る。

列車の通過する音が微かにして来る。

末吉 ……（まだしよげて、列車の音が遠く消えて行くのを、聞くと無く聞いている）

次郎 ……どうも、なんだな、氣のせいか知らんが以前よりも汽車は重くなつたようだ。貨物  
や乗る客が多くなつたのかな。



末吉 音を聞いて、そんな事がわかるの？

次郎 わかるよ。……(少し離れた所で鶏がコケッコ、コケッコとけたましく鳴き出す) あゝ裏の家で鶏が卵を産んだ。

末吉 (やつと微笑を取戻して) さあ、書こうよ。

次郎 うん。……(まだ耳をすましている) 谷の儀八爺さんの水車は、まだ水受けの箱が一つこわれたまゝだなあ。チョットなをしやいゝに、爺さん、いこちだからな。

末吉 そんなもの聞こえやしなないぢやないか。

次郎 聞こえるよ。

末吉 嘘言つてら。あんなに離れているのに、此處まで聞こえるわけが無い。谷の水車だぜ？

次郎 だから、谷の水車さ。ギー、ゴトン、ギーゴトン、それから、チョット間が有つて、ギーギーと言つてからドサンと言うんだ。……ほらね。

末吉 そうかなあ。……(一心に耳をすます。聞こえないらしく、縁板に耳を押しつける)……

次郎 ……(チョット聞き入っている)

間。……四邊はシーンと静かである。

末吉 (顔を上げて) 駄目だあ。遠くの方でキーキーと言う様な音はするけれど、何だか、よくわからん。

次郎 眼あきの悲しさだな、ハハ。實は俺も眼が見えていた頃は聞こえなかつた。

末吉 だけど、昨日あたりから、兄さんそんな事ばかり言つてるぢやないか。音がそんなに氣になるの？

次郎 氣になるんぢやない、なんだか、なつかしくつてしようが無えんだ。俺あ、六年ぶりで、村の音を聞きに歸つて来たようなものだからな。でも、来る前に想像していたより、もつとズット良いもんだなあ、生れ故郷の音と言うものは。

末吉 でも、これからいくらだつて聞けるのに。第一、兄さん戻つて来てから十日の上もなるのに、急にそんな事言うの變だよ。

次郎 だつて、こうして一人で静かにして置いとかれるのは、やつと昨日あたりからだぜ。来てくれるのはありがたいけど、親類や村の人達が、あんなに次々とやつて来てくれるのも、チョット迷惑だよ。



末吉 みんな兄さんに對する氣持から來るんだよ。青年團でも、何かしようと今相談しているらしいや。……とにかく、みんな誠心誠意なんだから。

次郎 そりや、わかっている。俺みたいな者を、それ程考えてくれて、濟まんと思つて。しかし、當分ソツとして置いて欲しいんだ。俺なんかにかまわないで、ソツとして置いてほしい。ほかにする事がウンとある時だ。……それに、いくら同情されたり、いたわられたりしても、これ、どうにもなるもんぢや無いんだ。……自分の量見だ。自分の量見は、俺だけで、俺一人でなんとか片をつけないぢや、これどうにもならん事だ。そいつが何とかならんと、出るにしても引くにしても、なんともならん。……盲になつたのは、この俺だ。他人ぢや無いんだ。

末吉 そ、そ、それ、兄さん、それ、どう言う意味なんだよ？ そんな風に、兄さんが、變に一人ぼつちみたいな氣になるの、僕あ——（少年らしく昂奮して突つかゝるように）僕あ、そいぢや、どうすりやいゝんだ！ そんな、そんな風に兄さんが——

次郎 いゝよ、いゝよ、末。わかっている。お前の氣持はわかっている。相變らず直ぐムキになるなあお前は。（微笑にまぎらして）ハハハ、馬鹿だよ。

末吉 だつてさ……。

次郎 さてと、ぢや、書いて貰うかな。いゝか？ ユックリ言うからな。

末吉 （まだ口の中でブツブツ言いながら紙の上にかゝみ込む）うん。

次郎 俺の言う通りに、黙つて書いてくれよな。どんな事を俺が言つても口出しをしないでソックリそのまゝ書くんだよ。いゝな？

末吉 言わない。いつも、なんにも言やあしないぢやないか。

次郎 よしよし。……わからん字はひらがなでいゝ。……いゝかい？（考え考え口述をはじめ）『その後も、お元氣で働いていられる事と思ひます。……（少し待つていてから）この間來て下さつた時も、その前の時も、いつもいろんな人が來ていたゝめに、何も話が出来ず残念でした』……いゝか？……（末吉は夢中に書いている）『先日から僕の所に来してくれる人で、いつも黙つているのは谷の水車の儀八爺さんとあなたとの二人だけです。儀八爺さんの黙り屋は昔からの癖だから、不思議には思ひませんが……あなたが殆んど口をきかれないのは、なんとなく氣にかゝります』

末吉 ほ、と、ん、ど……。誰に出すの此の手紙？



次郎 そらそら、今言つたばかりだぞ。

末吉 口出しとは違ふよ。それに、しまいまで書けば、どうせわかる事ぢやないか。

次郎 だから、いゝぢやないか。黙つて書けよ。……『家の者に遠慮なさつてゐるためとも思いますが、……遠慮だけで無く、何か考えていられる事が有るためでは無いかという氣もするので、今日は弟に頼んで、少し長い手紙を出します』

末吉 (書きながら) ……いられる事がと、あるためではと無いかという氣も……廻りくどいなあ。

次郎 ……そこで行を變えてくれ。……『僕も、こんな風になつてから、二年近くなり、近頃ではスツカリ馴れて氣持も落ち着いています。盲目の世界も、はたで考える程不自由なもので、寂しいものでも、ありません。……それに皆が自分に對して、あまり良くして呉れます。ホントに、自分を顧みて、ありがた過ぎる氣がします』……あまり早すぎるか？

末吉 うゝん、大丈夫だ。……(ペンの音を響かせて書き取つて行く)

次郎 ……『特に家の者が、僕に心配をかけまいとして、タンボの仕事や家計のことで、僕には

知らさぬようにして、一所懸命になつてゐるのが、すまなくて、たまらなくなつてしま  
います。……父は唯一つの樂しみの晩酌も、やめてしまつたらしいです。……父も兄も  
嫂も今日も早くから、畑に出て行き、弟も、これを書き終れば行くと言つています。……  
……兄も嫂も、身體が弱く、兄はジンゾウが悪いし、嫂は妊娠中です。……以前の通りに  
僕が中心になつて、畑仕事をやれさえすれば……』

末吉 (セツセと書取つていたが、不意にカラリとペンを置いて) いやだ、俺あ！ チェッ！

次郎 どうした？ 何がいやだ？

末吉 こんな事、なぜ書くんだい？

次郎 なぜつて、……俺の思つてゐる事を、正直に書いてゐるんだから——

末吉 兄さんが、なぜそんな風に思ふ必要があるんだ？ お父つあんにしたつて、兄さんにし  
たつて、嫂さんにしたつて、そんな、兄さんがこうしてゐるからつて、何も無理をして  
働いてゐるんぢや無いんだ。僕なぞ、兄さんのことを——これから僕が兄さんの分まで  
働く氣でゐるんだ。それでも家が苦しけりや、町へ出て職工になつてもいゝ。それを、  
それを見さんの言う事を聞いてりや……俺あ、いやだ、そんなの！



次郎 そうぢや無いんだ。そうぢや——

末吉 そうだよ！ なら、なぜそんなに濟まながるんだ？ 全體、兄さんは、自分の眼がなん

で取られたんだと思つてんだ！（兄が口をはさもうとするのを言わせないで押しかぶせて口をとがらせて言い續ける）もつと、何もかも僕達にまかせて、兄さんはノンキにしてりや、いゝんだ。なんかしたくなつたら、どつかへ行きたくなつたら、俺がおぶつて行く！

次郎 （少年らしい生一本な弟の愛情をかわしかね、へきえきして片手で空中を掻きまわしながら）いゝよ、いゝよ。俺が悪かつた。

末吉 全體、誰に出す手紙か知らんけれど——

次郎 もう、いゝつたら！ ぢや今ところ取消しだ。（微笑）いや、皆があんまりヤイヤイ言つてくれるんで、固くなつちまうんだなあ。

末吉 固くなる必要なんか無いよ。ノンビリ歌でも歌つてりやいゝ。

次郎 ハハ、歌か。……だつてお前だつて、固くなつてやしないか？ お得意の馬鹿囃し、まだ一度も踊らんぢやないか？

末吉 ……ひよつとこ踊りなんか、つまらんよ。……（考え込んでうつむいている）

次郎 ……踊つてくれても、俺にや見えん。お前が踊らないわけは、それなんだ。ハハ、まあいゝさ。……儀八爺さん、笛は吹いてるかい？

末吉 吹かん。いつも腰に差しちやいるけど。……

次郎 儀八爺さんの馬鹿囃しも聞けん……

末吉 ……しかし、なんだな、お爺さんの黙り屋の變りもんは今に始まつた事ぢや無いけど、どうしてあゝマチマチと兄さんの顔ばかり見ているんだらうな？

次郎 そんなに見てるか？……今日もそこいらに来て、坐つてるんぢやないか？

末吉 （その邊を見まわして）いや、今日はまだ來ない。

次郎 なんしろ、足音も立てないでやつて來て、石ころの様に黙つてるんだからな、居るか居ないか、わわかりやしないや。……さて次を書いておくれよ。

末吉 よし、ぢや今ところ消すよ。（ガサガサ消す）

次郎 すると、どこから續くんだけ？ 見ろ、お前がグズグズ言うもんだから、ゴチャゴチャになつちやつた。

末吉 もう言わん。……えゝと、『自分を顧みて、ありがた過ぎる氣がします』の所までだ。



次郎

まあいゝや。……言うよ。行を變えてくれ。……『眼が見えなくなつてから、僕には、今まで見えなかつた事が、いろいろ見えて来るようになりました。……皆が同じく僕に良くして呉れるうちにも、それぞれのやり方が、いかにもその人でなければいけない様な、やりかたが有ることに気が附いて、面白いと思います。……谷の水車の儀八小父さんなど、毎日の様にやつて来て呉れても、何一言僕に聲をかけるではなし、ただ遠くの方から僕の顔をマヂマヂと見守つていただけだそうです……』

言つている所へ、白い粉をかぶつたハンテン着に藁草履を穿き、ひどいビッコを引いた爺さんが、火の消えた煙管をくわえたまま庭を廻つて出て来て、二人の方を見ながら縁側のズツと端の方に音もさせずに腰をおろす。腰に差している古い横笛。態度も顔付もノンビリした老人だが、言葉を忘れてしまつた様に最後まで無言だし、それに、感情を顔に現わすと言ふ事が無く、まるでお能の面の様に、ほしかたまつたような無表情である。僅かに眼の色だけが時に明るくなつたり暗くなつたり、稀れに笑いの様な影を現わすだけだ。今も、その暗い眼つきで次郎の顔をヂツと見ながら、不自由な脚をいたわる様に縁側にあげて、あぐらをかいて坐る。猫の様に音を立てないので、次郎は

勿論氣が附かぬ。末吉も夢中で筆記しているのと爺さんの坐つた位置が末吉の眞後ろのズツと離れた所なので、氣が附かない。……この間も次郎の口述はポツリポツリと續いている。

次郎

『……小さい時から、僕は小父さんを好きでした。小父さんも僕を好いていてくれました。……そして、小父さんは、今、僕の事を心配してくれているんです。……昔の自分の身にひきくらべて、僕の氣持の据え所のことを……僕が自分の量見をどんな風に据えるかと、ハラハラしながら心配してくれています。……小父さんが一言も言わなくても僕にはそれが手に取るようにハッキリとわかります。……小父さんは、馬鹿囃しの笛の名人で、村の小若連が茶番狂言の稽古をする時には、いつも笛を吹いたものですが、近頃ではフツツリと吹かなくなつたそうです。……僕の所に來てくれる村の人達は皆、僕を激励してくれたり、慰めてくれたりしますが、小父さんだけは、そんな事は一言も言いません。……黙り屋のせいだけでは無いのです。小父さんには、そんな事は言えないのです。僕のことをシンから心配すればする程なんにも言えないのです。(末吉は懸命に書き取つている。そのペンの音が四邊の静けさをかえつてハッキリさせる。儀八は煙管をくわえた



まゝ次郎をマチマチ見守っている……小父さんは僕を見てみると、自分の古疵が痛むので  
す。小父さんには他人事では無いのです。……僕八爺さんは日露戦役の傷兵です。脚と、  
それから腰もやられてるそうです。なんでも疵が治つて歸つて来てからも、永い間腰  
が立たなかつたそうです。村では、かなり良くしてやつて、腰が立つようになると、百  
姓仕事も出来まいと言うので、皆で水車を建て、やつたりしたそうです。ポツポツ働い  
ていさえすれば、食べて行くのに不自由は無かつたと思います。……しかし時勢も今と  
は違つていたらしく、三年五年と日が経つ内にはつらい事も有つたらしいです。それま  
で一緒に暮していたおかみさんと夫婦別れをしたのも、その頃だそうです。子供が出来  
ないからと言うのだつたそうですが、ホントの事はわかりません。……小父さんが急に  
人と口を利かなくなつてしまつたのも、その時分からだそうです。ですから、小さい頃  
から僕のおぼえてる爺さんは、黙りこくつた男で、笛ばかり吹いて、僕等を相手に馬  
鹿囃しを教える時位にヤツトにこにこしていました。……僕は今度村へ戻つて来て、ヤ  
ツトその頃の小父さんの氣持が身にしみてわかるようになりました。……ひがんで見た  
り、ひねくれたり、うらんだり、又、悲觀する氣持ではありません。そんなものでは無

いのです。僕にはうまく言えませんが、……つまり、生きて行く上の腹がまえがスツカ  
リ變つてしまうんですから……今までの量見が、根こそぎ無くなり、そんなものが、な  
んの役にも立たなくなつてしまうのです。……つまり今後生きて行く上での安心立命と  
言うか——』……(言葉をとぎらせて考えている。その盲いた兩眼が儀八の方を向いている)

末吉 ……(セッセと書きながら)なんの役にも……安心リツメイのリツと言ふのは?

次郎 立つと言う字だよ。立つ命だ。……いや、そこんとこ消してくれ。僕にはうまく言えま  
せんがの所から消してくれ。

末吉 うん……(消す)そいから?

次郎 ……『今も、小父さんの水車の音が僕には聞こえて來ます。しつかりしろ、早く、立ち  
直つてくれ、俺の様にはなるな、俺の様にはなるな……小父さんが心の中でそう念じて  
呉れているのが、僕には手に取るようにわかります。……ありがたいと思います。……  
しかし、僕は馬鹿なのか、又、特別に我慾が強いのか、いつまでたつても、僕の腹はホ  
ントにきまりません。……病院でもお願いして、眞宗の講義やキリスト教の説教も何度  
も聞かせていただきましたし、それから、禪宗の偉い老師が二ヶ月も来て下さつて話し



て貰つた事もありますが、結局、迷いが取れません。……何かわかる様な気がする時もあるが、もう少しの所で、わからなくなつてしまいます。……僕はもともと生れつき馬鹿なのでしよう。それが眼が見えたころは気が附かずに居られたのが、盲目になつたために、急に飛び出して来たのだと思います。……戦争のためではありません。僕はおそかれ早かれ、こんな馬鹿な自分の正體にぶつかつて、迷つて苦しまなければならぬ性質を持つていたのです。つまり運命なのです。……どんなに苦しくとも、僕は宗教だとか、他人の手を借りずに自分一人の力でこの運命と戦つて行かなくてはならないのです。……それだけの決心はつきました』

末吉

……ホントに、これ、誰に出すんだ？

次郎

黙つて書いてくれ。頼むから黙つて書いてくれ。

末吉

だつて、こんな事書かなくなつたつて、いゝぢやないか。

次郎

書かなくちやならんだ。それを書かんと、後の話がわからんだ。

末吉

そんなら、その人にこんだ會つた時話せばいゝ。

次郎

口ではチヨツト言えねえんだよ。……お前書くのがいやか？ いやなら、ほかの人に頼

む。

末吉

いやぢやないけど、つらいんだよ。僕あ……僕あこんだけ兄さんの事を思つているのに

次郎

兄さんの苦しい氣持を半分でも分けて貰えねえと思うと――。

末吉

ハハハ(寂しく笑つて)馬鹿なことを言う。……とにかく頼む。こりや大事な手紙だから。

次郎

……(しぶしぶ又紙の上にかきみ込む)そいから？

行を變えて。……『たゞ、今まで生きる上のメドにして来たものを根こそぎ無くした所から、生きて行かなければなりません。どうして見當を附けて行けばよいか？……眼の事ではありません。自分の量見のことです。……僕には何もかも、よくわからないのです。たゞ、僕にわかっている事は、今迄自分が持つていふと思つていた物を一切合切捨てしまつて、ホントの赤ん坊のように何一つ持つていない所から出發する外に手は無いとやることです。……一度、一切を捨て切つて、赤はだかで立ち直る外に手は無いとやる事です。一年間、考えに考えつづけた末、それだけは近頃僕にわかつて來ました。それで……』

末吉

……(ガサガサと書取りつづけ、やつと書き終つて持ちあげた顔が眞實に緊張している)兄さん！



次郎 なんだ？

末吉 俺あ反対だぞ！

次郎 ……なにが？

末吉 そんな、そんな兄さんの気持は、個人主義だよ！ 僕あそう思うんだ。普通の個人主義とはチツト違うけど、でも個人主義だよ。自分だけの利益や、自分だけの楽しみのために、ほかの人の事を考えないと言うのが普通の個人主義だが、しかし、みんなのために犠牲になつた人間が、そのために不幸になつたり不自由になつたりした自分のことを、自分一人だけでなんとかしようとするのも、個人主義だ。…僕あ、まちがつていると思う！

次郎 ……（今度は弟の抗議をはぐらかさないで正面からガツシリと受けとめて、しばらく考えていたが、やがてシンミリとした調子で）…お前の言う通りかも知れんな。だけど、そいぢや俺あどうしたらいゝんだよ？

末吉 ……（いきなり何か言おうとするが、言えない。イライラして兄の顔を睨みつけ、口をモガモガさせている）…

次郎 ……お前の気持は、わかる。…しかし問題は俺だ。俺あ、いつそ、はたからこんなに

いたわつて貰つたりしない方がよいときえ思う。気が引けてしようがないんだ。首に生れ附いたと思やあいゝんだ。…強く生きて行けるもんなら、はたから何をして貰わなくても、チャンと生きて行けるんだ。問題はそんなことぢや無いよ。…第一、お前はすぐギセイと言うが、俺なんぞがそんな事言つたら、両手兩足もぎとられたり、いや、死んじまつた何十萬——現にお前、この村にだつて、どいだけ有るかわからん、中には一けんの家で二人も息子がとられちまつたうちだつてあるんだ——そんなところでは、どうなるんだ？…戦争の事あ、いまさら、なんにも言いたくない。またなんにも俺にや言えはしない。たゞ、戦争をしたなあ人で、自分はたゞギセイになつたゞけだと言うふうには自分だけキレイな口をきいてなんぞおれないんだ。ボンヤリしてゝ、人の尻馬に乗つて、あんなばかな、まちがつた戦争に引きずられて行つたのは、やつぱり自分なんだからな。

末吉 そりや…そりや、戦争はまちがつて居た！ 今後もう、どんな事があつても、もうイヤダ！ しかし、それだからと言って——いや、それだからこそ——つまり、これから戦争なんか引きずられないために、兄さんやそのほかの、戦争でいためつけられた人



たちの事を、おれたちは、自分たちみんなの事がらとして考えて行かないやならないんだ！（突つかよつて行く。儀八は黙々として聞いている）そう思うんだ俺あ！ それにだよ、今度の戦争が正しくなかつたから、戦争のギセイになつた人もうつちやつて置けと言うリクツは無いんだ！ それとこれとは別だ！ おれたちがギセイになつた人たちの事をシンから考えてやつて行く事を遠慮することは、いらんと思うんだよ！

次郎 ……わかるよ、わかつてる。俺の言つてるのは、それとは、べつなんだ。……ほかの人がどんなに自分のために考えてくれてもだ、それとはべつにだな、自分だけで始末しなきゃならん事が人間にや有るんだ。

末吉 な、なぜ兄さんは、そんな自分一人で寂しい事ばかり考えるんだ。

次郎 寂しか無いぢやないか。……それとこれとは問題が違うんだ。俺はこれからシツカリと生きて行こうとしているんだ。

末吉 だから、それには僕も大きい兄ちゃんもお父つあんも、嫂さんも、そいから兄さんの力に喜こんでなつて行こうとする者は、いくらでも居るのに、兄さんは自分一人で――

次郎 そうぢや無いと言つたら。俺は自力で生きて行かなくぢやならんだ！ 実際上は結局

みんなの世話になるだろうが、しかし、世話になろうとする量見が少しでも有つちや、とても腹は据わらんだ。それを言つてゐるんだ。……俺あ今後、誰の重荷にもなりたく無いんだ。

末吉 そ、それだ！ 兄さんは、それだ！ 兄さんの本音は、それだ！ 兄さんは馬鹿野郎だつ！ 俺あ、そんな重荷だなんて、そんな――（くやしさと悲しさにこらえ切れず、聲をあげて泣き出す）

次郎 泣くな。

末吉 馬鹿だ！（泣く）

次郎 泣くなと言つたら。末！……わかつてるんだ。……泣くのよして、次を書いてくれ。

末吉 俺あ、こんな手紙書くの、もう、いやだ！（ペンを投げ出す）何がクソ！

次郎 そうか。ぢや頼まん。……こりや俺には大事な手紙だ。どうしても一度は書かなきゃならん手紙だ。それに、チョツトほかの人には頼めん。だけど、お前がいやなら仕方が無い、誰か搜す。

末吉 ……（次第に泣きやみ、寂しそうな兄の顔を見ている中に投げ出したペンを取り上げる。掌で涙を



拭きながら、紙の上に再びかき込み込む）書くよ、兄さん、書くよ。

次郎 そうか。そうしてくれ。その代り、あとは極く簡単に言う。十行か二十行だ。いゝかい？

末吉 うん。

次郎 ……『それで、こんな事を言うと、非常に出しぬけの様ですが』（考えている）……『僕としては、今迄考えに考えた末ですから、そのつもりで読んで下さい』……『僕は、この際あなたとの結婚の約束を、一應、取消したいと思ひます』

末吉 （びつくりして）あ！ 夏子さんか——！

次郎 何も言うな！ 黙つて書け！ なんか言つたら承知しないぞ。黙つて俺の言う通り書け！（兄の言葉の強さに末吉は威壓されて何も言えず、左手で頭をおさえている）いゝか！『くだくだしい理窟や、氣持など、私は此の際、一切言いたくありません。……言つても仕方ありません。たゞ、永い間僕に盡して下さいましたあなたの氣持に、しんから感謝いたします。……こんな手紙を差し上げると、……うぬづかれかも知れませんが……あなたを悲しませるかも知れないと思ひましたが、われわれは今、そんな一時的な悲しみなど

の事を言つていられる時では無いと思ひます。どうか、そんな悲しみから一日も早く立ち直つて、僕の事など考えず、すべてを自由に考えて下さつて、元氣よく幸福にやつて行つて下さるよう、心から祈ります。……僕に對する一時の感情的な同情のために、あなたは、自分をいためてはなりません。……僕には今後一人でやつて行くだけの力は既に出來ています。……あなたは自由です。……どうか』（ブツンと口述がとぎれる）

末吉 ……（齒を食いしばつて書き終つて、兄の顔を仰ぐと次郎は見えない眼でヂツと遠くの方を睨むような顔をしている。その視線の先には黙々たる儀八が居る）……兄さん。

次郎 ……。

末吉 こりや、口出しをするんちや無いんだよ。口出しをするんちや無いけれど、夏子さんはそんな人ぢや無いよ。……そんな女ぢや絶対に無い。わかりきつてゐるぢやないか。兄さんが出征して以來、約束を守つて、あゝして夏子さんがチャンとして働いて……内の加勢などにもしよつちうやつて來てくれたりしてゐるの、知つてゐるぢやないか兄さんだつて！ ……（次郎が返事をしないので仕方なく）夏子さんが此の前やつて來た時に、あんまり黙つていたので、そいで、兄さんはそんな風に考えたのかも知れないが、あんなにた



くさんが詰めかけている、遠慮はあるし、お茶を出したりなんかしなきゃならんで忙しいし、口をきいてゐる暇はない。

次郎 いよ。……もう、いよ。

末吉 口こそきかなくなつて、兄さんを見ている夏子さんの顔を一目でも兄さんが見られたら、こんな事を言える道理が無いんだ。

次郎 違うんだ。俺はそんな事を言っているんぢや無いよ。

末吉 ひがみ根性だ兄さんの。

次郎 ひがんでなんか居ないよ。お前にや、よく解らんのだ。ひがみ根性とは、まるつきりあべこべの氣持だ。

末吉 でも俺あ、こんな手紙出すの、いやだ——

次郎 まだ言うか！ 俺がこれほど眞剣に頼んでいるのに、貴様まだグズグズ言うんだつたら——。

末吉 (兄のけんまくにビククリして) 出すよ。出すにや出すけどさ。……

あたりの静けさの中に、儀八が口の中でプツプツ何か言いはじめた聲が聞こえる。聲が低いし煙管をくわえたまゝだし、何を言っているかはわからないが、次郎は耳ざとく聞きつける。

次郎 ……誰だよ、そこに來たなあ？

末吉 (これも振返つて) なんだ、儀八小父さんぢやないか、びつくりさせるよ。いつ來たの？

儀八 ……(返事はしないで、煙管を口から離し、トントンと縁側で吸いがらを叩いて、新らしく煙草を詰める)

次郎 小父さん、毎日済まんなあ。

儀八 う？ ……うむ。(マツチをすつて煙草に火をつける)

次郎 一度、笛を聞かせて呉れんかなあ。頼まあ。

儀八 よしにしとけ。つまらんよう。……(又黙々として煙草を吹かしている)

そこへ、少し離れた所から響いて來るバババン、バババン、ババ、バン、バンバンという音。はじめ何の音ともわからぬが、次第に近づくに従つて、それは洋式の小太鼓をバチで叩く音であること



がわかつて来る。音は人の歩調に合せるような一定のリズムを取つて、近づいて来る。

次郎

……なんだ、あれは？（儀八も末吉も耳をすまして……間。小太鼓の音は元氣よく益々近づいて来て、それと共に歩いて来る多勢の人達の氣配や足音まで聞きとれる程になる）

末吉

あゝ、来たな！（言うなり、書き上げた手紙を兄の膝の方に押しやつて置いて、パツと庭に飛び降りて、小走りに庭を廻つて消える。その間にも小太鼓の音と人々の足音と氣配は近づき、此の家の門口まで来ると、誰か「止め！」と號令をかける聲がして、小太鼓の音が停止する。……それらの氣配を次郎も儀八も黙つたまゝで聞いている。短い間。……末吉、ニコニコしながら、門口の方から此方に戻つて来る）兄さん、青年團のバンド（〓その附近の團體が實際に出演してくれた場合は、その實際の名を言う、以下、地名、人名、團體名、その他の個有名詞は、さしつかえ無い限り、實際の名を言うこと）が来てくれた！なんかやつて聞かせて呉れるそうさ。そこから、學校と、それから有志の人達も一緒だ。

次郎 そうか。

言っている間に、プラス・バンドを先頭に門口の方から庭を廻つてゾロゾロと入つて来る人達。人数は適宜でよいが全員で二十人が最も好適であろう。バンドは十人位の青少年から成つて居り、全員粗末な制服をキチンと着て、各自樂器を持ち、一人の指揮者から引率されている。この指揮者は最後まで奏樂の指揮だけで無く、此處にやつて来た二十人ばかりのプログラムの全體の司會者兼進行係りを兼ねる。バンド以外の訪問者十人の中には、お婆さんが一人、若い女の人が一人、村役場の助役さんと言つた様子の袴をはいた老人が一人、野らからたつた今あがつて来たばかりと言つた様子で手拭いをスットコかぶりにしたまゝの中年過ぎの農夫が一人、町の女學校の三年生に通つていると言つた年かつかうの制服の女學生が一人、そして残りの三四人はまだ低年級の小學校の女生徒達。全員の様子は形式張らず素朴きまるもので、以下行はれる演奏も唱歌も演技も、決して洗練されたものではないが、眞率な自發的なものであり、全員が殆んど知り合い同志か顔見知りのため、全體に儀式張つた固苦しさは無く、たゞ眼の見えぬ人を面白がらせようと言ふ誠意と、なごやかさにあふれている。實際に於て、多少のしくじりが有つても構わぬから、進行係りの機轉でドシドシ、迅速に運んでやる。



指揮 緒方さん、今日は。こないだの晩は失敬。

次郎 やあ會津君か。どうも、わざわざ——

指揮 いや、わざわざと言はれちや、却つて恐縮だあ。丁度今日はバンドの練習日してね。一  
チョット時間が有つたもんだから、あんたに一度、こんなものが出来たつて報告かたが  
た行こうぢやないかつて皆が言うもんだから。そしたら、丁度來合せていた杉田さんや  
なんかも來ると言うしね、そのほか、學校からも來てくれるし、古賀さんこの妹さん  
や、直吉の小父さんまで途中から附いて來てくれた。なんの事あ無い、こゝいらの藝人  
が揃つちやつたんで、これちや一つ緒方さん所を手はじめに、四五軒慰問に廻ろうと言  
つてるところですよ、ハハハ。

次郎 ありがとう。皆さん、すみませんねえ。

老人 やあ、今日は固苦しい話は抜きぢや抜きぢや。おゝ、水車の儀八公も來ているぢやない  
か。

儀八 杉田さんですか。今日は、いゝあんべえで——（言いながら、遠慮して縁側の曲り角の邊  
へ身をさがる）

中年 （次郎に）次郎君どうだ、かげんは？

次郎 直吉の小父さんですか。どうも——

中年 いやあ、畑に出ていたら太鼓が鳴るでね、たまらなくなつて飛び出して來たよ、アッハ  
ハ。

次郎 おい末、皆さんにお茶を、そいから、ざぶとん——

婆 いらん、いらん——のどが乾きや裏い行つて水飲む。ざぶとんなぎ、みんなこうして庭  
に立つてるだから。

指揮 そうだ、そんなもんいらん。さ、始めるぞ。氣を附けつ！（バンド全員は位置に付き、樂  
器をかまえる）いゝね、先刻打合せた通りの順だよ。（次郎と他の人達に）練習未だ尙、日  
が浅く、まちがいましたら、お聞きのがし下さあい！（一同拍手）はいっ！

（自身も太鼓を鳴らしながら指揮。音楽はじまる。次郎と儀八の二人だけが縁側に坐つて聞き、末  
吉は兄の近くの庭上に立ち、他の一同はラッパ鼓隊を中心にして半圓を描いて斜めに縁側に向つて  
立つている。曲は明るく楽しいものなら任意のものでよい。たゞ固苦しい歌曲や、淺薄な時局便乗  
歌曲のたぐいは絶対にいけない。流行歌の中で明るく面白いものを編曲したものなど、好適であら



う。あまり長くないもの。……終る……一同拍手)

次郎 (ニコニコしながら) うまいもんだ。

指揮 次は?

女生徒一 あたいたち!

指揮

そうだ。(バンド員の一人に)加藤君、クラリオネットに付けてくれ。そら、ひのふのみ! 春が来た、春が来た……(いきなり女生徒三四人が一齊にその歌別の歌でもよいを歌い出し、進み出て来て、いたいけな手足を動かし踊りはじめる。クラリオネットが伴奏する)

女生徒 どこに来たあ。……山に来た、里に来た、野にも来たあ……。(更にもう一度)花が咲く、花が咲く、どこに咲く……。 (歌い踊り終る。一同拍手)

老人

やあ、うまいうまい。みんな、いゝ子だのう! (女生徒達の頭を撫で、やる)

指揮 杉田さん、今度はあなた、どうぞ。

老人

ようし、……(威儀を正して咳一咳する。一同拍手) エッヘン! (いきなり歌い出す。人柄から謡曲でも出るかと思うとさうでは無く、トテツもない聲と節である) 鳶や烏や雉子や雁金、やぶ鶯の共に鳴く音はね……ダーケロリンノ、チリンツモリンノ、ホーホケヨと、鳴くわ

いな。(一同ヤンヤと聲をあげて拍手する。杉田さん喜んで一つ二つお辭儀をする)

中年 旦那、もういつちよう! もういつちよう!

老人 アッハハ。ちや……(再び聲を張り上げる) 雨はホロホロ……稲妻ピカピカ……かみなりゴ

ロゴロと、言うて、……抱きしめたが縁のはし。(一同拍手)

中年 たまらねえ! それ、なんの歌ですかね、ジョーロリかね?

老人 いやあ、都々逸ちや。字餘り都々逸と言うてな。

中年 そうかあ! ジョーロリにしちや變だと思つた! (頭を掻く。一同哄笑する)

老人 ひどい事を言う。そいちや、やつぱし、お國ぶりを一つ出して、それでおしまい。(更

に威儀を正して、歌い出す。今度は正調だし、うまい。こゝには立山節を書いて置くが、適宜上演地方の古くからの民謡を歌う)……峰の白雪、ふもとの水、今はたがひにへだてゝ居れど、やがてうれしく、解けて流れて、添うのちやわいな、あの山越えて、逢いに來る (一同拍手)

次郎 杉田先生、ありがとうございます。

老人 いやあ、ハハハ。さあ、次だ。(女學生に) あんたもやるんだろ?



指揮 『庭の千草』でしたね？（ラッパ、鼓隊が伴奏する事になつて見えて、皆に合圖をする）  
女學生（進み出て）ええ。でも、私、下手だけど。……  
末吉（兄に）新道の古賀さんとこの徳枝さんだよ。  
次郎 へえ、徳枝さんが、そんなに大きくなつたのか。

言葉の中にバンドの『庭の千草』の伴奏がはじまる。女學生は器量一杯に歌う。うまい。歌い終り、一同拍手。

176

次郎 徳枝さん、ありがとう。なかなか、うまいや。（女學生顔を赤くしてコソコソと人の後にかくれる）

きんらんどんすの帯しめながら……（いきなり歌い出しながら、歌に合わせて踊り出して行く。女の子のために振付けられた舞踊で、この老婆から誰も豫期していなかつたものである。ワーツと人々聲をあげる。お婆さんは、しかし大まじめで、歌聲も手振足附も若々しく踊り抜く。小學生の孫からでもならつたものと見え、動作から口附きに至るまで、ひどくあとけ無い）……花よめご

りようは、なぜ泣きなさる……（誰かゞそれについで歌い出したのをキツカケに、一同の齊唱となり、それに楽器も鳴り出し、元氣一杯に踊りおさめる。一同拍手）

婆 やれやれ、腰が病めるぞ！（人々笑う）

指揮 ハハハ、ところで、儀八の小父さん、お前も囃しを一つ頼むよ。

儀八 やあ。……（吹こうとしない）

末吉 小父さんが笛を吹いて呉りや、俺も踊る。面を取つて来るからな。

儀八 よしにしろ。つまらねえ。（一同の調子に乗つて行こうとはせず、尻こみをして角の障子のわきに、にぢりさがる）

末吉 吹きやいゝのになあ。

中年（進み出て）よし、ぢや俺が一世一代と言うところをやつつけべえ。ごめんなんし。（キリリと向う鉢巻をして、腰をひねつて、凄い聲をひねり出す）ハア……ア……ア……アまかりつん出た三角野郎が、……（一同喚聲。この人得意の入木節らしい）……チョイト、説き出す一節こそは……。

婆 よしや！（いきなり又飛出して来る。いつの間にか、すそをはしよつて、その邊にあつたらしい

177



古い大きな麥わら帽子を持つている。それを見て一同拍手）ハア、スッチョイ、スッチョイ、スッチョイナ！（腰を振り元氣一杯に踊り出す。先の新舞踊とちがつて、今度は本領に歸つて自由調達である。バンドの太鼓までが拍子を入れはじめ）……やつば、この方がえゝわい！  
中年（野良聲を空に響かせる）ところ四谷の新宿町で、鈴木主水と言うさむらいは……。  
婆 ハア、スッチョイ、スッチョイ……。  
老人 小母さん、腰つきがえゝぞつ！

一同笑いさどめくうちに、八木節と踊りの一節は終り、破れるような一同の拍手となる。次郎も心から嬉しそである。全員一つに溶け合つた和氣が満つ。たゞ儀八一人だけが、不機嫌と言う程でも無いが、やつぱり無表情で煙草を吹かしている。

指揮 これでおしまい。次郎さん、疲れるとよく無え。では最後に、もう一つやり、やりながら行進に移る。（フランス・バンド一同に）いゝね？ はい！（自ら小太鼓をバババン、バババ……と打ち鳴らす。ラッパが鳴り出す。やがて各樂器が有りつたけの大きな音を出す行進曲がは

じまる。恐ろしく元氣よく、やかましい。……曲の眞中あたりで）ちや、お大事にね次郎さん。失敬しましたあ！（言いながら、奏しながら先頭に立つて、入つて来た門口の方へ庭を出て行く。バンド一同も、それに従つて来た人達も歩調を合わせてドンドン出て行く）

婆 又來るで。大事になあ！

次郎（頭をさげながら）ありがとう存じました。

老人 ちと、役場にも遊びにおいで。

次郎 はあ、ありがとう。

次郎と儀八を残して、皆出て行つてしまふ。バンドの音は吹奏をつゞけながら路に出て行き、角を曲り次第に小さくなり、やがて遠ざかつて行く。……間。次郎と儀八、黙々として相對している。……やがて吹奏の音も消え、静かになる。今迄にぎやかであつただけ、特に最後の行進曲がやかましかつただけに、その後の静けさが身にしみる様に強く感じられる。

次郎 ……儀八の小父さん。



儀八 ……(返事をせぬ)

次郎 小父さん……(儀八答えず)……行つちやつたのか。(寂しそうに一人ごと)

短い間。……そこへ一同について表に行つていた末吉が戻つて来る。

末吉 あゝ面白かつた。良い人ばかりだなあ。

次郎 うむ。みんなあゝして、わざわざ来てくれる。……ありがたい。ホントに俺あ……しつかりしなくちやならん。(手紙をいちづつている)

末吉 だけど、急に行つちまわれると、あとが馬鹿に寂しいね。まるで潮が引いて行つちまつたようだ。

次郎 儀八爺さんも一緒に行つたんだな?

末吉 う?……(背後を振り返つて見るが、儀八は先程庭先の演藝が始まる時に皆に遠慮して坐をしごつて縁側の曲り角を少し曲つた所に坐り直しているので、末吉の所からは眼に入らぬ)……うん、行つちやつた。

次郎 ……(手紙を出して) これ、もう少しだ、書いてしまつてくれ。

末吉 うむ……(ふしうぶしうぶに再びペンを取る)

次郎 どこまで書いたつけ? 今の騒ぎでメチャメチャになつちまつた。すまんけど、読み返してくんないか。

末吉 初めから?

次郎 そうだな、いや初めの所はいゝから三分の二位の所から。

末吉 ホントに、兄さん、俺、頼むから、この手紙出さないくんねえかなあ。兄さんは考え過ぎると思うんだよ。……夏子さんはそんな女ぢや無い。あゝして町のハタ場なぞに働きに出るようになったのも、兄さんと一所になる準備のためだと思うんだよ。

次郎 ……いゝから読み返してくれ。

末吉 ……(何と言つても兄が受付けそうになく、あまりくどく言うと又怒りそうなので、しかた無く、読み返しはじめ) ……えゝと、ぢや讀むよ。……『しかし僕は馬鹿なのか、特別に我慾

次郎 ……チョ、チョット待つてくれ。が強いのか、いつまでたつても、僕の腹はホントにきまりません』——



末吉 ちがつた？

次郎 いや……(四邊の静けさに耳をすまして何か聞いている)あれ、なんだ？

末吉 なんだよ？……(自分も耳をすまして)……又、水車かい？

次郎 違う、水車の音はチャンと聞こえてる。別だ。ほら、トントン、パタリ……森の角の邊の家かな？ お前にや聞こえんのか？

末吉 聞こえんなあ。……あゝ、ヤット聞こえる。ありやハタを織つてんだ。

次郎 え？ ハタ？ 近頃、ハタを織るようになったのか、また？

末吉 うん、方々の家で、以前使っていた古いハタを引っぱり出して織つてる。内でも嫂さんが少し暇になつたらやるんだつて、こないだ手入れをしていたよ。ありや、死んだおつ母さんが使つていたんだつてね？

次郎 そうか。……そいで、何を織るんだ？

末吉 銘仙だとか、絹と毛を混ぜた大幅物だとか、そいからホームスパンなども織る。材料を持たぬ家には町のハタ場から貸して呉れて、織れたのは検査してハタ場で引取つてくれるんだよ。縣でも農家の副業に奨励金など出してくれるんだ。そいで助かつている家が

随分あるんだよ。そうだ、夏子さんの働いている工場でも此處いらにかなり仕事を出しているんだよ。

次郎 そうか。……いろいろになるもんだな。あんな古い道具が、今頃になつて又使い道になるのか。……そうか。(音に聞き入っている。おさの音は、微かに、しみ入るような響でトントンハタリ、トントン、ハタリと流れて来る)……

末吉 ……(これも、思わず聞き入つてゐたが、フトわれに返つて)ちや、又讀むよ。

次郎 チョ、チョット待つてくれ。……(なをも耳を澄す)

末吉 どうしたの？

次郎 あゝ、いや、……讀んでくれ。

末吉 『病院でもお願いして眞宗の講義やキリスト教の説教も何度も聞かせていたゞきましたが、それから禪宗の偉い老師が二ヶ月も来て下さつて話してもらつた事もありますが、結局迷いが取れません。……何かわかるような氣がする時もあるが、もう少しの所でわからなくなつてしまいます』



ユツクリ讀みつけている所へ、門口から庭を廻つて夏子。質素だが小ざつぱりした着物に草履を穿いた落着いた美しい女である。いつたん門口から案内を乞うても誰も出て来ないので庭口へ廻つて来て見たらしい様子。手に次郎へのみやげ物をさげている。不意に現われてワツと言つて次郎をびつくりさせようとも思つたのか、足音を盗んで、いたづらそうにニコニコしながら庭の入口の所まで来るが、末吉が手紙を讀んでいるので聲をかけるキツカケをなくして、黙つて立つて、笑いそうになる自分の口を片手でをさえたりしていたが、次第に手紙の内容に引き込まれて、まじめな顔になり、そのまゝで聞いている。次郎は勿論、末吉もそれに氣が附かない……。

末吉 『……僕はもともと生れつき馬鹿なのでしよう。それが眼が見えた頃は氣が附かずに居られたのが、盲目になつたために急に飛び出して來たのだと思います。……戦争のためではありません。僕はおそかれ早かれこんな馬鹿な自分の正體にぶつつかつて、迷つて苦しまなければならぬ性質を持つていたのです。つまり運命なのです』……聞いているのか、兄さん？

次郎 う？ うむ……（末吉からそう言われる程、彼は末吉の聲の間を縫つて響いて來るおさの音ばかりに聞き入っている）……おつ母さんが——（無意識に言う）

末吉 え？

次郎 ……（我れに返つて）いや、讀んでくれ。

末吉 『……どんなに苦しくとも僕は宗教だとか他人の手を借りずに、自分一人の力で、この運命と戦つて行かなくてはならないのです。……それだけの決心はつきました。たゞ今迄生きる上のメドにして來たものを根こそぎ無くした所から生きて行かなければなりません』……どうしたの、兄さん？

次郎 （うつ向いて、えりくびの邊を片手で撫でるような動作をしている）……

末吉 くびが、どうかしたの？

次郎 ……（だまつて同じ事を繰返している。おさの響は、トン、ハタリ……トントン、ハタリと流れて來る）

末吉 氣分でも悪いのか？

次郎 ……（尙もだまつて、今度はえりくびから、着ている着物の肩から襟の邊を撫でる）

末吉 兄さん！（此方に立つている夏子も、次郎の様子が先程から變なので心配になり、この時近寄つ



て行きそうにする)兄さん! ホントにどうしたんだよ?

次郎 なんだい? (やつと持ち上げた頬に、盲いた兩眼から涙が垂れ、光っている。夏子はそれを一目見ると、又動けなくなつてしまふ)

末吉 (びつくりして) どうしたんだい?

次郎 ……お前は小さかつたから知らんだらうが、この着物もお母さんが織つて呉れたもんでな……思い出しちまつた。

末吉 ふうん……でも、泣かなくつたつて、いゝぢやないか。

次郎 泣いてやしない。(ニッコリ笑つて見せる)……讀んでくれ。(つとめて落着いてはいるが、心の底で強く昂奮しているらしく、それを自らおさえるためか、足を伸ばし、縁先にぬき捨てゝある藁草履を足先さぐりにして穿き、静かに庭先を歩き出す。風の向きが變つたのか、おさの音は少し大きくなり、階調をなして流れて来る。次郎は首を傾けながら、それに聞き入りつゝ、自分をおさえ附けるような足どりで歩く)

末吉 (その兄の様子を眼で追つていたが)えゝと、どこからだつて……『たゞ、今まで生きる上のメドにして来たものを根こそぎ無くした所から、生きて行かなければなりません。ど

うして見當を付けて行けばよいか? 眼の事ではありません。自分の量見のことです。僕には何もかも、よくわからないのです。たゞ僕にわかっている事は』

手紙の文句を聞いている内に、夏子は次第に泣けて来る。手で顔を蔽い、立つて居れなくなつて、静かにしやがんでしまふ。

末吉 『今迄自分が持つていていると思つていた物を一切合切捨てゝしまつて、ホントの赤ん坊のように、何一つ持つていない所から出發する外に手は無いと言ふ事です。一度、一切を捨て切つて、赤はだかで立ち直る外に手は無いと言ふ事です。一年間、考へに考へた末、それだけは、近頃僕にわかつて來ました。それで……こんな事を言ふと非常に出しぬけのようですが、僕としては今迄考へに考へた末ですから、そのつもりで讀んで下さい。……僕は此の際、あなたとの結婚の約束を一應取り消したいと思ひます』

夏子ギクリとして立ちあがる。思いがけない手紙の内容に、涙に濡れた兩眼をキラキラ光らせて、



歩いている次郎のちよとど此方を向いている顔を、睨むようにヂツと見つめる……

次郎

……(その夏子の立ちあがった微かな氣配に)誰か来たのか? 儀八の小父さんか? (儀八は三人からは見えない縁側の曲り角の奥に、やつぱり坐つて、くわえ煙管で此方を見ている)

末吉

いや、誰も……(と言いながら、振返つて夏子を發見する。しかし夏子が『黙つて、黙つて』と手で制する。末吉はその夏子と兄の様子を見くらべていたが、つとめて平氣な聲で) やあ、誰も來ない。

次郎

そうか。……讀んでくれ。

末吉

……(チョット夏子の表情をうかづつていたが、仕方なく讀む)『くだくだしい理窟や氣持など私は此の際一切言いたくありません。言つても仕方がありません。たゞ永い間僕に盡して下さつたあなたの氣持にしんから感謝いたします。こんな手紙を差しあげると、うぬぼれかも知れませんが、あなたを悲しませるかも知れないとも思いましたが、われわれは今、一時的な悲しみなどの事を言つていられる時では無いと思ひます。どうか、そんな悲しみから一日も早く立ち直つて、僕の事など考えず、すべてを自由に考えて下さつ

て、元氣よく幸福にやつて行つて下さるよう、心から祈ります。僕に對する一時の感情的な同情のために、あなたは自分をいためてはなりません。僕には今後一人でやつて行くだけの力は既に出來ています。あなたは自由です。どうか』……そこまでだよ。

夏子は尙も、次郎の顔を見守つている。次郎の氣持がわかればわかる程、しかし思つても見ない心外な事を聞き、悲しみと怒りと愛情とが強くこぐらかつて、石の様になつている。その様子を末吉は、どうしてよいかわからず、ヂツと見ている。

次郎

えゝと、もう少し、……もう二三行書いて……(フツと言葉を切つて、歩くのをやめ、これも石の様に立つたまゝ、益々高く多くなつて響いて來るおさの音を聞いている。……次第に顔が垂れ、うつ向いてしまふ。そのうなだれた自分のえりくびの所を片手で撫でゝいた手が無意識のうちに、グツと首すじを掴む。……夏子も末吉も儀八も、次郎を見守つたまゝ無言。……永い間。さわやかな潮ざいの様に流れ寄つて來るおさの音)

次郎

……(フツと顔を上げ)そうだ。末、その手紙、やぶいてくれ。やぶいちまつてくれ。



末吉 え？ ……やぶく？ ホントかい？ (眼を輝かしている)

次郎 うむ。……いや、はじめの方はいゝからな。後の、『こんな事を言うとは非常に出しぬけのようですが』の所から、やぶいて捨てゝしまつてくれ。……そして、すまんけど、その代りに、もう少し書いてくれ。

末吉 いゝとも！ (手をふるわせながら、レターペーパーを二三枚やぶき捨てる) 夏子さんが、よろこぶ！ よろこんで——。それで……それで、こんだ何て書くの？

夏子、激動のあまり、立つているのにたえず傍の垣根につかまる。

次郎

……いゝかい？ ……『昨日あたりからやつと、人々が詰めかけて来なくなり、こうして静かに坐っていると、氣持が非常に落着いて来ます。……遠くからおさの音が響いて来ます。……私には初め、それが何の音だかわかりませんでした。それほど遠い昔、小さい時に聞いたぎりの音です。……それは人を、生れ故郷に連れ戻すかの様な、何とも言えない良い音です。……私はだしぬけに、まるで昨日の事のように、死んだ母がハタを

織っていた姿を思い出しました。……それは僕の見えない眼の中に焼き付いているような感じがします。……末吉はやつと生れたばかりの赤ん坊で、僕はまだ九つか十位でした。母はその前から眼が悪くて、細かい物は見えないために、織物の糸目の数を僕に数えさせました。しかし僕は遊び盛りであつたのと、めんどろくさいので、なるべく逃げるように逃げるようになっていました。……或る日のこと、學校から歸つて来ると、例の通りハタを庭に持ち出して織りにかゝつていた母が、又糸目を勘定してくれと言います。……僕は友達の所に遊びに行く約束が有つたので、ブンブンしながら、いゝかげんに数え上げて家を飛出して行きました。……夕方になつて歸つて来ると、ハタに寄りかゝつたまゝ母がボンヤリと青い顔をしています。僕の姿を見ると、先程お前が勘定してくれた糸目の数はまちがつていたんぢやないかと言います。そんな筈は無いと僕が答えると、でもなんだか織り違えて困つたと言いますから、僕はもう一度勘定してみました。……まちがつていました。母が織り違えをしたのは、そのせいでした。僕は子供心にも濟まない氣がして、黙つていると、母は弱い聲で、やつぱりまちがつていたんだらうと言ひ、しばらくしてから、母ちやんは一反損をした、これを賣つた金でお前と末ちやん



にいろんな物買つてやろうと思つていたら、だめになつたよ、と言います。……叱ると言うのでは無く、とても悲しそうな聲でした。母はふだんから、めつたに僕達を叱つた事はありません。身體が弱いせいだつたかも知れませんが、それよりも、生れつきその様なやさしい性質だつたらしいです。……さすがの僕も母に對してひどく悪い氣がして、だまつて織り損いの布目を見ていたら、不意に、この襟くびの所にボトリボトリと水が垂れて來たので、ビックリして母の顔を見上げると、母は僕の肩にもたれたまゝ、聲は出さないうで涙を流していました。……僕も急に悲しくなつて泣き出しました。そんな事がありませんか？

末吉

うゝん（涙ぐんで、鼻をすゝり上げながら懸命に書取つて行く。……書き終つて）書けた。……死んだおつ母さん、そんな人だつたの？

次郎

お前がまだ小さかつたから、憶えていないだろうな。……そんな人だつた。……叱られるより、俺あ、悲しかつた。……それ以來、俺あ糸目の勘定だけは念を入れてチャンとしたよ。おつ母さんがハタを織るのは、内の家計を助ける仕事だつたしな。……（縁側に腰をかける。夏子は相變らず、垣根の所から次郎を見ている）……次ぎ……『それを今急に僕は

マザマザと思ひ出しました。……思ひ出させてくれたおきの音に、僕はシンから感謝します。此處へ歸つて來てよかつたと思ひます。……何だか知れませんが、僕の心の中はいつべんに明るくなつた様な、いつべんにこだわりが無くなつた様な氣がします。……僕は今迄ホントに馬鹿でした。自分で自分をしばつて身動きの出來ぬようにしていたのです。ひがみだと言われても仕方が無かつたと思ひます。それに氣が附きました。……なつかしい、なつかしい母は死んでしまつて、今頃になつてからも、僕達を守つてくれていたのです。……母はシンから僕達を愛してくれていました。愛しているだけで、僕達が母の言いつけに背いても、たゞ愛してくれるだけで、僕達にあゝしろこうしろとは言ひませんでした。僕がどうしても中學にあがらせて呉れと言つた時も、家計の苦しいのをミスミス承知で、とにかく三年まで行かせてくれたのも母です。それから僕がグレ出して東京に行き、病氣になつて戻つて來ると、よろこんで、いたわつて看病して呉れたのも母です。……僕だけで無く、兄さんに對しても末吉に對しても、なんでも好きな事を自由にやらせ、たゞ自分は靜かに僕達を愛して呉れていたのが母です。……つまり母は、愛すると言う事を知つていただけで、その代りとして自分が愛される事は少しも